

わたしの小さな
たより

第二集



松尾 周子

Matsuo Kaneko



1997年11月21日



1999年10月13日 誕生日 贈られた花々と





2000年5月18日 国際ソロプチストより女性栄誉賞を頂く



2001年9月 新兵庫県知事との交わり

わたしの小さなあなたより

松尾さんの汀

改めて「みぎわ会だより」を読んでみて感じたことが二つある。一つは、この便りが「みぎわ会」は、どんな老人ケアを目ざしているのかということを利用者と家族、地域へ伝える大切な役割を持っていることである。

巻頭の松尾さんの言葉は、施設の建設のこととあれば、いろいろな人との出会いや季節の話題もある。しかし、そこを貫いているのは、松尾さんの老人福祉にかける愛情ゆたかな想いである。この巻頭のことばの中から感じる安心感が何よりも得難い。たぶんこれを読んだ家族や地域からの反応は思うようには返ってこなかったと思う。しかし、安心という目に見えない反響は計り知れないものがあつたのではないだろうか。

もう一つ感じたことは、この便りは松尾さんが七六歳から八〇歳にかけての施設長職を務

めた最後の時期の執筆になっていることである。若い時からご苦勞されて、医師として施設長として、真一文字に歩んできた道の中で、松尾さん自身が高齢者になって、ふっと立ち止まり感じたままを記した貴重な記録になっている。

老人ホームでも企業でも、トップの純粋な意志が見える組織は生き生きとしている。みぎわ園が、みんなが松尾さんの汀を求めて集まってきたところである。みんなのこころの拠り所として、これからも長く巻頭のことばを書きつづけてほしいものである。

一九九五年一月

全国社会福祉協議会

事務局長 鈴木 五郎

序

「わたしの小さなたより」というタイトルそのままの「たより抄」を発刊したのは七年前のことです。

思いがけず傘寿を頂いた感謝と、私が世話人代表として十年近く育って来た、第四回（二年に一回開催）「全国老人ホーム女性施設長フォーラム」の開催に間に合えばと、慌しく校正もなしで筒井書房から出版いたしました。

早、あれから七年も経ち私は「米寿」の春に至らせて頂きました。勿体なくうれしく、少しうら恥かしく、はにかむ気持です。

「みぎわ会便り」は、引きつづき毎月きちんと発刊され、二〇〇二年一月には「一三一号」となりました。毎月「五〇〇部」が各方面へ送られています。

折々に、いろんな方々から「毎月のおたより楽しみにしていますよ」とか、「全部きちんと置いてますのよ」とのお声を頂きます。

私も毎月、そういう方々を心に画き乍ら、お伝えしたい事が一パイある中から、何とか選

んで書いてまいりました。けれど「齢」は正直です。もの忘れ、文字忘れ、言葉忘れのきびしい現実を体験いたします。

今日なれば何とか出来るのではと、まとめることを思い立ちました。

「わたしの小さなたより」第二集になります。この度は自主出版にいたします。

初版に、畏友 鈴木五郎様から頂きました序「松尾さんの汀」と、私の「はしがき」に加え、みぎわ会便り、一号～四十四号の中から数十片を再掲することにいたしました。

現在、みぎわ園草創期の建物の約四、四〇〇㎡を改築しています。三年に亘る大工事です。来春十五年三月には竣工の予定です。

許されてこの眼に竣工の姿を見させて頂けることを念じています。この「たより第二集」は時々、パラパラとお読み頂ける「小さな便り」にして頂ければ幸いです。

二〇〇二年一月

松尾 周子

P. S 一回、二回と校正に長い時間を使ってしまったため、出版が遅れてしまいました。



みぎわ会 だより

第47号 1995. 2. 5 発行

共 有

うららかに一九九五年の新年が明けました。きつと幸せな年にして頂けますようにと、皆さんに祝酒を配り共に盃を上げました。

僅か半月後の十七日未明、阪神大震災が起こりました。テレビの画面に引きつけられるばかりで、殆ど茫然自失の時を過ごしました。気にかかる方々へのダイヤルはすべて不通です。私の大好きな、誇りにさえ思い、全国の友人も何回か集まって下さった神戸の街が、一瞬にして灰と瓦礫になってしまいました。

画面に見る惨状、動き出した救護の大波、又その道を閉ざす渋滞、緊急避難所の様子、世界中から送られる人、物、心の相次ぐ援助など、驚きと、畏れと、哀しさ、焦立たしさ、そして喜び、感謝の感動で、流れる涙を何度も拭ったり、時には「あ、」と嘆声を出したり、いつの間にか自分が被災者のように疲れて、落ち込んでしまった私でした。

二十三日、公演にお招き頂いていた淡路の津名町一帯が、震源地に近い大災害を受けられたことも大きなショックでした。前日二十二日に明石海峡を渡り淡路の水仙郷を訪ね、まだ見ぬ鳴門大橋を眺め且つ渡り、二十三日、淡路島七十七校の小中学校の先生方に「望まれる福祉社会への道」というテーマでお話する事になりました。

日と共に、私の心配した方々の無事が一つづつ判って来ましたが、まだ避難所で沢山の方が寒さと

不安、不自由に耐えていらっしやいます。殊に高齢の弱った方々の姿は哀しく、むしろ口惜しくも覚えるのでした。

二十九日深夜、西宮市の姉より電話。近所のお一人の老女を迎えてほしいのだが、とのこと。「どうぞ、どうぞ」と、長い話をしました。翌三十日、市の係の方へも連絡しましたが、結局こちらからお迎えにゆく事に決まりました。

三十一日は粉雪が舞う寒い朝です。「みぎわ号」のために無事に道が開かれ、無事何人でも被災したお年寄りをお連れして帰れますようにと、心を込めて祈りました。午後二時無事着、二人の救急入所者と、姉ら四人と共に帰路に就くという電話が入りました。姉らは「お風呂に入り度いの、二週間分の洗濯もさせて」とのこと。「どうぞ、どうぞ」、一生懸命すべて準備を進めました。

暖かいお風呂も夕食も、そしてお土産ののり巻十五本も注文しました。私はやっと少し明るい気分になり、救われた思いです。

被災の皆様の苦難のほんの一端を「共有」出来ることで力づけられました。淡路の学校からも皆様のご無事のお便りを頂きました。

皆様と一緒に小さな私たちの力も加えて頂いて、立ち上がって参りたいと願うばかりです。

三十一日 午後四時



みぎわ会 だより

第48号 1995. 3. 8 発行

三月、やよい

いかゞお過ごしですか、早、三月に入りました。皆様のご健勝を祈りつゝ、三月の便りを送ります。

* や よ い

三月には「やよい」という美しい呼び名があります。「イヤオウー生う」どんどん生き生き育ちゆく、という意味のようでございます。土を押し上げて伸びようとする水仙の芽に、黒い土に小さな緑の花さながらのチューリップの芽に、「やよい」を見ます。

大震災の跡地にもやよいの訪れがありますように、と祈らずには居れません。大きな深い悲しみの中にいらっしゃる方々に、どうぞ甦りの春でありますように。ご健康でこの未曾有の破壊と喪失から立ち上がって下さいますように。その為に責任をもって労して下さい、公私すべての皆様の不倒不屈のために、唯、朝夕そのご健康を祈るばかりです。

* 入 学、卒 業

三月は入学、卒業のシーズンでもあります。希望にみちた入学、よろこびの卒業おめでとうございます。入学にも卒業にも前提として、きびしい学習とむつかしい試験をパスしなくてはならないのです。

私たち高齢者も亦今日までの道程で、様々な試験に遭遇しなければなりませんでしたネ。とても解けない問題や、耐えられないテストを受けました。けれど不思議に守られて、どこからか力を与えられて七十年、八十年という長い道を通してまいりました。

それ故に、又めぐり合うやよいの春はうれしいものでございます。

* 花嫁学校

まだ私の少女時代には「花嫁学校」と呼ばれる学校がありました。女学校卒業後の一、二年、こ、では裁縫、料理、習字、生け花、茶道、行儀、身だしなみ等々、みっちり訓え込まれました。良家の花嫁となるためには大切な課程とされていました。時代は変わり、花嫁学校はもう存在していないようです。

最近になって、私は「今私には花嫁学校の訓練が必要だ」と気づきました。天国の花嫁として迎えて頂くためです。聖書には、白く輝く衣、と記されています。又、よろこびの歌を唄うとも。

これは又大変むつかしい学習と訓練です。互いの慰め合いと励まし合いがなくてはパス出来ないコースです。しかし、これが人生の最大の希望ではないかしらと考えています。

* * *

三月——よろこびと希望の春です。



みぎわ会 だより

第49号 1995. 4. 4 発行

新年度を迎えて

*ごあいさつ

花便りを聞く季節がまいりました。これは又私たちにとり、新しい年度に入ったという意識に結びつくものでもありますので、新しい気がまえの中からの頼りをお送りいたします。

皆様お変わりなくお元気にお過ごしでいらっしゃいますか。今日此頃の社会は恐ろしい不安と恐れにゆれています。大切な私たちの日本社会の病める姿に、つい暗い気分になり落ちこみがちですが、一日も早く明るく安全で健康な日本に立ち直りますことを期待と祈りをもって願うばかりです。

*振り返って

さて、みぎわ会はトップ交代の第一年を無事乗りこえ、第二年度に入ります。二年に亘る大規模修繕の初年度工事は、予定通り $\frac{3}{5}$ %をクリア出来ました。が、一月の阪神淡路大震災もあり、年間のショートステイが一據に延べ五〇〇〇人を超えました。工事中という居住面の難しさの中で、正に非常態勢の日々が続いています。まだ当分SS二五―二八名という状況が続くことでしょう。誰も彼もよくがんばっています。

改装なったマリヤ館、新イサクの湯などは、この時期に居住面とサービス面で予期に勝る可能性と

なりました。一、二月のインフルエンザ流行も無事乗り切ることが出来ました。

*九州シヨック

去る三月は私にとって大山盛りの体験学習の時となりました。三月二、三両日熊本で開かれた「第四回全国老人ホーム女性施設長フォーラム」では、主催者の一人として準備の時が重かったのですが、幸い二四五名の参加があり、内容豊かな暖かい盛り上がりの生まれた、実りある集いを終えることが出来ました。

この機会にややハードと知りつ、前日、熊本で「しらぬい荘」、会后、鹿児島、佐賀で念願の施設見学のスケジュールを果たすことが出来ました。

施設として權威を感じる「しらぬい荘」です。沢山の広い部屋、細やかなケアシステムが活き活きと動いているのがよくわかりました。地域との濃厚な交流も、立派なお庭、整えられた来客用和室、そこで供された施設栄養士さん手作りの見事な懷石料理、等々すべてに「力」の差を覚えました。

三日午後からは列車つばめ号で鹿児島へ向いました。「加世田アルテンハイム」の吉井先生のお心づくしで鹿児島城山観光ホテルに一泊、翌朝お迎えを頂き加世田市へまいりました。まだ新しい一開設八年―特養です。こゝはまったく個有のユニークな発想と芸術性豊かな営みに、眼を開かれました。四〇〇名余りのキャパシティを持つ立派なホールは「橋幸夫」レベルの人たちを招かれ、地域交流に尽くされているとか。隣接されているヨーロッパ風のきれいな美術館、特養居室各部屋の壁面に直接画かれている様々のグラフィック、イラスト、そして生の花々、入所老人のファッションショー、霊

安室の床しく優しいインテリア等々、ユニークで暖かいケアサービスに圧倒されるばかりでした。空港へ送って頂く途次、市内では「ラポール加世田」と名付けられた老健施設もほんの一寸見学いたしました。黒川紀章設計と伺うと、もう言葉ありません。

鹿児島を飛び発つ時は、福岡は雪で着地の不安が報ぜられていましたが、無事雪の福岡空港に着きました。翌五日は早朝から佐賀「寿楽園」の鹿毛ヨシ子先生がホテル迄迎えに来て下さり、一時間余の列車で施設へ伺いました。四〇年余の歴史の中に育まれた養護＋特養＋ケアハウス＋老健あおぞらの四施設が見事な連携で動いていました。完備した一大総合施設です。その設備の豊さ、細やかな心配り、職員の皆さんに出来上がっている躰け、何もかも心打たれる現実でありました。

三施設見学から頂いた相次ぐショックで殆どK・O直前の私となりました。福岡から伊丹への機内では、ひどくみすばらしい自分を見ていました。一生懸命だったけど、お金も力も格段の差です。それでも前を向いてゆこうと自分を力付けて帰ってまいりました。

*新人たち

一日、九名の新人がみぎわ会に加わりました。退職者と加減して三名の増加です。皆頼もしい若人たちです。期待をこめて歓迎しました。



みぎわ会
だより

第50号 1995. 5. 9 発行

みぎわ会職員セミナーのこと

五月に入りました、いかゞお過ごしですか。お正月以来、天災人災相次ぐ憂うつな日が続きます。が、美しい五月はきちんと訪れました。ここみぎわ村は文字どおり風薫る緑々に溢れ、勿体ない無事平穏の日々が流れています。

本号は「みぎわ会職員セミナー」のご報告をいたします。

施設をはじめまして以来、施設にとりアルファでオメガである「ケアサービス」のむつかしさに悩む中で、「良いケアは、職員の豊かな品性からのみ生まれる」と気付きました。以来、様々な試行の末、施設内研修の一つのかたちとして、この学習を始めました。昭和五十三年のことです。月一回の定めをなんとか守り、十八年目の今年四月は一六八回となりました。

学習は提出された「テーマ」について、全員すべてが個人的に考えまとめた思考を発表し、全員で傾聴する、というスタイルです。テーマは十日位前に発表します。・ことば ・勇氣 ・親切 というようなものから ・これをやればみぎわ園がよくなる など時にはグループで考え合うなどマンネリ化やいいかげんへの逃避をさけ、本気で取り組めるような心を使いました。

始めた頃は、寮母さんたちの表情が硬くなるような苦しい学習だとよく聞きましたが、老人ホームの職員の年齢、学歴、社会的認識の変わりゆく中で、現在は「セミナー」はむしろ楽しい自己表現の

時として、話し方にもことば選びにもパフォーマンスが見られ、快い緊張の中で新しい親しみの生み出される時となっています。

四月二十五日の実況を記します。 一：〇〇PMー三：〇〇PM

一、開会のことばとオリエンテーション みぎわ園々長 横山猛 2分

二、講義 人体の解剖生理 シリーズNo5 消化器ー腸 松尾 20分

〇HPでアトラスを映し、基礎的知識を日常ケアに結びつけ乍ら平易に話します。これは職員の求めによって繰り返しています。

三、意見交換 テーマ「この一年に私は…」

・町の婦人会副会長になった、忙しいがワープロに挑戦したい ・資格取得に挑戦する
(多数) ・ピアノを学ぶ ・一寸待って、をなくしたい ・漢字の書き取り、記録の
字をきれいにしたい ・苛立ち易い自分を直したい ・家を建てる、借金で苦しみたい
・コンプレックスから脱出したい ・震災宝くじを買った、当たることを…

七十三人の本気もユーモアもある一分スピーチが、私にはピカピカ光るイルミネーションと感ぜられるのです。

四、十年勤続職員表彰 (毎年四月にのみ行う) 今年は五名

額入り個別表彰文とクリスタルガラスの美しい花瓶が記念品。あと、夫々のスピーチ、

泪あり、笑いあり、拍手湧く。

五、誕生会

四月生れの一人一人に、写真と理事長メッセージ書入れの誕生カード、お祝品靴下、ハッピーバースデーの合唱と拍手の中で。

六、閉会 短いコメントのあと 事務長 丸山智枝子

全員出席が原則です。マンネリ化と迷いの壁に悩むことも多かったのですが、延々継続してきました。閉会のあとはいつも爽やかな喜びが私には残ります。果たして職員の品性が豊かになったか、よりよいケアが生れているか、と自問するとき、大きくYESとは答えられませんが、NOとは決して言えません。

外来の方々から「こゝの職員のい、挨拶、やさしい笑顔、老人ホームと言えない明るい雰囲気」等のお言葉を頂く時、ひたすらつづけている継続の「力」が、どこかで熟成しているかをりでありますように、と祈る心です。



みぎわ会 だより

第51号 1995. 6. 5 発行

仲間たち

近頃みぎわ園玄関辺りのタイルが貼りかえられました。硬質のライトグレーです。

広くなった感じだナーと足元を見乍ら扉を出て顔を上げますと、青嵐なる季語そのまゝに波打つ緑一パイの風景です。思わず深く息づいてしまします。

うつとしいニュースに明け暮れる日々ですが、こんな美しく力強い初夏が訪れています。皆様のご健康とご平安を祈りつゝ、六月の便りを送ります。

去る五月中に私は二つの女性の集いに参加いたしました。一つは女子医専のクラス会です。会場は東京ステーションホテルでした。赤レンガの東京駅は一九一四年に、

オランダの首都アムステルダム駅のコピーとして建てられたと聞いています。丁度私たちと「同い年」八十歳です。昔ながらの美しく気品ある姿を見てうれしい気持ちでした。ホテルの内部はとても美しく近代化していました。

当初三十名の申込みは、地下鉄サリン事件以後二十名になったということでした。集まったクラスメートは皆八十歳の女医です。今日もカイザー（帝王切開）やって来たよ、といつも優等生のIさん。主人と海外旅行など楽しんでますとのTさんは、聞く名もすごそうなマンション住まいです。十五年前に引退して、殆ど伊豆のセカンドハウスで土いじりだよとSさん、舞踊、絵画、そして旅行を楽しんでいるYさん、まだ副院長のポストだけいたゞいているのよ、と、つましいAさん、やっと診

療終わってきたよ、と横浜から遅れて駆けつけた堂々たるKさん。

私は施設開設二十六年、六〇三人目の死亡診断書の第一死因に初めて「アルツハイマー病」と記入したのよ、と私としては三日前の新しい体験を話しましたが、「アルツハイマー」という言葉にまったく無関心のクラスメート達には余りいい話題ではないようでした。

翌日都内、旧知のA先生の施設を訪問し、区立の多数施設の委託を受け、大活躍のA先生に逢いました。立派な新しい地下1階、地上4階の施設を見学し乍ら、話題のすべてを共感出来る世界がそこにあると思った私です。

その数日後、一月の大震災に罹災された老人ホーム女性施設長の皆様を、郡部のメンバーがお招きして慰労する食事を持ちました。会場の新神戸オリエンタルホテル三十四階のレストランからは、東部六甲山麓から海へ広がる神戸市をはるか遠くまで見渡せました。その眺めの中に地震の傷跡を見つけることは出来ませんでした。が、一月十七日早朝のことを、十名の方々から生々しく伺うことが出来ました。

揺れが止まるとすぐ暗闇の中を、手さぐりでパジャマの上からトレーナー、コートを着、とにかくにもホームに駆けつけられた皆様でした。胸の上に倒れて来た本棚の下敷きになり、やっと引き出してもらうと、咳と一緒に血が出て来た、けれどホームの安全を確認する迄は痛みも感じなかった、と仰有る一人、パイプの破損で水浸しになっている集会室を、風邪の発熱を忘れてかき出し、かき出しする中に、四十度の熱になり入院された方、皆様は一樣に唯々ホームへ、ホームへと向か

い、わが家もわが身も、家族の安否すら後まわしで、入所老人たちの安全、施設の安全を確かめに走られたご様子を伺い乍ら思わず涙が滲んで来ました。

その後の、水、電気、ガス、の来ない日々を、ホームに泊まり込んでのご奮闘に深く心を打たれました。女性ならではの細やかな、素早い心配りや、地域サービスへの手順など、教えられることが沢山ありました。

こゝにはわれらの仲間がありました。

同じ価値観、使命感に生きる仲間の交わりはすばらしいと感じました。





みぎわ会 だより

第52号 1995. 7. 3 発行

監査報告（其の一）

うっとうしい梅雨空の毎日ですが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

みぎわ会も公益法人として毎年度決算し、総会を行う義務があります。例年五月後半に行うこととなります。決算につきましては、監事監査という大切な関門が定められています。

私共は、二名の監事先生のお世話になっています。税理士の高瀬祐長先生と、元校長の内橋輝二先生です。高瀬先生は経理出納面を、内橋先生は運営面、殊に日常サ―ビス面について、夫々厳しく、又的確なチェックをして頂いています。

去る五月二十三日の決算総会（理事会、評議員会）では、両先生より監査報告がありました。両先生のお許しを頂いて、全役員に深い感銘を与えて下さった監査報告の全文を公開させて頂くことと致しました。みぎわ会だより、七、八の二ヶ月に亘ると思います。

こうした素晴らしい役員の方々に守られ、導かれていることを深く感謝し、又誇りと致して居ります。

（付記 社会福祉法人の役員はすべて無給です。ボランティアとして御世話を頂いていますことを申し添えます。）

一、定 款 定款の改正手続きも理事会、評議員会で真剣に審議され、県の許可を得てその書類も

適正に処理されている。会の活動、事業も定款に反する点もなく行われている。

二、理事 理事は、各界各層にわたり老人福祉に理解と熱意ある人々によって構成され、男女の比率も適当である。

三、監事 監事中一名は税理士であり、特に資産、会計の管理の監査には最適任者で、チェック機能を十分に果たされている。他の一名は多岐にわたる監査内容をチェックする能力に不足がある。かかる能力のある人を選任することが望ましい。しかし監事としての任務に誠実に努力はしている。

四、理事会 理事会は年六回開催され、出席も良好で真剣に審議されている。議事録も整備されている。監事もつとめて出席して、理事会の審議等をチェックしている。

五、評議員会 評議員会は、六月に県の許可を得て発足した関係で、三回しか開かれていない。評議員は、北播磨の各地域を代表するような人々が選任され、各地域のニーズにこたえられると思う。会議も熱心である。

評議会のうち理事の兼任は定数の半数以内となっているので問題はないが、評議員会の性格から見て理事の兼任を減らして、老人福祉に熱意ある人を増やすことが望ましい。

(六、人事管理 以下 十一、その他、総評 までは次号に掲載いたします。)



みぎわ会
だより

第53号 1995. 8. 8 発行

監査報告（其の二）

暑中お見舞申し上げます。

長い梅雨がやっと終わったと知らされますと、忽ち猛暑が訪れてまいりました。どうぞご健康第一にお過ごし下さいますよう、お祈りいたします。

みぎわ園、いずみ寮の皆様も、暑さの中でよく頑張っていて下さいます。私たちも気を引き締めて励んでいます。

八月号も、先月に引き続き監事様による「監査報告書」をお読み頂き度いと存じます。

（一、定款 以下 五、評議員会 までは先月号に掲載）

六、人事管理

就業規則、給与規程、労働協定等で整備され、職員にも充分徹底している。
職員研修も月1回実施され、本会の基本理念「奉仕と隣人愛」、理事長の創立精神である「神と人に仕える」の浸透に努力されている。

三つの施設の人的交流も計られ、三者一体となって運営されている。新任研修も一週間にわたり実施され、実務訓練と共に基本理念、創立精神の教育を通して老人福祉の重要性について充分研修されている。

七、資産管理

1. 基本財産、運用財産、収益事業用財産は区分して管理され、各台帳も整備され、

適正である。

2. 寄付金台帳もよく整理され、入所者及家族からの寄付金については特に注意し、強制のおそれのないよう適正に処理されている。

3. 入所者からの保管委託財産については厳正に管理され、申告書等も整備されている。

八、会計管理

1. 決算 会計に関する諸帳簿は適正に処理され、証憑書類も整備保管されている。

2. 総評 財産目録、貸借対照表、収支計算書は法令及定款の定めに従い法人の財産及収支の状況を正しく表示されているものと認める。

九、施設運営

看護日誌、寮母日誌、業務日誌、宿直日誌、その他各種記録を点検した結果、職員が各任務に努力し、職員と入所者との信頼関係も良好で、明るく楽しい職場をকাশし出している。

施設も、国の方針に沿うよう増改築が実施されている。すでに完成された痴呆性老人の居室は実に快適である。

痴呆性老人の増加にともない、運営にあたり安全介護に特別配慮され、万全を期するよう希望します。

十、入所者処遇

入所者の日々の楽しみの一つが食事ではないかと思ひます。その点、各人のニーズ

に応じた配慮がなされ、食べる人の身になって調理されている。

入浴、清拭も適正に実施されている。

家族とはなれて終末を迎える老人たちにとって、明るい笑顔、優しい言葉が何より大切なことを充分理解され、職員が一体となって努力されている。

理事長の宗教心に培われた理念がよく行き渡っていることを深く感じた。

十一、その他

入所者の預り金の管理にはトラブルが起りやすいので、特に厳正な処理を要望していたが、本園においては適正に管理され、入所者にも信頼されている。痴呆性老人の金銭管理には更に研究され、一層厳正な管理を望む。

非常災害対策については、火災等を中心としたものであったが、今回の大震災にかんがみ、当園においても対策を考えているが、更に専門家の指導を得て充実した対策を立て、常にこれに従って訓練を重ねて、人命を第一に万全を期して頂きたい。

総評 全般的にみて、精神面を重視しつつ施設長以下全職員が、入所者の身になって献身的な努力がなされている模範的な施設である。



みぎわ会 だより

第54号 1995. 9. 8 発行

秋の訪れ

空の色にも僅かな風にも、秋を感じるようになりました。酷暑という新しい言葉が生れた今年の暑さでした。皆様お元気にお過ごしでしょうか。長い暑さの疲れが残っています、くれぐれもお体を大切になさって下さいませ。

みぎわ園の今夏は工事、殊に全館のスプリンクラー整備が進められましたため、各部屋毎に数日づつ講堂へベッド移動する等、あわただしく過ぎました。その間に「D棟」は美しく出来上がりました。十日には、牧師の司式により神の御祝福を祈り、感謝をこめて「テープカット式」を行う予定です。

この大規模修繕工事はこれから後半期に入ります。広く機能的な各詰所、いくつかの個室、三号館と本館のすっきりした連絡などに取りかかります。皆さんの大好きな売店も広くなり、時には美しいスカーフやハンカチ、セーター等もならべられるといいなアと話合っています。今暫くゴーゴー、カンカン、ご辛抱下さい。楽しんでお待ち下さい。

*

*

*

私は九月一日から沖縄を訪れてまいりました。戦後五十年の文字が連日マスメディアに大きく浮かんだ今年でした。機上から見下ろす海は青く、とてもきれいでした。昭和三十八年に初めて県の慰霊団に加えて頂いて訪沖した時の私が、今日八十一歳を前にした自分と重なってまいりました。

あの時はパスポートが要りました。都合で私は一人空路を取らせて頂き、悪天候の鹿児島空港から西南航空の小さなプロペラ機で飛びました。十二、三人の乗客でした。雲が切れ、細長い沖縄本島がエメラルドグリーンの海に囲まれて、眼下に見えて来ました。私は一人で涙を流し続けていました。

このたびは大きなジャンボジェット機です。那覇空港は楽しそうな観光客が溢れていました。島は都市化し、さとうきび畑もあまり見られなくなっていました。

戦後五十年を記念して作られた「平和の礎」を訪れました。広々と美しく立派な霊園記念公園でした。この島で戦没された二十万余の方々のお名前が、国籍、軍民を問わず、美しい碑に刻まれています。本当に美しい清らかなところです。訪れて見て深く感動しました。そして又、何とも言えぬうれしさを覚えました。五十年の長い重い時の想いを胸にしまつて帰つて来ました。



みぎわ会 だより

第55号 1995.10.5 発行

十月のお便り

十月に入りました。今日は静かな雨の一日です。皆様お元気でいらっしやいますか。きびしかった残暑をのり越え、ご一しよに静かな快い秋を迎えるよろこびをこめて、便りをお送りいたします。

まず九月のご報告です。四つの行事がありました。

一、D棟テープカット式 十日午前 C、D棟接合点で

台風一過、ホット涼氣に恵まれた日でした。山根牧師司式の下、法人役員、工事関係者、職員、入所者代表が列席いたしました。春以来、設計、施工、みぎわ園三者が、何度も何度もミーティングをくり返す中で出来上がったD棟です。思想と祈りをこめた美しい建物です。祝福して頂きました。

一、感謝の集い 十五日午前 講堂 例年の行事です

入所の方の中で毎日、タオル、おしほりたたみ、ラウンジ手伝い、食堂あと片付け等毎日いい働きを下さった方々へ「ありがとうございました。お元気で来年までつづけて下さいね」、私たちや寮母代表のお礼のことばが、カードと一箱のゼリーと共に贈られました。みぎわ園二十二名、いずみ寮十一名、計三十三名です。長年つづく食前の祈り、郵便配達という重いもの、庭の草取りも廊下の手すり拭きもあります。すてきな家族へ内輪（うちわ）でのお礼です。

一、米寿、卒寿のお祝い 十五日 ルデヤ館三F 例年の行事です

満年齢で今年八十八歳——米寿と、九十歳——卒寿をクリアされた方をお祝いする昼食会です。

米寿十名、卒寿八名です。「一〇〇歳を目ざして楽しく生き抜いて下さい」とお祝いました。出席して下さったご家族に囲まれた、幸せな風景が沢山生まれました。きれいな松花堂のおべんとう、鯛の活き造りなど、いつものように山盛りでした。

一、善行賞伝達式 十六日午前 ルデヤ館三F

県民賞の「のじぎく賞」が、ボランティア活動を続けて下さった方々に贈られました。天理教多可支部婦人会、日本イエス・キリスト教団西脇教会婦人会、矢野泰弘、静華先生ご夫婦、依藤知江子先生（編物）方です。東播磨県民局社分室より、鈴木満室長様、担当の坂井様が来て下さり、知事の代行として伝達して下さいました。式後、お茶とサンドウィッチで暫く楽しい時を持ちました。ふと目頭の熱くなる言葉が沢山語られました。ありがとうございました。

.....

.....

.....

D棟は早速十三日から使用されています。引きつづき本館の改修が進められています。マリヤ館も、賑やかな毎日ですが落ち着いてまいりました。毎日忙しい仕事がつづく中で、建物も人も少しづつ変わっています。毎日生み出されるサービスも少しづつより暖かく、より豊かに、又適確な中味になりますように、この一事は常に変らない、失ってはならない大事な私たちの使命です。皆様のご指導お願いします。

十月一日 記



みぎわ会 だより

第56号 1995.11.8 発行

深き摂理の下で

美しくさわやかな晴天がつゞきますが、秋は足早やにすぎゆこうとしています。皆様お元気にお過ごしのことと存じます。みぎわ園、いずみ寮、ナオミ館ではそれぞれ静かな秋を楽しく生活して居ります。

十一月五日にはみぎわ教会で昇天者記念礼拝が捧げられました。その席で故長谷川寿一先生を偲んで私が申述べましたことの要約を、今月の便りに代えさせて頂くこといたします。

「長谷川寿一先生は昭和四十三年秋、私たちの滝野教会へ牧師としてご赴任下さいました。これは神戸栄光教会名誉牧師（当時）でいらつしやいました斉藤宗治先生のご紹介によりました。長谷川先生は当時六十五歳位でいらつしたと思いますが、初対面の私に「先生、私は聖書のことをお話しする他は何も出来ないのですが…」と、少年のようににはかみ乍ら仰るのです。私はびっくりしてしまいました。

先生は翌四十四年五月開設したみぎわ園の指導員となつてご協力下さいました。開園式当日先生は「こ、が天国の門となりますように…」という祈りを以つてテープカットを祝福して下さいました。私の魂に打ち込まれたお言葉です。その時に選ばれた讚美歌九十番を、私は園歌に定めさせて頂いたのです。

その夏八月、車のお好きな先生が事故を起こされ、加害者となりました。病弱でいらつした奥様

は、年度も神戸に足を運ばれました。先生のお怪我も治癒され、事故処理も無事終了しました数日後、先生ご夫妻が私に話したいことがあるとのお申出がありました。「先生、今度の事故で私は持っていた土地を売りました。思いがけず神戸市が高く買って下さり、沢山のお金が残りました。私たちがこのみぎわ園にお招き頂いた記念に、私たちは新しい施設にふさわしい会堂を献げさせて頂きたいのですが…」とお言葉です。その頃古い滝野教会の移築のことなどを考えていた私は、唯あつけにとられてしまいました。側に居られた奥様が、そんな私にすかさず「先生、私たちの申出を快くお聞き下さってありがとうございます」と仰るではありませんか。

この立派な教会堂は、そういういきさつで私たちに与えられました。昭和四十五年八月十五日に竣工しました。長谷川先生のお心づくしでヴォーリス設計社による気品ある設計です。

先生のお祈りのとおり、二十五年間に一〇〇人に近い入所の方々が、キリストの救いを受けてこの門から天国へ旅立ってゆかれました。山根先生がきちんと作って下さいましたその名簿を見ていると、私は感謝と畏れで胸が一パイになってしまいました。

みぎわ村のまん中に建っている美しい教会堂は、この事業のシンボルであり、私たちの旗印であります。私を娘のように愛して、私が始めようとする事業に熱い祈りとお心を注いで下さった斉藤先生、その中から長谷川先生との巡り逢いがありました。そして長谷川先生によりみぎわ教会を建てて頂きました。

神様の為し給うた深い御愛の御摂理の奇しさの証しでございます。」



みぎわ会 だより

第57号 1995.12.4 発行

年の昏れ

まわりの山々が日に日に燃えるように色づいてまいりました。その美しさは朝に夕に思わず歩みを止めてしまう程です。皆様お元氣におすごしですか。今年は冬らしい冬になりそうだと気象情報で聞かされます。四季それぞれに季節の美しさを見せて頂ける中でこそ、安心した生活が生まれて来るように思います。

今年は、お正月の大震災につぎ次から次へ何とも怖ろしいこと、情けないこと、哀しいことが国内外に打ちつぎきました。いさぎよく、正しいことを第一として来た祖国はどうなるのでしょうか。安心と希望がほしい一年の昏れです。

その中で、私どもは工事に明け昏れつ、一年を過ごしました。大規模修繕という大変や、こしいむつかしい工事でしたが、何一つ事故もなく、ホームの日常にも思った程の支障もなく進められました。もうあと二割位のところは、一番手のかかる部分ですが、来年2月にはすつきり出来上がることでしょう。唯感謝する外ありません。一年半、黙々と不自由の中に励んで下さった職員の皆さん、暑さ寒さの中にも一心に夫々のお仕事を進めて下さった工事関係の皆さん、何回か部屋替えさせて頂いたホームのみなさま、ありがとうございます。そのすべてを守り導き給うた、私の信ずる神様に、唯感謝を捧げるばかりです。

この程は二つの「詰所」の改造が終了しました。今迄せまく不自由だった看護婦さん、寮母さんに、

広々と明るく、皆さんの注文通りに設備した場が出来ました。夫々「ナースセンター」「ケアセンター」と表札を掲げることに決めました。カタカナ好みではないのですが、イメージとして適切ではないかと考えました。

ちなみに、寮母、寮父という職名は、私は大好きです。「ホーム」という生活の中には、心やさし暖かいしつかり者のお母さんと、力強く頼り甲斐のあるお父さんに居て頂かねばなりません。センターは皆様に必要な、あらゆる「ケア」が生み出される中心です。こゝからは、いつでもきちっとした専門的な知識や考え方が、暖かい心とやさしい言葉で、ケアという働きを送り出せるはずです。皆様にとってホームが安心できる、居心地のいいマイホームになることが誰もの願いですし、私たちの使命としています。それにはこゝで生活して下さる皆様の協力も又とても大事なことなのです。

皆様、来年も、いえ来年は、新しくきれいになったみぎわ園を先頭に、いずみ寮、ナオミ館とみぎわ村の住民は皆「元気じるし」でまいりましょう。

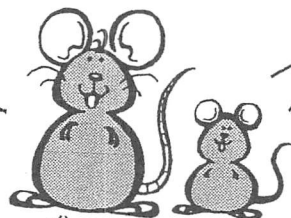


みぎわ会
だより

第58号 1996. 1. 1 発行

新春特別号

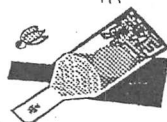
みぎわ園 編



おめでとう
今年もみなさんとなかよく
お話がしたいのです。
よろしくお願いいたします。
平成8年元旦 小川房男
忠子

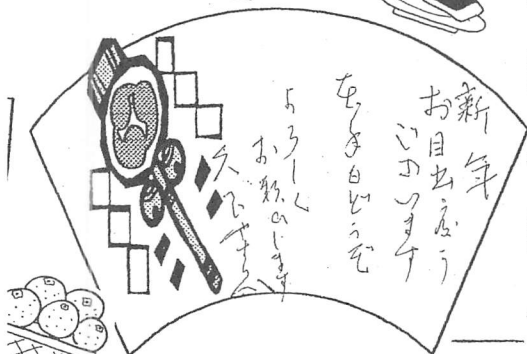
明けましておめでとう
ございます
今年もまたがんばっていきたく
と鬼いますのでよろしく
お願いいたします

藤原昌史



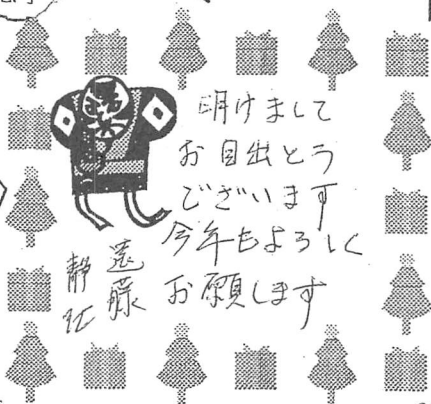
明かるく安心
暮せろ一年と
りまあように

尾 岡 子



明けまして
お目出とう
ございます
今年もよろしく
お願いします

遠藤 静江





1996

春

迎 めさせ御国!

今年もごいっしょに

山根聖史



謹賀新年

平成八年元旦

皆様の御健康と
多幸多福を
祈ります

山本好夫

明けましておめでとう
グアテマラ

今年も巧い
お願ひです
百歳長寿



頌春



あたらしい年も又
助け合い、いなり
合いつつ 暮りし
ましよう。

1996. 1. 1
智板子

矢山

賀

今年はいり暮
な!

松



初明り

まず鬼瓦

輝きて

どうもおたやかな

二年、実りある一年に

横山猛

平成八年 元旦



頌春

子年は我が生れ
太に若返ります

平成八年元旦

園田辰夫

ルチヤ館
204号





みぎわ会 だより

第59号 1996. 2. 1 発行

春の芽立

「みんな元氣を出そう」と、日本中がそう思ってた平成八年を迎えたと思いますが、もう早二月に這入りました。大寒から節分迄は年中で一番寒い季節だと言われています。すとおりの、まことにきびしい寒波が日本列島を次々とつ、んでは流れてゆくこの頃です。

皆様お元氣にお過ごしでしょうか。

大きな大きな

木の下で

おいしいおいしい

リンゴを食べよう

五十年後

でもその頃に

あるかなあるかな

地球の緑

いるかないるかな

おろかな人間

大きな大きな

木の下で

おいしいおいしい

リンゴを食べよう

五十年後

「五十年後」と題するこの詩は、サンケイ新聞「朝の詩」欄で、年間賞に選ばれたものです。群馬県の高橋二年生、松本梨江さんの作と記されていました。十六歳の少女の詩と聞きびっくりいたしました。いかにも若い人の純粋な夢と正直な不安が、素直に大胆にうたわれていて心を打たれました。

暗く恐ろしいことの多かった昨年でしたから、今年は明るい建設的な年にしてゆこうと、苦しくても希望に向かって精一パイ生きてゆこうと、誰もが願っていることが感じられます。私たちも夫々の負う役割をしっかりと受けとめ、大切に果してゆこうと励まし合って歩み出しました。

長い工事でも今月中には完了いたします。年中満員の各施設ですが、知恵と力を出し合って多くの方のニーズに、事業として、一人一人の職員として、応えてゆける力をつけてゆこうと話し合っています。ご指導下さいませ。

凍てつく寒さの中で、庭の木々や土の中ではせつせと春の芽立への支度が進められていることでしょう。素晴らしい地球の生命に守られていることは、すごい事だと感じます。





みぎわ会 だより

第60号 1996. 3. 11発行

ホーム風景

今日は時々風花の舞う一日でしたが、もう三月です。天にも地にも、何故かと思ひ乱れるような暗いニュースの流れる中で、二月は足早に過ぎてゆきました。いかゞお過ごしですか。やさしい春の足音が近づきました。今月はみぎわ園、園生に登場していたゞくことにいたしました。

その一 園旗

「Sさん、旗が大分汚れたわね、クリーニングするから代えましょうよ」今日退出する時のことです。夕昏れの空からは時々雨滴か雪片か、落ちて来る寒さです。「いやなァ、天気 of 悪い日イはこの古い旗にしとりまんねん、天気 of え、日は新しい旗を上げよりまんねやで」黒いタコツボのような頭巾の切れ間から、Sさんの小さな眼が私に笑みかけています。

Sさんが、玄関前の高いポールに大きな園旗の掲揚を受持つて下さるようになって、もう四年余りでしょうか。村の小学校の用務員の履歴が生きていて、祝日には必ず「日の丸」が園旗の上にひるがえるのです。

体も知能も弱い妹さんとの二人暮らしがゆきづまって、入所された時はSさんの両膝関節は赤く腫れ上がり、疼んで歩けず、体力も衰弱していました。(H2. 7月)

何度かの関節穿刺や服薬で、疼みも腫れも去って、歩けるようになった時の喜びの顔は忘れられませんでした。

古いT・Bの後遺症と時々錯乱状になる弱い妹さんとの二人のスイートルームは言わば密室でした。Sさんには何とか村の家に帰り、二人だけの生活をしたいという願望がいつも燃えていて、いつでも帰れるように、十数個のボール箱に詰めた荷物の中で暮していました。昨春、妹さんが亡くなる時、「Sさん、気を落さないでネ、もう妹さんはいなくなれへんのよ」、Sさんのベッドに並んでかけて、私はさ、やき乍らSさんの手を取りました。「へえ、ようわかつとります」、彼は哀しみに耐えてあれこれ準備をし、村の方々もよく助けて下さいました。心ゆく迄菩提を弔ったSさんは、二ヶ月後明るい表情で帰園して来て、私たちを喜ばせて下さいました。

「妹の十三回忌までは死なへんで」、四十度曲がった腰をもものともせず、大事な任務のために毎日空を仰ぐ彼により、お天気の違いと共により、園旗は上がり又降りる。

若い寮母さんが大好きで、時々板チョコをそつと渡し乍らちよつとおさわり、この趣味がSさんの元気のもとでしょうか。

その二

C・PのAさんは入所されてもう十五年、七十二歳になられたが、色白の可愛い、顔立ちと、漆黒髪は少女さながらです。愛されて育ったAさんは、素直で賢く、病気に屈しない積極的な生き方をす

る人です。遇々同室に入つて来た（H 1. 8月）Mさんは、もう八十七歳で、ボールのように丸い背は、長い喘息の為でしょうか。ヒーヒー、ぜいぜいと息苦しく、咳で歩くこともむつかしい有様でした。医療とホームの生活の中で、咳やぜいめいから少しづつ、解放され、さつさと歩けるようになり、四年目には十キロも肥つて元気になったのは、Aさんとの出会いも大きな原因です。

新館が出来て六年余、Aさんの車イスを押して食堂への往復、歩け歩け運動も二人で一人です。「Aちゃんが待つとりまっさかいナ」、MさんはいつもAさんから心が離せない、「早よ帰つて来てよ」というAさんの声が耳から離れないでしょう。

施設というコミュニティには、広い社会と同じ人間模様が織りなされていますし、施設ならではの色とりどりの、それも又生まれている活力に満ちた社会なのです。

三月一日 記



みぎわ会 だより

第61号 1996.4.5 発行

新年度のはじめに

平成7年度は終わりました。

梅が咲き、椿が咲き、桜の蕾もふくらんでまいりました。出勤途上のある朝、鶯のきれいな鳴き声に思わず立ちどまり、あ、まちがいなく春が来たと、うれしく、ありがたい気持ちにさせられる季節です。

皆様ごきげんいかがですか、よい春をお迎えのよう祈っています。

去年は怖ろしく哀しい地震にはじまり、次いで一そう気味悪く怖ろしいオウムの業状に、驚きと口惜しさを深くいたしました。年末からは、余りよくわからない金融界の出来事を毎日聞かされる不安の中で、年より達は雀の涙になってしまった金利を嘆くばかりで過ごしました。

こういう大変な一年を、私たちは工事に明け昏れましたが、幸いすべて終わり、A棟からB、C棟を経てD棟へ、一〇〇m余のメインストリート（廊下）に平行して、A棟より三号館、四号館を経てD棟につづく広いバイパスが開けました。

又、全居室の入口には美しい扉がカーテンに代わり、みぎわ園のイメージは大きく変わってまいりました。

三月二十九日には第一七七回目の「職員セミナー」が開かれ、七年度の反省と共に八年度への心構

えや計画が、各部から練り上げた誠実さで発表されるのを、互いに心をひきしめて聴く二時間余となりました。

新年度事業計画のメインテーマは「本格的超高齢社会の到来する二十一世紀に向い、時代のニーズに応え得る逞しい施設形成を目指す」というもので、こ、三年間変えずに参りました。

少々固苦しい言葉が並びましたが、近年よく好んで用いられる「やさしさ」ではなく「逞しさ」を選んだことについて、私は改めて自問自答いたしました。

どんな時にも、ことばにも心にも、表情にも技にも「やさしさ」が求められる「老人ホーム」です。それ故に逞しくあり度いと思わずには居れませんでした。逞しさがなければ、このむつかしい仕事をやり抜くことは出来ないのです。皆さんの多様な、個別的なニーズをはつきりと受け止め理解できる脳力、情に流されない柔軟で暖かいハート、美しい健康な体力、こういう逞しさこそ、社会や家族の皆様信頼をしかと受け止めて、くぢけない力となるのだと思います。老人ホームでは、一般社会よりも十年先の高齢社会の現実が日常なのですから。

この一年も日々逞しく任務を果たせるようにと、私は祈るばかりです。

皆様のご指導、ご協力をお願いいたします。



みぎわ会 だより

第62号 1996.5.5 発行

連休の日々

いつまでも寒い春がつぎきましたが、こ、数日来急に暖くなり、時には暑いとさえ感じます。正に早春から初夏へと季節はジャンプしたようです。

皆様お元気におすごしでしょうか。

環境の変化にうまく順応出来ないのは老化現象の一つとされていますが、こちらでは殆どの方がこのむつかしい時季を無事のり切って下さいました。うれしいこと、思っています。

まわりの景色も変わってまいりました。西側の雑木林の芽立ちには殊に美しい風景です。小さく萌え出た緑は、赤ちゃんのしつとりとやわらかいピンク色の肌を連想させます。のぞみにみちた新しい生命の色です。

そういう四月末から五月初旬は、いつもゴールデンウィークと呼ばれる休日つぎとなり、陸も空も海も休日を楽しむ人々の溢れる情景が報らされるシーズンです。

私もお休みはい、ネ、と楽しんで迎えた連休ですが、今年は少し変った体験をしています。

連休にと予定したこと、例えば冬のコートや衣類をきちんと納うこと、庭の見まわり、読めなかった本を時間をかけて読むこと、そのほか出来れば見にゆきたいところも沢山ありました。ゆっくり「おひるね」をするのも大事な一つでした。

廿八、九と好天がつゞき、決めていたことを一つ、二つ片づけるうちに、もうつゞかなくなりました。おひるねも十分です。楽しんでた読書には手がつかず、ゆきたいところも見たいと思ったものも魅力がなくなりました。何にもしたくない自分にびっくりしてしまったのです。

改めて入所のみな様のことを想いました。毎日々々長い自由な時間の持てる皆様ですが、「したくても出来ない」と「出来るけれどしたくない」という両極の間で、お一人々々が個有の気持と条件の中で生活していらつしやるのが見えますし、その気持もよくわかります。老いは重荷なのだと体験的にわかります。けれど楽しく老いを生きましょう！と、励まし合う気持で、有名な「最上のわざ」という詩の一部を心をこめてお送りします。

……

……

……

「この世の最上のわざは何？ 楽しい心で年をとり、働きたいけど休み、しゃべりたいけど黙り（中略）」

若者が元氣一パイ神の道を歩むのを見てもねたまず、人のために働くよりもけん

きよに人の世話になり（中略）」

老いの重荷は神の賜物（中略）」

何も出来なくなればそれを謙遜に承諾するのだ

神は最後に「ばんよい仕事を残して下さる、それは祈りだ！」

（ヘルマンフォイベルス 人生の秋より）

安否を問う

会 ぎ ぎ み だより

第63号 1996. 6. 6 発行



六月になりました。正に「あをあらし」の世界です。

皆様お変わりなくお過ごしですか。

時は休みなく流れてゆきます。が、自然の美しい営みに「時」のきびしさを忘れさせられます。この恵みに気付く時、青嵐への感動も一入深いものとなります。

さて、数日前の夜のことです。机上二パイに予定を掲げている中へ電話です。A兄からです。

「先生、Aです、お元気ですか」

「え、ありがとう、元気させて頂いてますよ」

いつものパターンにはまりました。年間数回、A兄の電話を受けます。いつもこれという用のない電話ですが、いつも何故か長話になるのです。この夜も左手の受話器に向き乍ら、右手で机上を片づけることになりました。が、彼の話はこういうことでした。

「昨日、先生の夢を見て目がさめた。汗びっしょりで、胸がドキドキしていた。すぐたづねたいと思ったが、何か異変があれば西脇在住の妹から知らせがあるはずと待った。何もないので今、電話し、元気な声を聞き安心した」と。

私は驚きと共に、感謝に溢れました。慰められ、励まされました。力づけられました。

A兄との出会いは、五十年余も昔の戦時下にはまりました。旧制中学校の彼は、勤労生徒として隣町の軍需工場へ動員されていました。旋盤の鉄粉が目刺さり、私の治療を受けた事からだ、いつか彼自

身から聞きました。戦後、教会へ行く事をすゝめたのも私なのだそうです。あの戦中戦後の混乱時代の数年のことは何故か私にはぼんやりしていて、記憶そのものも混乱しているのです。が、私たちはいつの間にか親しくなり、一時私の子供の学習を高校生の彼にみてもらっていた事もあります。

その後彼は療養所生活に入り、その間に信仰が確立されました。或るミッシェンのドイツ人老宣教師から、深い感化を受けたようです。健康回復後彼はジャーナリストになり、某一流紙に属し、定年後の今も希まれて働いていると聞いています。

今日までは、いつも彼からの電話の問安で、私たちの交わりは保たれて来たと言えます。急ぎの仕事のある時など、一寸困ると感じた事もあります。それは、話しはじめるといつの間にかおしゃべりは私の側に移り彼は聞き手となり、仕事のこと、家族のこと、信仰の問題など三十分、五十分と、果てるともなくつゞくことになることが多いからでした。

十数年前のことです。いつものように「先生、お元気ですか、Aです」と、一寸のんびりゆっくり口調の問安がありました。「え、おかげさまで、でもねAさん、私ももう六十何歳になるのに、毎日が新しい経験なの」と、これは当時の私の気持でした。「おー、それはいいですナー、その感覚はいいですよ」という明るい彼の言葉に、私はずい分力づけられたことを思い出しています。

聖書には「あなた方は互いに安否を問い合いなさい」と記されています。ここで生活していらいつしやる皆様にも、折々の問安がとても大事なことでとわかつているのですが、現実には仲々むつかしいことだと、沁々思ってもいます。では又来月までどうぞお元気にお過ごし下さいませ。



みぎわ会 だより

第64号 1996. 7. 5 発行

ホ テ ル

昨六月三十日の夜は、久々に美しい月を晴れた夜空に仰ぎました。

まだ梅雨は中休みということですが、明るい日光や月や星の見えることは、ほんとうにうれしいなあと思った一日でした。

長雨の中お変わりなくお過ごしでしょうか。皆様のご健康を祈りつゝ、七月——文月というきれいな名の月の便りを送ります。

私はホテルが好きです。と申しまでも、ホテルと言えるホテルに泊まれるようになったのは、三十年余り前からのことでしょうか。みぎわ園をはじめしてからは出歩くことが多くなり、いろいろなホテルに泊まりました。近頃は、身の程も知らず有名なホテルに泊まるのが好きになってしまいました。

ホテルということばは、遠く十字軍の時代（約千年前）に、教会の婦人たちが傷病兵士たちのお世話をするために道端に作った施設「ホステル」が語源で、これが「ホテル」と「ホスピタル」の二語になったと聞いています。

先月、立派なホテルにはじめて泊まりました。招いて下さったのは、そのホテルの要職にあるAさんです。夕食を頂き乍ら、共有の昔話に楽しい時を過ごしました。

私たちの出逢いは昭和四十七年のことです。当時はソ連のキエフ市で開かれた、国際老年学会のツ

アーに参加したときです。添乗員としての若いAさんにお世話になりました。そしてこの旅に同行した仲間から生まれたグループで、翌年からオーストラリア、ニュージーランド、カナダなどへ毎年老人福祉の見学研修旅行がつぎ、その都度、Aさんは私たちが信頼するコンダクターだったのです。十年位あと、Aさんがパリの支局長になったと報らされ、何かのツアーでパリを訪れる度に歓待して頂くことになりました。その当時のことを話し乍ら、彼は「先生がパリへ来て下さると、何だかお母さんを迎えるようにうれしかったんですよ」と、私をびっくりさせて下さいました。

「このホテルのサービスは洗練されていますのね、とても気持ちがい、わ」

「そうですか、こゝは外国人客が一番多いんですよ」

「私もホテル業なので、サービスは気になりますのよ」

「え？」彼は驚いた様子でした。が、

「老人ホームは本質的にホテルだと、近頃私は思っていますのよ、長期滞在型なんです」

「あ、ナルホド、そうですね」

雨に煙る六甲連峰を眺め乍らこんな会話もありました。

ホテルでは、ドアマンでもフロントでも、その人たちの言葉、態度、表情、又服装などで、旅人はとても安心したり、時には不安や焦立ちを感じるものです。部屋のしつらえや洗面室の備品などに、ホテルの心を見ることが出来ます。

みぎわ園もいずみ寮も、こゝに靴を脱ぐ旅人たちにはホテルですよね、ゆつくり安心してご休養下さい。次の旅へのご用意が出来るまで、お一人々々のご都合のまゝに、ゆつくりおくつろぎ下さい。

私たちは、ゲストの皆さんの一日一日の生活の安全と快適さを——これがとてもむつかしいのですが——サービスしてゆき度いのです。私たちは、この仕事を選んだことを忘れてはいけないと思っています。

みぎわ園、いずみ寮を淋しい、もの足りないホテルにしないようにと、総支配人の私の心は休むひまがないのです。

間もなく暑い夏が訪れます。

くれぐれもお元気で楽しくお過ごし下さい。では又。

会 ぎ だ よ り

第65号 1996. 8. 5 発行



納涼だより

冷夏ではとの心配は杞憂となり、関西固有のいわば粘稠な暑さが、ほゞ二ヶ月近く
つゞく事になりました。

いかゞお過ごしですか、豊かな日光に育てられる稲をはじめ天然の御恵みを感謝し
つゝ、お健やかにお過ごし下さいませ。

今月は納涼三題（？）をお送りすることにいたしました。

一

一ヶ月位前、某新聞の文芸欄で何気なく読んだもので、筆者も書名も覚えていませ
んが、「幽霊」の話です。

筆者は幽霊についての一冊をと、取り組まれたのですが、資料不足となり、出版社へ幽霊に出逢っ
た体験者を調べてもらった、ところが早々に五十余名の方々からしつかりしたお返事があつたと、そ
の名前が列記されていました。皆有名な方なのですが、私がハッと感じたのは梅原猛、三浦朱門と
いうお二人のお名前でした。

人がこの世を去ると二度と再び相見することは出来ないとは、誰もが認識している事です。けれど、
本当に幽霊になれるとすれば、私はほんとに幽霊になりたいと思いました。

そつとみぎわ園といずみ寮を訪れたい、髪もきちんとして、きれいにお化粧もして、私の大事な大

事なところへ一寸伺いたい。：

神様、足のある幽霊にして下さい！

「エレベーターを出ると、そこに先生が（幽霊が）居られたの」

「〇〇さんのベッドの側で先生に出逢ったわ」などなど、

「私も逢いたいナー」って言う人が出てくるかと思うと、楽しく、うれしくなっていました。

二

忙しく七月が過ぎ、暑さと共に私の動きも鈍って来ました。

毎日シーツ、枕カバー、毛布などをほぐしては糸にして食べるというMさんのことを聞きました。

又、十センチ位の糸の束が、無事長いMさんの体内を通って排泄されたという報告も。私は、清潔な柔らかい白とか赤の新しいタオルを半切にして、いつもMさんのおひざに置いて上げればどう？、とコメントしたことでした。

数日留守にする予定があり、前日、全室を廻りました。Mさんは車椅子の上で静かにお昼ごはんを待っていました。「Mさん、こんにちは、お元気そうね、沢山ごはん食べて、お元気して、ネ」、顔を向い合わせて話しかける私に「久しぶりやな」と、低くやさしいモノトーンで、Mさんはかすかなほ、えみと共に私に答えて下さいました。この一言は鋭く私を刺しました。「ごめんネ、長いこと来なかったわね、忙しかったのよ」涙が出そうでした。Mさんは私を忘れずに待っていて下さったのです。

昨秋買ったまゝ、仲々読めない本を、東京ゆきのバッグに入れました。アメリカの精神・神経科医の著書です。新大阪の待合室のベンチでやっと部厚い本を開きました。

暫く読み進む中で、私に一つの衝撃が走りました。若し、若し 生れ更りということがあるなら、その時の私はもっとしつかり、もっと十分医学の勉強をしたい。患者さんの見えない体内の病変を、正確にしつかり診断出来る医師になりたい！そしてもう一度老人ホームでおとしよりさんたちの診療をしたい！

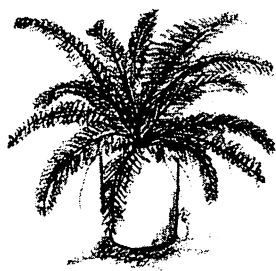
私のどこにこんな想いがひそんでいたのでしょうか。何度も何度も医師を止めたいと思ったり口にして来た私なのに！感動している自分に驚き乍ら、東海道を上ってゆきました。

.....

.....

.....

真夏の夜の夢でしょうか。私はおかげ様で元気です。では、又。





みぎわの道 だより

第66号 1996. 9. 5 発行

道

昨夜はとても美しい月を眺めました。秋です。あの大雨が少し早目に炎暑を流し去ってくれたのでしょうか。

皆様もお元気で、さわやかな初秋をお楽しみのことと存じます。

*

*

敬老の月、九月に這入りました。

去る八月二十八日、みぎわ園の「小原トユ」さんが「白寿」のお祝いを受けられました。市長、市議会議長、市社協理事長、婦人会長等々、沢山の方のご訪問を受け、

夫々にお祝いのことば、花束、いろいろの品々を頂かれました。

小原さんは明治三十一年七月七日生れです。現在は西脇市内の最高齢者だそうです。西宮市で被災され、去年二月頃よりこちらへ来られています。数え年は百歳ですが、自立した生活が出来、コトバもはっきりしています。おしゃれも好きです。毎日「こんにちは、お元気でよかったわね」と訪れますと、ちょこちょこと歩いて来て「あ、うれしい、ありがと、ありがと」と、可愛い声とともに小さな体を寄せて来られ、私たちは暫くしつかり抱擁することになっています。ぜひ百歳のハードルを越えてほしい可愛らしい大物です。

*

*

七月半ばにみぎわ園は九〇〇人目の入所者を迎えました。いずみ寮、シヨーステイ等を加えますと、はるか一〇〇〇人は越えるのですが、二十七年半にして九〇〇名の方をお迎えしたことにはそれなりの感慨があります。

明治、大正時代に生れたこの多くの方々が、こゝまで歩んで来られたはるかにも遠い道程を想いますと、しんとした、そして重い貴いものを感じてしまいます。テレビの画面で見るハイウエイの夜景、切れ間なく延々と流れるテールランプのきらめきを連想致します。一つとして同じでない千人千色のテールランプは、皆様の汗と涙できらめいているのだと思います、その流れをじっと見つめてしまいます。

* * *

先日、新聞紙上で「自分の前には道はない、ふり返ると自分の道が見える」という高村光太郎の言葉を見出し、その高く強いわが人生への誇りと気魄に、一瞬のたじろぎを覚えました。十数年前、「はじめに道はなかった、しかし大ぜいの人が歩くとそれは道になる」という魯迅の言葉を、大きな暖か味のある説得力として知った感動とは対照的でした。が、くり返し思いますと、夫々の道なのだとも考えられてまいりました。

* * *

ここへ来られている皆様のそれぞれの道を想います。その細々とした内容は知る由もないのですが、ともかく、よくいらつしやいました、お疲れのことでしょう、どうぞごゆるりとなさつて下さい、とお迎えし、いつか肩を並べて歩める道連れになれるとい、なあーと思ひ乍ら、必死で歩んで来たみぎわ会の長い航跡をふりかえています。



みぎわ会 だより

第67号 1996.10.3 発行

おしらせいろいろ

相次ぐ台風が、気ぜわしく秋を送り込んでまいりました。木蓮林の庭はコスモスが
パイ咲き盛り、美しい秋の彩りを楽しませてくれています。

皆様もお健やかに、さわやかな秋をお迎えのことと存じます。

去る九月は敬老の月とて、例年のように様々な行事を行ないましたが、今年は殊に
賑わしく華やいだ一と月になりました。その流れのいくつかのポイントをご報告いた
します。

その一

先月お知らせしました、みぎわ園の「小原トユ」さんが、「西脇市長寿番付」では西の横綱にどん
と坐っていることを知り、私たちの喜びは一層盛り上がりしました。小原さんの小さな可愛い手指の赤
いマニキュアが、慶祝訪問下さった市長さんをいたく感動させたという知らせも、うれしいものでし
た。

毎月来て下さる〇〇グループのボラの皆様には、特に「おしゃれボラ」を受持って頂いています。
何んでも揃う大きなお化粧箱が三つも用意されていますので、みぎわ園ではマニキュアは珍しい姿で
はないのですよと、わざわざこの話題について取材に来て下さった市長秘書課の方に話しました。私
はい、気分でした。

その二

米寿・卒寿の方々のお祝いも、いつものように美しく設営されました。赤いワインも、鯛の活造りも例年のとおりです。

I女さんが、ちつとも間違えず淀みもなく「かこの鳥」を、ほのぼのと終わりまで歌って下さいましたことや、T男さんが、民謡やら演歌やらをうまくコンビネーションして朗々とつやのある喉をご披露下さり、同席の奥さん（入所中）がはにかまれた様子も、仲々い、景色でした。

「場」の雰囲気がいちもかけない皆様の「かくし芸」を引き出すことを大きな学びともしましたし、同席して下さったご家族の方たちにもうれしい希望とくつろぎの場となったこと、思いました。無論私も盛装してお祝いました。

その三

感謝の集いは、園内作業——おしほりたたみ、食堂の片づけ、売店手伝い等々——いろいろご奉仕下さっている入所者へ、例年この月に行って来ている楽しい行事です。

今年は、感謝カードに添えるプレゼントが素敵でした。女性はキラキラ光るブレスレット、ネックレス、指輪など、男性にはイキな襟巻が、お一人々々に似合うよう心をこめて選ばれたのです。皆さんの喜び、私たちの喜びが、大きな花を開きました。

その四

平野市に数年前から開設されている大企業「K T I」の社員会から、ボランティアの申込みを頂き

ました。「半導体」を制作する先進先端産業に就いていらつしやる、若く、お元気な男性方の大きなお力を、ほんとにうれしくありがたいプレゼントとしていたゞくことになりました。先ずは十月五日の運動会から参加して頂きます。

「イザ」という時の力強さはとても大きいことです。が、もう一つ、とじこもり勝ちな施設生活の皆様には、「アウトドア」のサービスをお願いしています。ドライブ、お寺まいり、故郷めぐりなど、皆さんの日常に大きな窓が開かれてゆくでしょうと、私の方が夢一パイです。

その五

二十七日は、いずみ寮のお月見会が行われました。いつものように、す、きにお団子、黄色い大きなお月様もセットされました。うた、おどり、三味線、お琴、大正琴^{おおかみ}、山もりのプログラムの間に飛び入りもいろいろあり、バラエティにみちた楽しい時間がすぎました。中でも、合計二四〇歳の三人が、ピンクのロングドレスでの童謡は余りにも初々しく、アンコールの拍手が湧き起こり、歌手も聴衆も声涙交々の大斉唱になってしまいました。

その夜は中秋の名月でした。すだく虫さえ声をひそめたか、と思うように冴え渡った名月が、みぎわ村を銀色に照らす一夜となりました。

では、この十月も一日一日一生けん命に、楽しく元気に歩んでまいります。よろしくお願いいたします。



みぎわ会 だより

第68号 1996.11.5 発行

秋 深 し

今年の秋は、気ぜわしく冬に向かって急いでいるように感じますが、皆様お元気にお過ごしでしょうか。

数日前、庭の「かりん」が黄色いボールを撒いたように一パイ落ちていたのに気付きました。大方の実は小さく、かをりもうすく、発育不良でした。今年はい、「カリン酒」が造れないなあと、まだ枝に残る美しい黄金いろの実を見上げ、もう暫く落ちないで熟してネと願ったことでした。

朝の気温が急に下がったりしますと、発熱される方がポツポツありますが、全体として皆お元気です。秋の行事も趣向をこらして進められています。小旅行には、力強いボラの方々の新しい協力もありました。みぎわ園を巡室していますと、皆さんが互いに打ちとけて、のんびりとくつろいで暮らしていらつしやる感じがよくわかります。いずみ寮の皆さんも思い思いのスタイルの生活を、自由に構成していらつしやる様子が見えて来ます。こういう風景はほんとにうれしく、ありがたく私も力づけられるものです。不安なく生きてゆけることは、何にもまさる正にすごい恵みだと思っています。

今年も又、中国から「残留孤児」と呼ばれる方々の祖国訪問のニュースが、毎日放映される季節になりました。戦後既に五十一年も経ったのです。こういう肉親さがしが始まってからも長い年月が流れ去りました。むつかしい国際的事情があるのでしようけれど、なぜもっと早い時期から、そしてス

ピーディにこの運動が進められなかったのかと、いつも思われることです。小さな記念品、お守り袋、又切れぎれの不確かな記憶を大事に握りしめて、祖国であるはづの日本へ、どうしても逢いたい肉親を探しに來られる方々の、すっかり中国人化した様子を哀しく、辛い思いで見つめ乍ら、何とか一人でもと祈る私です。

今朝のことですが、やさしく、礼儀正しく、彼らの記憶を確かめ乍ら聴き、話し、又視聴者にも訴えている係官の前で、振り返る五十年の道に、肉親に拘わる一片の影も形も持たず、生後直ぐ中国人に托されたという方の、茫然とした表情を見ていて、私も共に茫然となり、切ない思いに落ちこんでしまいました。

と、不意に、絶えず徘徊をくり返される痴呆症の方の姿が、この人に重なってきました。シヨッキングな体験です。「私は誰?、ここはどこ?、何んで誰もいないの?、あ、私のところ、私の家へ帰ろう」と、唯一すじに歩きはじめるのが痴呆症の心理ではないかと思うのですが、この人は歩きはじめるともう何故歩いているのかを忘れ、私たちの誰かゞ追いかけて見つけたりして「○○さん、帰りましょうね」と話しかけると、ほんとと安心し、にこにこ素直に帰って來られる幸せがあります。が、訪日された方たちの大部分は、何の手がかりも得られず、祖国を訪ねたというだけの、却って一入淋しい思いで、現実の世界へ帰ってゆかれるのでしょう。慰める言葉ありません。唯、現在持つて居られる新しい御家族たちのお幸せを、大切にしてお下さるよう祈る外はありません。



みぎわ会 だより

第69号 1996.12. 6 発行

師走のたより

十二月に入りました。心せわしい季節ですが、まわりの山々はいつものように美しく燃えてまいりました。失望してしまいそうなことばかり多かった今年も終わりです。日本人（大和民族）——忘れられていることばです——一人一人が信じ合って、励まし合い乍ら平成九年に希望をもつてゆかねばと思うばかりです。

今月はまとまりのない便りになってしまいました。

一、もみじ——尊い自然の恵み

十一月末、二日おきに二、三回神戸へまいりました。裏六甲一体の山々がその度に、美しく色づいてゆくのを眺め、心を打たれました。山がふわあーっと盛り上がるように燃えています。みぎわ園十年誌を書くこと、急に悪くなった眼のための休息もこめて、六甲オリエンタルホテルに向かう時、丁度今年のように見事なもみじ——金いろに燃える——を眺めたことを思い出しました。あれから十八年も経ちました。想い出せば感動と感謝が溢れてまいります。

二、交わり——巡室ドキュメント

・A棟〇号

シヨートステイ新入所と聞き、まいりました。男性たちの部屋は静かです。「いらっしやいませ、お元気ですか、私こゝの松尾です」

顔を近づけて話しかける私に、不思議そうに無言で無表情に見ていられるKさんでした。

• B棟〇号

「ごめん下さい、こんにちわ、お変わりありませんか」、皆さんのにこにこ顔が集まります。Sさん、Kさん、Tさん、Oさん、皆にここにこです。

「皆さんお元気そう、寒くなりましたね」と私。

「先生、ご無理せんといて下さいネ」とSさん。

「ありがとうございます、今日は明石へ行ってきましたのよ。でも、一寸皆さんにお会いしたくて」「先生、無理せんといて下さいよ、私たちは先生に居っていましたぐだけで安心してますんできいかいネ」重ねてSさん。

「そうお、私毎日出て来てるんですよ、でも時々皆さんにこの顔が要るんやないか思つて——この顔持つて来んでもいいの?」、私は両手で顔をはさんでくるくる見せる。

「そらお顔見たいのんに決まっていますナー」、皆でハハ、、、。

• C棟〇号

「こんにちはアー」と顔を出すと、パチパチと拍手のMさん。

「私の声大きいからようわかるのね」

「い、え、声聞かんでもようわかります」

「ほんと、うれしいなあ」、Mさんは同い歳、今日は上さげんです。

「私なあー、もう十年程して先生が呆けられたらどないしようおもてなー、そればかり心配して
ますねん」、向う側からFさんの声、大正十一年生れ。

「まあーありがとう、私が呆けんようにお祈りしてネ」

「へえ、それはもう、一生懸命お祈りしてますねん」、両手を合わせ握りしめて、真剣そのもの、
Fさんに深く感謝——でも一寸不安な私です。

三、ニュース——情けなく口惜しい日々

「特別養護老人ホームの…」、ニュースのはじめにこの言葉が出る日がつゞきます。

はじめに聞いたときは強いショックを受けました。私はその日の朝礼で職員たちに、施設整備と公
的補助の仕組みとみぎわ会の実態を、一生懸命説明しました。

終わりに

皆様と共によい新年を迎えて頂き度いと祈りつつ。

かしこ





みぎわ会
だより

第70号 1997. 1. 1 発行



新春
特別号



<みぎわ園編>

私
たち

あけまして
おめでとうございませう



今年は辛女です
公私共に頑張り
ますのびよくし
てお願い致します
一杯の健康



あけまして
おめでとうござい
ます!!
今年も明るく元気に
頑張ります!!

井上晶代



あけまして
おめでとうござい
ます!!
今年も明るく元気に
頑張ります!!
一杯の健康

皆
明けておめでとう
今年
モウ
かんはり
ます
鳩本
様

(1)

明けまして
あめでとう
こいねます
飯田 啓三

謹賀賀新年
元元
本年も御元
氣で
岡本好夫

今年もガッツリ
でがんばろう
藤野 悦嗣

みんなそれぞれに
新年の訪れ
ました
おめでとうござい
ます
かんしやと、うをみ
みふれと仲よく
歩み進みましょう
松 周子

1997

賀 正

わたしの名によつて願
うことは、なんでもかた
えてあげよう。父が子
によつて榮光を授け
けになるためである。
何事でもわたしの名に
よつて願うならば、わ
たしはそれをかなえ
てあげよう。

自治会

ヨハネによる福音書一四章一三—一四節

今年もあゆまう
ごめい
あけまして
おめでとう
あけまして
おめでとう
あけまして
おめでとう



みぎわ会
だより

第71号 1997. 2. 5 発行

旅だより（一）

二月に入りました。

新しい年の一ヶ月を、お健やかにお過ごしでいらつしやいますか、お伺い申し上げます。

朝、まっ白な霜にお、われた庭がキラキラ光るのを眺めますと、正に二月、きさざぎという季節の、きびしさの中から春を待つかすかなときめきを覚えます。

「老人ホームとインフルエンザ」がマスコミの話題になりましたが、幸い私たちは今のところ守られ、いつものようにあれこれ楽しい人間模様を画く明け暮れでございます。

私事になりますが、私と満子は一月二日より二十五日まで、長い旅行をさせて頂きました。先ずは気にかゝる皆様の医療につきましては、やない、増村両先生が、お忙しい中からしっかりとお守り下さることに、のんびり遊ばせて頂きました。誠にありがたいことでした。

さて、旅は今迄考えもしなかった船旅になりました。一月四日ニューヨークで乗船し、カリブ海、大西洋から「パナマ運河」を経て太平洋に出、ロス・アンゼルスまで北上し、五日間の太平洋横断クルーズ後、ハワイに着きます。私たちはホノルルで下船し、翌日空路関空へ帰着いたしました。「クイーンエリザベス二世号」の世界一周の旅は、ニューヨークからニューヨークへ一〇四日間ですので、

その弱を利用したことになります。

不安の方が大きい出発でしたが、文字通り「インターナショナル」の世界で、珍しく楽しい体験の日々となりました。次号より少しづつ、その中のトピックスを報告する予定ですが、果たしてうまくお伝え出来るでしょうか。

私は播州平野の東北部、山と田甫に囲まれた地方で生まれ、その郷里を離れることなく八十二歳までを生活して来ましたので、「海」は先ず怖ろしいところだと思います。が、この旅の一つの大きな体験は、「海」との出会いでした。広い広い海、言い表す言葉もない美しい海の色、と、その神秘的な生命に溢れる表情に驚き、感動し、捕らえられてしまいました。もう一度、あの海に逢いたい想いが今も湧き上がってきます。

「豪華客船No1」の「Q・E・2」も既に三十年近く働き続け、老朽化が伝えられていますが、英国籍を持つ彼女の、歴史への誇りと気品がそここに感じられ、その中で練り上げられたはずのサーピスには、眼を開かれ心を打たれることが沢山ありました。

「主用語は英語」と明記された世界で、殆ど聞くことも話すことも出来ない私たちの二十日間、時には恥ずかしく、時には哀しく又口惜しく、しかも、それ故にうれしくも楽しくも面白くもある忘れぬ想い出に満ち満ちた、一九九七年のはじまりでありました。

では、次号をおたのしみに。

皆様のご健勝をお祈りいたします。

かしこ。



みぎわ会 だより

第72号 1997. 3. 7 発行

梅だより

枯木かと思える老木に、紅梅が一つ二つと数えられる程に開花し、かすかな香りを送ってくれる朝です。

春が来ました。冬はインフルエンザと一緒に去ってゆきました。い、春をお迎えしましょうか。

次から次へ重苦しいニュースに明け昏れたこの冬でした。心に喜びが広がるような、明るい便りを聞ける春になりますようにと、願わずには居れません。

今月はみぎわ園のリアルな一コマをお伝えします。

廊下を歩いていますと、一寸不審な声が聞こえました。急いでその方向へ向かいますと○号室です。AさんとBさんの間に火花が散っているようです。Aさんの悪口雑言は、謂わば痴呆の一症状と見る外ないと私たちは考えています。が、平素はおだやかなあのBさんが！と、扉の外で驚いて見ている私でした。

全身から噴出するような激しいの、しり合いのまっ最中です。Aさんの手にある杖が「ミサイル」にならない限り、共に歩行困難なお二人のベッド間の3m余は、太平洋程の安全距離です。九十歳代の老女二人の花々しい舌戦と、そのすさまじい表情になお盛んな生命力を見せられ、何となくうれしくなり黙ってそっと足を返す私は、少し離れたテレビコーナーから見つめていたらしいCさんの視線に逢い、二人は共に何となくほ、えみ合ったのです。

みぎわ会 だより

第73号 1997.4.8発行



新 年 度

春はためらい勝ちに近づいて来るようです。庭の桜の蕾もうずうずし乍ら開花を待っています。

遠く離れている私たちすらやり切れない気分には陥ち込むリマのテロ事件・相次ぐ官公の汚職ニュース・金融機関の墮落物語り・エイズ被害・いつまでもラチの明かないオウム事件・等々何とも淋しく、情けない日本の春ですが、：

お元気ででしょうか。ともかく、一人一人がしっかり自分の道を守って、明るく生きてゆかねばと思います。

みぎわ会も平成9年度に入りました。全職員が自分の仕事に新しい目標と使命を意識して出発しようとしています。私たちは皆元氣です。

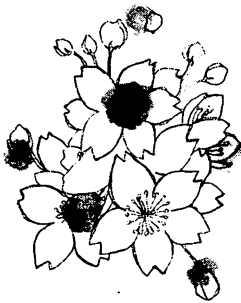
一つうれしい事があります。「お水」が与えられました。思い切って依頼しましたボーリングが二四〇mで、水源に届いたのです。涙がにじむうれしさです。

創立時は岩盤のこの地で水はありませんでした。西方三〇〇mの田甫の中の井戸が唯一の水源でした。昭和四七年度、隣の地へ「安藤建設」が誘致されたことでやっと近くまで上水道が伸ばされ、私達も上水道を利用出来るようになりました。しかし施設が大きくなった今は、一日一万円かかる水道料に耐えることが出来ません。

お風呂、洗濯、調理、トイレ、水を特に沢山使う日常で水を節約することは、清潔で文化的な生活を損なうことになります。新しい水源―田甫の井戸程度の力のようです―から頂く美しいお水を感謝しつつ、大切に、ムダ使いのないようにいたしたいと思います。

次は淋しいお知らせです。みぎわ園園長を三年間勤めて下さった 横山 猛さんがご自分の都合で退職されました。残念です。これからのご活躍を祈り、祝福してお送り致しました。

とりあえずこの一年間は「松尾周子」が施設長をさせて頂きます。皆様と共に希望溢れる新しい年度となりますように。・・・





みぎわ会 だより

第74号 1997. 5. 7 発行

萬緑 5月のたより

みぎわ園のゆきかえりの途上で、ふと目を上げますと正に萬緑の波が打ちよせる季節です。暫く立ち止まると緑の風に浮遊するかの感があります。

歳時記を開いてみますと、

・萬緑の中や吾子の齒生えそむる 草田男

・萬緑にかえりみるべし山毛櫨（ブナ）峠 波郷

の二句が萬緑の双壁とされていると出ていました。

可愛い齒齦から白い齒が小さく生える幼子の生命力の美しさよるこび、自然界では雄大な高原を柔らかく盛り上げる新緑のぶな林の大海原を峠に立つてふり返る感動が、夫々十七文字によって壮大な生命力みなぎる萬緑を見事にうたい上げられています。

この新緑の好期をみな様いかがお過ごしですか。長かったリマの問題は、大統領の透徹した思想の下に綿密、周到な計画と勇氣ある決断で処理されました。重い雲間から青い大空が見えて来る想いですが、それ故にか日本国内外では何となく不透明と無氣力な未來感を拭い切れない気分です。

私達の老人福祉及医療の分野も不透明乍ら大きな曲がり角に立たされている現在です。こういう時にこそと、四月二十五日 第一八八回の「みぎわ会職員セミナー」では、七名の廿年以上勤続の方々から、長い夫々の越し方をふり返りつつ二十一世紀へのヴィジョンを語って頂くことにしました。

* S 四十四年四月 開設時より寮母の中西町子寮母主任

* S 四十六年四月 より事務長として入職の丸山智枝子副園長

* S 四十六年六月 より勤務の笹倉美智子寮母

* S 五十年一月 より栄養士として、平成四年よりはいずみ寮指導員、平成六年よりはいずみ寮

寮長の内田純子

* S 五十年七月 より調理員としての陰山一枝調理師

* S 五十一年二月 寮母として入職しつつ看護学校にて学習した内橋一子看護婦長

* S 五十二年二月 みぎわ園調理員、五十六年よりいずみ寮給食主任、平成九年よりみぎわ園事務

員宇治川愛子

以上の七人です。皆さんが人生の一番大切な時代をみぎわ園で燃焼して下さったのです。10分という短いスピーチですが皆 しんとさせられました。誰も知らないすばらしい物語でした。

・救急車の中で家族が同伴して居られるのに「寮母さん、助けて、助けて」と叫び続けたFさん。

・村では余り好かれていなかったKさんが9年の在園後、お別れ会で職員から愛され慕われる老人になっていたことへの村人の驚き。

・「そんなキタナイ仕事を何故するの」と言われたり、両親や姑さんからも反対されたけど……

・漸く一番大切な信仰の道に踏み込まれた。等々……

又、大雪の朝、四時から8キロの道を歩いて調理の早出を果たされた陰山さんのこと、いつも若く

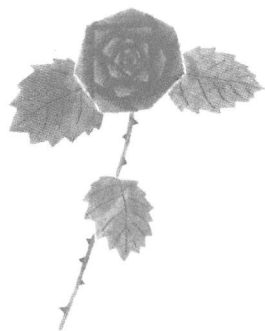
明るい中西さんが何にもわからなかったみぎわ園の草創期に天使のように輝いていたこと・・・

書くことも語ることも尽きない事ばかりです。

今日のみぎわ園の礎石をつみ上げて下さった歴史を改めて聞き、又想いできました。人はかわり、世はうろつきますが、この「いこいの汀」のスピリットを不変のものとしてゆきたいと、今日、曲り角に立って、誰もが私たちの旗じるしを確認出来た時でありました。

皆様のご健勝を祈りつつ

みどりの日に





みぎわ会
だより

第75号 1997.6.9 発行

活性化 六月の便り

今年の五月は上旬では真夏の暑さに驚かされ、中下旬は一転して異常低温がうつつ
おしい雨もようの中につづきました。

皆様にはお健やかに過ごしてでしょうか。

こういう異常気象に弱いのが高齢者です。けれど、幸いみぎわ村の皆さんは元気に
楽しく日を過ごしています。

施設では利用者の皆さんの日常生活の活性化をいろいろの角度から進めていきたい
といつも考えています。

開設当時Ⅱ昭和四十年代に比べ利用者の高齢化、衰退化の進んできた現在では、いろいろな工夫や
援助が必要になって来ていますが、近頃は一応のレベルに近づいてまいりましたので少しその内容を
ご報告します。

1. 歩け歩け運動

毎朝 9 時 30 分 広く長い廊下が歩く方々で溢れます。老人車、補助三輪、四輪、杖 いろいろあり
ますが明るい表情で歩け歩けが交錯します。(50 から 60 名の参加です) 一応終わりますとユーティリ
ティで暖かいお茶や冷たいジュースのサービスがあります。毎日の歩行量はそれぞれ自分のカードに
記入されます。

2. 座位での運動 車椅子上での体操が一階二階ではじまります。かけ声をかけ乍ら、10から20名の方たちが楽しんでいます。

3. マリヤ館（痴呆棟）の方たちには係りが付いて近頃は3Fのデイルームへゆき、風船バレー、ボーリングなどグループ遊びがとり入れられています。落着かないOさんもこの時は楽しそうです。うろせず一緒に遊ばれているそうです。ビデオを見たり唄ったりで時間を過ごし、お昼ごはんも広いところで済ませてお部屋へ帰られます。

4. ラウンジ

大体コンスタントに賑わっています。コーヒー、紅茶、ビール、甘酒、カルピス等のレギュラーメニューの外に日替りメニューがあります。ぜんざいの好きな甘党、タコヤキ大好き党、誰もが好きなふかし芋等々平均27人位の利用です。市民的雰囲気 交わりが生まれ、昔話や唄もおどりも出ることもあるようです。

5. 五月はアウトドアのプログラムが沢山ありました。

八千代町、社町とジャスコ、加美町、東条町等 ふるさと訪問ドライブ 買物ツアー、フラワーセンターへのお花見等 数少なかった晴天日を選び乍ら各10名余の方たちが元気に出てゆかれました。「KTI」から若い男性のボラを頂いたおかげで安心して送り出すことが出来ました。マンツーマンの力強いケアの下ですから。最近では車酔いもなく「今度はどこ行くのん」と皆さん活き活きムードです。

では又、終り



みぎわ会 だより

第76号 1997. 7. 10発行

七月のたより

元気を出しましょう

台風8号が長い日本列島を南から北へ走りすぎてゆきました。いろいろの汚れをうち払うような大風、それを流し去る大雨のようでした。多少の被害はありましたが今日はさわやかな青空です。

七月、いよいよ盛夏の訪れです。皆様いかがお過ごしですか。どうぞお体に気をつけてお元気を出して下さい。みんな元気を出しましょう！

この一ヶ月余り、テレビ、新聞等の運んでくれるビックなニュースはいづれもお金のからんだ暗く情けない情報ばかりでした。日本国の大事な脳とか心臓とかが病気になっているのではと心の痛む日々でした。その中へ神戸の少年犯罪の恐ろしい報らせです。全国民が息も止まりそうなショックを受けました。一体どうすればよいのでしょうか。：

現在日本では65才以上の人口が15才以下の人口より5万人多くなるといふ開国以来の人口逆転状況に入りました。しかもこの差は年々大きくなってゆくという超高齢社会になるのです。社会保障関係では、医療保険のあり方で患者負担を殖すことにしたり、年金の受給時期をおくらせたり、高齢者介

護保険の制度を作ったりと、これから廿一世紀を安心して生活出来るようにと苦心の政策や制度が立案され、それらは間もなく日常生活に這入って来ます。

私たち老人ホームはこの大風の中に置かれることになります。みぎわ園、いずみ寮、ナオミ館は夫々どういう時にも、一番大事な事を大事にして自分たちの使命をしつかり果してゆこうと、皆で学習し、研究し、話し合っています。一生けん命です。

老人ホームに求められるサービスがいつでもきちんと提供出来る力を職員の誰もが持たねばなりません。その力は沢山の知識と深い経験、暖かいハート、健康な体がなくては実現出来ないのです。私たちは一生けん命に励んでいます。

六月末、私は東播地区のマッサージ師会の総会に招かれて「Q E II」の旅行の話をさせて頂きました。100人近い方たちが集まりました。皆、視力障害というハンディを持つ方たちですが、その皆さんの明るさ、和やかさ、又集まりの中に漂うきれいな友情に私は感動してしまいました。「話」は余りうまく出来ませんでしたがとても力付けられました。健康でさわやかな世界でした。

皆様 元気を出しましょう。楽しく生活いたしましょう。

では、又



みぎわ会 だより

第77号 1997. 8. 10発行

みぎわ便り 八月

「ケア」の場から（一）

台風が相次ぎ不安にあけくれた日本列島の一ヶ月でした。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。お伺い申し上げます。本日（七月三十日）は久々に太陽の光が降り注ぐ朝が与えられましたので、急遽「歩け歩け運動」のあとの皆さんのお茶の場を南庭園に移し、さわやかな日の光を楽しんで頂きました。

さて今や「高齢者介護」という言葉や、さまざまな技（ワザ）について、あらゆるメディアからの情報が溢れる毎日です。

老人ホームでも廿一世紀からは制度が一変し、「措置」という公助から「介護保険」という共助を主流とすることが既に国会で議決されました。具体的にはどうなるのかはまだまだはつきりしていません。が、行政上でも社会的にも現場でも新制度が定着するまでには相当な時間と様々な混乱を通過することになるでしょう。

唯、要介護の方には、今日も明日も継続的に介護が必要です。

私たちはその現場でひたすら励んでいます。

みぎわ会便りではこれから三ヶ月のシリーズで老人ホームみぎわ園が行う介護——利用者の日常

生活援助——のドキュメントを各部の日誌から二十四時間の流れに沿って拾い集めつつ記述してみ

ることにいたしました。プライバシーもありますので、小さなスナップをつなぎ合わせるような形に

なるかと思いますが、ご想像頂ければと希う気持ちです。

介護日誌より

○月○日 晴 在園者 一三〇名

シヨートステイ 二〇名

出勤介護職員 十七名

・ボランティア

かえでグループ 四名

A M::牛乳・お茶配りなど

P M::手芸教室

・入浴 特浴三五名 一部介助浴十三名

・排泄 おしめ 五十八名 夜間のみ七名

便器ポータブル四十二名

・食事 全介助十一名 一部介助六名

Tさん食事摂取記録

(特に食思欠如、衰弱者の摂取内容は毎食記録することにし、床頭台に記録簿が置かれている。)

朝 玉子どうふ50gの $\frac{2}{3}$

メロン6口 *口(クチ)

アイスクリーム 200 g カップの $\frac{1}{2}$

昼 玉子どうふ 50 g 全量

メロン 5 口・ヨーグルト 2 口

リンゴジュース 100 cc

夕 かたくり 200 g

リンゴすり下ろし 200 g

☆一日総カロリー 約 1 0 0 0 Kcal

注 * □ || 5 g スプーンで

・歩け歩け運動参加者 五四名

九・三〇から十・〇〇AM

内介助者 ○名

・朝の体操 十六名 (リハ係)

車椅子での四肢等の運動

一〇・〇〇～一〇・三〇AM

・個別リハ (リハ係)

I 男 起立訓練

Y 女 声を出して絵本を読む

各部屋係

・*SSのNさんについて

昨日の入浴では全身の汚れが取れず、本日家族の了解を得て特浴、長い髪もカット、Nさん「こんな気持ちのよいことなアー」と喜ばれていた。

・Tさん 希望によりD 21よりC 5へ転室。

・Oさん *Kを触っておられたのでシャワー浴し、衣類全部及リネン交換する。

・Yさん *K失禁 シャワー浴し衣類リネン交換。

・Mさん *H漏れパンツ交換。

・Yさん Kの汚れでパンツ交換。

・デイルーム状況 参加者十六名

※マリア館（痴呆ゾーン）の方たち

記事 今日少し涼しいので窓を開けるととても気持ちの良い風が入ってきました。皆さん、夫々静かにTVを見ておられました。暫くしてTさん、Kさんと風船遊びをしていますと、一人、二人と、輪に入って来られました。はじめの頃は職員がお世話をしていましたが、Kさんが手をだしてリードをはじめられました。様子を見ているとKさんは声をかけたり、風船を二つ使ったりよく工夫されていました。続けてTVを見る方、ゲームを眺める方、様々でしたが和やかな雰囲気の中でそれぞれの時間を過ごされていました。

一：〇〇PMー三：〇〇PM

・手芸クラブ

ボラの「かえでグループ」の指導で手芸

参加者八名

「あさがおの壁かけ」を教えていただきました。皆さん難かしいと言いつくとも静かに真剣に取り組んでおられました。Tさん、Fさん最初余りの気ではありませんでした。作り始められると熱中され、とても上手に仕上げられました。皆さん帰りはいい笑顔で「きれいに出来た」と喜んでいらつしやいました。

・Y、Tさんについて（注 前日発熱有り）

昨夜はおしめをして欲しいとの希望に従ったが九…〇〇AM処置時、よくお話し、ご本人納得の上でおしめ除去し、PTに介助する。

食事は暫くの間、居室配膳とするが、できるだけ食堂へ行かれるようお話ししている。昼食は「いない」と言われたのでリンゴジュース150ccと「飲むヨーグルト」（120cc）を持っていくと全量摂取される。夕食は希望により「おかゆと梅干」をお持ちしている。全量摂取された。 以上

付記

夜の部は次号になります。日誌をほとんどそのまま転記しました。

「略用語」について

・SS…シヨートステイ ・PT…ポータブルトイレ ・K…便 ・H…尿
・マリヤ館…痴呆のゾーン ・デイルーム…ルデヤ館3Fの広い部屋



みぎわ会 だより

第78号 1997. 9. 10発行

9月だより

今年の夏は冷夏、猛暑、それに多発する水害など変化の激しい不安定のなかにすぎてゆきました。

今日は九月、新涼というわけです。稲田も少しづつ色づいてまいりました。実りの秋へ希望を持つて進みたいと願います。

皆様いかがお過ごしですか、御健勝を祈ります。

さて、今日もあれこれご報告の便りになりましたが、よろしくお願いいたします。

○うれしいご報告です。

入所三年目になる小原トユさんが百歳になりました。みぎわ園開設以来百歳第一号です。小原さんは小柄ですが、日常生活は殆ど自立です。知的にもしっかりしている方です。マニキュアも好きなおしゃれです。八月二十七日に市長・議長・市社協理事長様方をはじめ沢山の関係の方々のご来園をいただきました。

大喜びの小原さん、ピンクのきれいなワンピースを着て頂いて、私達も一緒にお祝いました。裾にいくつもりの花飾りのある美しい百歳ドレスを次々と沢山の方に着て頂きたいと願っています。

○九月一日から医療制度が変わりました。

殊に老人医療は大変ややこしい形になりました。医療よりもあたらしい計算方式に時間を取られて

しまう一日でした。が、一番大切なことを大事にしたいと思う私達の生き方、働き方は変えていません。

○八月二十八日は「県」の監査を受けました。

例年のことですが、午前十時から午後六時まで、三人の係官の綿密な査察がありました。

三人の理事様、一人の監事様と四人の役員様が法人から列席して下さいました。

私達はいつも公共施設としての在り方を全員に周知させ、姿勢を正しく、使命感を持って事業を進めていますので、百点満点とは申せませんが、八十八点以上の自己評価と自信を持っていました。

が、細かく調べられると書類上思わぬ手落ちも一・二点ありました。けれど、一応無事に終わりました。

○監査官と私の考え方。

社会福祉法人の運営基準に照らして次のような指摘を受けました。

百万円以上の工事とか物品購入には理事会の承認を受け、複数の業者から見積りを取って、少しでも公費を大切に費やすために安価な方を選ぶといった点で、いずみ寮の給湯ボイラーを競争見積りなしに平素から依頼しているM業者から単独扱いで購入したことについての指摘でした。

私は次のように答えました。

施設経営上、大きな物を買う時には競争という市場原理に立つのは当然だと思います。しかし、給排水・ガス・電気関係といういわゆる「ライフライン」の問題では私は二十数年来、同一業者に定めて

来ました。この多数の心身共に生活力の低下した高齢者の生活と生命の安全を守る上で、直接生命に関係のあるライフラインの管理や設備工事を金額の差だけで次々に業者を変えることはいたしません。私は信頼関係を第一に重視しています。例えば、夜間とか、休日、それもお正月とかお盆というような時に停電又は給水や排水のトラブルが起る可能性もあります。これは一番困る事です。私の永年信頼して来た業者はどういう時でも必ずすぐ来園して誠実に故障を直して下さいます。真夜中でも来て下さいます。そういう安心なしに私達は皆さんへのお世話をする事は出来ません。せっかくのご指摘ですけれどそれに当たる不信行為がない限り私は業者を変える事は致しません。

こうして監査も格別な事故もなく終わりました。

二年後には介護保健法が施行されようとしています。大変な試金石の時です。優先順位・価値感の根拠をしっかりと認識する力がなくてはこの大波を乗り切る事は出来ないと思っています。

皆様のご指導と応援をお願いいたします。

では、さわやかな秋を楽しくお過ごし下さい。都合でケア日誌は本月と来月はパスさせて頂きます。



みぎわ会 だより

第79号 1997.10.10発行

十月 秋の便り

早十月です。お元気にお過ごしでしょうか。

相次ぐ台風はあちこちで様々な災害を惹き起しましたが、その激しい風雨の跡から美しい秋が生れて来ました。

高く青い空の下にはコスモスが咲き乱れ、金木犀の香りが漂います。夜はきれいな月の光り、すだく虫の音に暑い夏の疲れが癒される思いです。

去る九月はいろいろな敬老行事を例年どおり行いました。考えてみますと、みぎわ園では三十回目の敬老月になります。年毎に、皆様の長寿と健康を心を尽くしてお祝いして来た遠い道をふり返り、その道に注がれた神の大きな恵みと祝福に深く感謝いたしました。同時に三十年間の移り変わりにも改めて気付かされています。

形式や方法、言い表し方など随分変わってまいりましたが、が、変わらない、変えてはいけないものもあります。それはやはり私達の使命感とも言える「愛し合う心」だと思っています。

愛し合う事は又、大変難しい自分との戦いですが、これなしにはこの仕事が出来ない、この一事を大切にしていゆかねばと祈る心です。

九月は研修の月でもありました。各部夫々に大小いろいろな研修会に大勢参加しました。法人役員の方にも参加して頂きました。

特筆するものとして、スウェーデン リンシヨーピン市へ一週間の研修には塚口理事と芦生指導員が参加しました。福祉新聞社主宰のヨーロッパ研修には丸山・田中両寮母が参加しました。今日はロンドンから楽しい電話が入り、元気な丸山の声を聞き安心しました。夫々少し大きくなって帰る事と思います。

今、国内の研修と言えば二十一世紀より実施される「介護保険」が共通の最大テーマです。

福祉界のビッグバンと迄言われるこの大変革の波を日本中の各業界が注目しています。この波にうまく乗り、企業も学者も夫々の場や益を得ようとするすさまじい流れも見えます。

この大波を真向うからかぶる私達の立場はどうでしょうか。老人医療の改革のように患者より計算が先行する細かな規則に悩まされるのかも分かりません。

私たちが一番大切なものを大切に作る戦いが激しくなる重要な曲がり角です。ともかく施設利用の皆様は安心と信頼を持つて頂けるサービスを大切にしなければ。三十年間の汗と泪で蓄積した歴史の力が試みられる時ですから。

お変りない皆様のご指導とご理解をお願いいたします。

朝夕の冷氣などデリケートな季節中です。くれぐれもお元気にお過ごし下さいませ。

以上



みぎわ会 だより

第80号 1997.11.7 発行

十一月 この秋

今年は樺の大木がいち早く紅葉しました。まわりの木々の梢の上に大きく広がる紅葉のドームさながらの眺めです。

晴天つづきのせいでしょうか錦木や楓の枝々がひとときわがえた「くれない」に染まっ
てゆく様には沁々と自然の慰めを覚えられれています。

皆様にはお褒りなくお過ごしのことと存じます。

私たちは敬老月間につづき行事の多い十月を充実した想いで、一生懸命に過しました。この間、毎日沢山の団体や個人の「ボランティア」の方々に力強いご協力を頂いてまいりました。

十年前頃までは考えられなかったうれしく素晴らしい事です。休みなく移り変わっている社会なの
だと思わせられています。

さて、今月は「夜間ケア」のドキュメントをご報告したいと考えていましたが、しんと寝静まっているか
に見える150名の住居の中で終夜休みなくくりひろげられています緊張に満ちた忙しい動きを短い紙面に
写すのはとても難しい事だと思い、少し違う角度から高齢者の現実をお伝えする事にいたしました。

「妄想」という問題です。

「妄想」を辞書で引きますと「全く根拠のない自分勝手な誤った確信」と解明されています。高齢

になり精神機能が生理的に低下するとよく現れる病的心理です。中でも被害妄想が多発します。これは「他人から害を加えられていると思ひ込む事」です。

具体像として、大抵はもの忘れが起点になります。加齢による記憶力低下は誰にでも出て来ますが、自分のもの忘れを忘れ「ここに置いた」と。又は、「ここに納まつた」と。はずのお金が見つからないと「盗られた!」という誤った確信に直結してしまうのです。

「寮母さんに盗られた。」はまだ良いのですが、「〇〇さんに盗られた。」と人物を特定されるのは大変困るケースです。「誰も盗んだりしませんよ、あなたの思い違いじゃないですか。」と、つい禁句が出てしまいます。

「まあ困りましたネ、ひよつとして忘れるという事もありますから他の所ももう一度探してみましようか。」と持ちかけ、聞き入れられるのは (1) 症状がまだ軽い。 (2) 両者の間に信頼関係が出来ている。 (3) 職員のアプローチが優れ、且つ熟練している場合です。

簡単に衣装の中とか、枕元のどこから紙幣が出てくる事が多いのですが、「ああ、私忘れてました。」という言葉は出て来ません。「まあ、一ツペン盗ってこんなところへかくしたんやね。」これが症状です。思ひ込みなのです。

この数年みぎわ園・いずみ寮共にこうした病状の方が殖えて来たのは入所者の高齢化の進行のせいだと思ひます。

一過性に消え去る場合もありますが、妄想が日常の精神生活に定着し、加害者と思う方を執拗に責

めたり毎日繰り返し職員に被害を告げられる方もあります。特定された方が正常であれば私たちの方から、「申し訳ないわね、ともかくあれが病気なんだから気にしないでネ。」と繰り返し力強く話し慰める他はありません。「口惜しいけれど仕方ありません。」とがまんして下さる時には本当に拝みたい位にうれしく感じます。又一方、特定された〇〇さんも痴呆が進行している場合は「何であんな事言われるの。」と無心に問いかけられたりします。「何にも心配しないでいいのよ、あなたには何にもないのよ。」と肩を抱いてしまいます。

いずみ寮では時にはエスカレートしてしまい、退寮騒ぎになることもあります。

どうにもならない日常茶飯事と、それぞれに対応して来た私たちですが、近頃新しい進展を聞き驚きと困惑を深くしています。

それは妄想者が繰り返し特定の方の名を言い続ける中で、数人の記憶障害がはじまっている方が「私が忘れたんだろう。」と、失せ物にひそかな「あきらめ」をつけていたところ、このきびしい声におられて「そんなら私のあれも〇〇さんなのか。」と思いはじめられているという情報です。

情けない伝染病と言えるでしょうか。私たちの難しい対応が求められています。が、大部分の皆さんは事実をしっかりと認識して、静かに悠々と生活して下さいますのでご安心下さい。皆様を大事にお世話しています。

では錦繡の美しい秋、健康の秋をお楽しみ下さい。

かしこ。

師走のたより

みぎわ会 だより

第81号 1997.12.8 発行



十二月に入りました。

いかがお過ごしでしょうか。お元気でいらつしやいますようにと願う思いしきりです。

さわやかな秋晴れがつづきましたが、晩秋の冷たい雨が冬を引き連れて日本列島を覆いはじめました。お天気もさること乍ら此頃の日本社会はどうしたのでしょいか。

あと二年で二十一世紀ですが、正に世紀末という言葉が象徴するよりどころのない不安に明け暮れています。

一番大切な物は何？

信じられる物は何？

と心のさまよいすら覚えています。恐ろしいことです。

一方、私たちにとりまして二十一世紀には必ず現れて来る「介護保険」の制度にも不安一ぱいというのが正直なところですよ。

きつと現実にフィットしないコマゴマした規則が一パイ並ぶ事でしょう。

しかし、私たちはイヤでもこれに従う外はないのです。

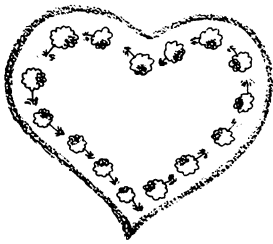
私は今、こんな風に思っています。私たちはこれからの二年間に一番大切なものは何か——無論、

施設を利用される皆様の安心と相互の信頼感成立へのサービスです。——をひたすら追い求めて、これを守り通す力のある施設経営と職員育成に専念する事だと思っています。

具体的にはどういふことを表現出来ませんが、誰もがこの一点に視線を当てて足腰の強い、ゆとりのある施設を作り上げて行きたいのです。

今日の混沌とした乱れの中から誰もが自分の人生の光りを見付けて勇ましく新年を歩み出さねばと祈っています。

(はずかし気もなく気炎を上げている八十三歳の松尾周子です。)ではご多忙なお年を迎えて下さいませ。





みぎわ会 だより

第 83 号 1998. 2. 10 発行

みぎわ会セミナー

お元気にお過ごしでしょうか。インフルエンザ流行のニュースが流されていますが、私たちは昨年末、全員にワクチン注射を行いました。今のところまだウィルスの侵入を受けては居りませんがしつかり予防しようと話し合っています。

さて、一月二十五日は第一九四回「みぎわ会セミナー」を開きました。今回は「選ぶもの、捨てるもの」をテーマとして全員2分間のスピーチのスタイルを取りました。聞いてみますと、選ぶという「プラス」視点と、捨てる「マイナス」視点をしつかり把握して自分の思考を表現することの難しさがよく感じられました。

ケアサービスの中で こうしたい、ああいう点を大切にしたい、更にこの点に——という「プラス」志向の言葉が多いのは発表者の若さの現れで自分の仕事へのひたむきな取り組みの姿を力強く見せられる反面何を捨てるべきか分からないという率直な言葉や、「捨てる」ということの理解に到らない成長期のパワーも見られました。

捨てたいものとして、うぬぼれやポーズ、甘えとマンネリ、過剰な謙遜、いいかげんさ、まわりを気にする弱さ、つい出易い汚い言葉など具体的な発言には説得力を感じました。

「選ぶもの NOと言える勇氣 YESと言える大らかさ
捨てるもの NOと言うわがまま YESという弱さ

とポスターの標語にしたいようなステキな発言もありましたが。一つのテーマについて全員が全員のスピーチを聞く中で互いに育ちゆくことを期待して始めた内部研修ですが、一九四回、二十年余りも休みなく続けてきた過程がこの事業体の歴史でもあります。

.....

.....

.....

もう暦の上では春ですが、大変寒い日が続きます。地球温暖化に不安を持つ私たちには冬が冬らしく寒いことは一つの安心要素だと思います。それにしても不安と不信に満ちたニュースが余りにも多すぎる近頃の日本国社会です。せめてここ「みぎわ村」は小さくとも安心して信じ合える社会でありたいと願っています。

皆様もお元気で希望にみちた春をお迎え下さい。では 又、三月まで

かしこ



みぎわ会 だより

第84号 1998. 3. 10発行

三月「名こそ惜しけれ」

「お庭のしだれ梅がとてもきれいに咲きましたネ」と、いずみ寮のYさんが言ってお下さり、私はガレージの裏になって道からは見えなくなつたその梅を、道をまわつて何度も見にゆきました。この梅は30センチ位の鉢植えで頂いたものですが、庭に下ろしてもう二十年以上も経つてでしょうか、本当に美しい姿に育ちました。又、数日前「鶯の鳴くのを聞きましたよ」とやはりいずみ寮のTさんがニコニコし乍ら知らせて下さいました。

私も昨日朝 裏庭の藪椿の大本が可憐な赤の二・三輪を咲かせているのを見、思わず暫く足を止めてしまいました。

冬はもう終わりです。心のめいるようなニュースの相次ぐ今年の冬でした。が、春が訪れています。明るい、元氣な春が皆様に訪れますようにと祈りつつお便りをいたします。

今日のテーマにつきまして、先日、B誌随想欄で読みました記事を少し要約して記します。

『行政改革の名の下に中央官庁の廃止・統合が論議される中で、国民が馴れ親しんだ省庁名が消え、新省庁に付けられている名称に国家の行政を担う機関にふさわしい品格が感じられないのは残念だ。『昭和』の元号が『平成』に改められた時に感じたようなほのかな香氣というものが無い。

日本の国民全てが「よみ、かき」出来る人になるようにとの国家的ヴィジョンをこめて「文部省」

が創設されたのは明治四年——百二十七年前——であって、現在わが国民の識字率は世界に誇る高さであり、そこから国家の力強い発展があった。

大蔵省は明治二年に設置されたが、その歴史を遡ると遠く大同二年——千百九十年前——に及ぶ。当時国の財宝を納めてこれを管理するために大きな倉が建てられた。この大蔵が大蔵省という国家の財政を司る役所になったのである。「おおくら」という読み方は日本固有のやまと言葉の読みである。こうした長く重い歴史が近頃内部から汚されて来ているのは残念だ。唯、名を改めて済むことではなく、役人は勤務する役所(省)の輝かしい歴史と任務をしつかり意識して、その名に恥じぬ存在であってほしい。

まさに「名こそ惜しけれ」である。』と。少し長くなりましたが以上のようなようです。



私たちの事業体の名は「みぎわ会」です。このみぎわは聖書、詩篇二十三篇の「神はわたしたちをい・こ・い・の・み・ぎ・わ・に導き給う」という詩に根源があります。「砂漠の中のオアシスのほとり」の意味です。施設サービスはそのような快さ、安らぎを利用者に提供できるものでありたいし、施設そのものにもさわやかな信頼のイメージを漂わせたいとの祈りに根ざす命名です。

いずみ寮以降のナオミ館、ルデヤ館、マリヤ館はそれぞれ聖書に登場している信仰篤い女性の名前を頂きました。

「名は体を表す。」と言われます。

新年度で三十年になる「みぎわ会」です。

「名こそ惜しけれ」の文を読み乍ら私は、みぎわ会にかかわる一人々々がこの事業体の名を意識し、神の御祝福の下にきれいに澄んだ歴史を日々の働きのなかから積み上げて下さるよう改めて祈らずには居れませんでした。

「名こそ惜しけれ」美しい香りを持つ日本語ですネ。
ではご健勝を祈って。

かしこ。





みぎわ会 だより

第85号 1998. 4. 10発行

新年度の志

平成9年度は終わり四月一日より新年度に入りました。

皆様お変わりなくお過ごしのことと存じます。

ナオミ館の大木蓮がいつものように大空に向かって枝々パイに真つ白な花を咲かせました。この姿に私たちは力づけられる思いです。

私の庭にはピンクや赤のボケの花があちこちに咲き、水仙の黄色も毎日少しずつ広がっています。毎朝この花たちから「元気を出しなさいネ」とやさしくほほえみかけられて出勤する私です。

今年の冬はひどく寒い日々から急に暖かい日がつづいたり、すさまじい春雷に驚かされるなど、不安定な気象でした。が、間違いなく春になりました。ありがたい気分です。

さて、このみぎわ会は今年で三十年目を歩み出します。私にとりましては三十年間もこの事業を続けさせて頂けるなど、全く夢想もしませんでした。が、確かに三十年目の今年です。この長い途上では数えることも出来ない多くの方々のご支援を頂いてまいりました。二百人近い誠実な職員の働きもありました。

そして一千人近い方たちの旅立ちを心をこめて見送りました。この方々が残して下さった多様な経験が私たちの学力となり知恵にもなっています。

施設にはあと二年後、二十一世紀から現在の「措置費制度」が新しい「介護保険制度」の変わるという大改革が近づいています。わが国の急激な長寿化の中では止むを得ない変革だと思えます、が、長年「健康保険制度」の下で診療をして来た私にはこの「公的保険制度」がケアの必要な高齢者にも、ケアを提供する施設にも相当不合理な不自由な条件を持つて来るのではという不安を拭うことが出来ません。

去る三月の職員セミナーでは改めて私たちの任務と志を確認いたしました。

それはどんな条件下でも私たちは施設を利用される皆様に「安心と信頼」の中で生活して頂く事が一番大切な使命であるということです。

規制というものは一番肝心な「人」よりも細々とした定めや文字を優先する特徴があるものです。

万一そういう矛盾があったとしても、その時こそ私たちは長年の経験と知恵を用いてこのホームに身を委ねて下さる皆様に先ず「安心」して頂くように大切に暖かくケアする事を最優先してゆこうと静かに心を定めています。

どうぞお変わらない御指導と御声援をお願いいたします。

新年度の御報告があります。

平成十年度より 丸山智枝子 をみぎわ園施設長に任命いたしました。

皆様の暖かい御指導を重ねてお願いいたします。

では、花爛漫の春をお楽しみ下さいますように。

かしこ。



みぎわ会 だより

第86号 1998. 5. 11発行

五月の便り 新緑

今年の春は気ぜわしく訪れ、急ぎ足で過ぎて行きました。早、初夏の風光る日々で
ございます。

皆様、お元気にお過ごしですか。

水仙、パンジー、チューリップ、木蓮、木瓜、花々は一せいに咲き出しましたが、
それぞれ言い合わせていたかのように、いさぎよく終わってしまいました。そして、
今は新緑のもえるこの辺りです。

葉先のほのかに薄紅色のもの、透明な緑いろ、生^うい生^ういしい紅色と、さまざまも
みじの芽立ちの上に空を覆うばかりに櫨の新緑が広がり風に波打つさまは見ていて飽きることのない
美しさです。

又、その色合いが朝毎に少しずつ変わって行くのには感動させられてしまいます。こうした生命溢
れる自然の営みに私たちは力づけられます。

みぎわ会の新年度はかわりなく静かに流れ出しています。一人々々が与えられた任務を新しく意識
して力一パイの「やる気」を持って励んでいる気力を私は感じています。さわやかな五月の風のように
に快くうれしいものです。五人の新人も暖かな交わりに導かれて素直に育っています。

今年もきつといい年になるでしょう。

入所の皆さんも落ち付いてお元気に過ごしていらつしやいます。ショートステイの出入りは結構あわただしいのですが、この家に入られますと皆さんはいつの間にか安らいでこられます。個人差や状態の違い、病状の変化から絶え間ない波立ちはありますが、こういう集団としては当然のことです。職員たちは大声を出したり慌てたりする事なく、すべて適切に対応しています事を毎朝の報告や詳細な記録で私は確認するのですが、それはほんとに大きなよろこびです。

見えざる神の大きな看守りと恵み、職員の献身的な動きに感謝して祈るばかりの毎日です。

疼み

私事ですが、以前から時々痛んでいました右ひざがこの程、急に悪化してしまいました。いたいのを我慢し乍ら、ついうろろろしすぎた事が原因だと思っています。

が、「立つこと、歩くこと、即激痛」という体験の中で、日頃心をこめて皆さんの「疼み」に答えて来たつもりの自分の心がまだまだいい加減なものであったのではと教えられています。

この連休をゆつくり休養させて頂き、辛抱できる「いたさ」まで癒して頂きたいと祈っています。読者皆様のご健康とご多幸を祈りつつ、又、来月。

かしこ



みぎわ会 だより

第87号 1998. 6. 15発行

六月の便り

万緑の風光る好季とうたわれる五月ですが、今年は梅雨に似たうつつとうしい雨の日や、突然「真夏日」が続くなど不安定な異常気象の中に過ぎて行きました。

皆様お変わりなくお過ごしでいらっしますか。

この二・三日さわやかな五月晴れに恵まりましたが、間もなく梅雨入りとなります。お元気で明るい夏をお迎え下さいますよう祈ります。

私共のことですが、創立三十年記念の職員旅行を委員たちが計画いたしました。一五・六人ずつ四班に分け、五・六月の二ヶ月に亘って行う事になりました。

目的地はラスベガス組・ハワイ二組・北海道一組となり、それぞれ自分の選択で編成されました。五月中にはラスベガス組とハワイ組一班の旅行が終わりました。海外班は三泊五日と短い日程ですが、その日を待つ楽しく長い日々、又、終えた後の余韻にひたる時も加えますと結構大きく長い楽しい行事と申せます。

二十年、それ以上の勤務を続けて来た方たちは暗い空を飛ぶ長い機中のしじまの中で次々に浮かぶ想い出をたぐり乍ら遠い越し方への一人の想いに浸られた事でしよう。まだ短い勤務年限の若い方たちは職場の事よりも行く手への夢が一杯で万華鏡のように美しくキラメク想いを楽しまれたと思います。

旅は本当に良いものです。私はラスベガス組へ入れて頂きました。私の宝とも力とも言える十五人の少し年長組の第一班です。丁度娘たちに守られた母親の姿です。忘れがたい旅になりました。

一つの班が出発しますと必ず二・三人のOBが現役のように現れて、すんなりとその日の仕事について下さるのは、何とうれしくありがたい事でしよう。唯々 ごくろうさまと言うばかりです。

五月中には前年度の役員監査を頂き、事業報告書も出来上がりしました。二十三日には平成九年度決算理事会を開き、全てご承認を頂きました。次号にはその報告書を掲載いたします。

付記

前号で私の脚の事を一寸書いてしまいましたところ、沢山の方々からお見舞いの言葉や電話などを頂きほんとうにありがとうございます。「〇〇のハリがよろしいよ。」とか「これを貼ってみてください。」と入所の皆さまからも心配して頂きました。「痛みがわかる。」にはこんなに辛い体験が要るのですね。少しずつ良くなっています。ありがとうございます。旅行中は車椅子のお世話になりました。満子が付き添ってくれ、同行の娘たちにも助けられて旅を楽しませて頂きました。各空港ではどこでも乗るまで、降りるまできちんと車椅子係りの方が送迎して下さいるのには驚き又感謝でもありました。

ロスの広い広いターミナルビルでのことです。搭乗口までの長い長い道を私の車椅子を押して運んでくださった方が、とある窓辺のベンチまで行き、私を降ろし「サンキュー」の声を後に去って行かれました。わたしは仲間の到着を待ち乍ら、人々の流れやいろいろのものを眺めて楽しんでいましたが、一寸後の壁を見上げますと「HANDICAP ONLY」とはつきり白いペンキで記された板が張りつけてあるのを発見しました。これはこの旅から受けたショックキングでもある大きな体験です。ありがとうございます。

では来月迄。

かしこ



みぎわ会 だより

第88号 1998. 7. 10発行

名残り

いよいよ盛夏になりました。

四季という美しい変化のある日本の気候ですが、これからの一・二ヶ月は高温多湿の暮らしにくい日々が続きます。

皆様くれぐれもご健康でお過ごし下さいませ。

さて、みぎわ園では五月下旬から無事平穏な日々が続いていましたが、六月末ぎりぎりになり お二人の方を相次いでお送りすることになりました。九十七歳八ヶ月の S 男氏と、八十九歳四ヶ月の T 女さんです。S 男氏は約十年、T 女さんは十二年半と共に長い在園でしたので、私たちに沢山の想い出を残して下さいました。

お二人の名残を惜しみつつお偲びしてみたいと思います。

S 氏は「百歳迄生きる」ことに強い希望と信念を持っていたらしやいました。この目的達成のために、ご自分の健康管理には格段の配慮を続けられました。ご自分の身辺はきちんと片付け、ベレー帽、襟巻き、かすかな香水と、外出はもとより診療所へ来られる時もそうしたダンディぶりを見せられていました。毎日、新聞を読まれることも難聴でもうどうにもなくなるまで「いずみ句会」へ参加されたのも呆け予防でもあり、健康維持のためでもありました。誌上公告からいろいろの秘薬をとりよせて服用もされましたし、医療機関についての情報にもくわしく、ご自分の豊かな知識による自己

診断・自己服薬——処方——にはこの数年さからわず希望のままにして頂いて来ました。

そんなS男氏が残念乍ら老衰が進み数ヶ月の寝たきり状のあと、六月二十八日永眠されました。その二時間前迄、巡室の職員と会話もされたということです。

細々書き残されていたご自分の死後の事々に指示のあることを逝去された朝になって知り、感銘を受けました。先づはご希望どおり「みぎわ園霊安室」でお別れ会を行いました。献花も「白い菊」との御指示により活き活きときれいな白菊を沢山お供えました。

会の終わりに遺族代表として立たれた御長男がポケットから小さな紙片を取り出されるのを見て、私は一寸「？」と思ったのですが、良くゆき届いた感謝のご挨拶を読み上げられ「『ここで深く一礼』と書いとりますので……どうもありがとうございます」と深々頭を下げてくださった後ニコツとされました。その後この挨拶もS男氏が前似て自筆で書いて置かれたものであると伺い、ポケットから出された紙がどうやら新聞折込みの広告用紙の裏面ではと見えたなどが解け、私も小さく笑ってしまいました。

「本当にもう一年余りでしたのに百歳まで生きて欲しかったですね」私たちはどこ迄も自分らしく生き抜かれたS男さんの残念さを思い、語り合いました。そして拍手したい気持ちで新しい旅立ちをお送りいたしました。

T女さんも遅しく生き抜かれた方です。

A班テレビコーナーの彼女の指定席のことは誰も忘れられない一つの歴史です。新入者の誰かが知

らずにその席に座ったりしますとこれは大変でした。

そういう強いＴ女さんだけに、Ｋ女さんの聞くに耐えない悪口雑言にも勇ましく立ち向かうか、馬耳東風と聞き流されて長い間同室して下さいました。

昨年一月 私が一ヶ月近く留守にした後、久々に登園した朝、廊下でばったり顔を合わせました時「ア、センセー」と言うなり彼女は両手を激しく躍らせ満面に喜びを上がらせて下さいました。正に欣喜雀躍という姿でしょう。「お久しぶりネ」と私も彼女の車椅子の前に跪いて抱き合いました。

痴呆が出てからは、寮母さん達を困らせる事も多かつたためちやめちや強かったＴ女さんは、幼子のように色白の小さな顔になり一寸紅をさした口元に可愛い微笑みを浮かべるきれいな死顔で、私達を深く慰め力づけて旅立ってゆきました。

——**——**——**——**——**——**——**——

又、雨の音がパラパラ聞こえてまいりました。

重ねてご健勝を祈りつつ。

七月一日 夜。

かしこ



みぎわ会 だより

第89号 1998. 8. 7 発行

梅雨明け

「やっと梅雨があけたんですね。」女性アナウンサーの問いかけに「ええ、そうです。あけましておめでとうございます。」予報官M氏のいつものシヤレが利きました。七月三十一日の「ニュースパーク関西」の時のことです。思わず笑わせられてしまいました。

本当に長い鬱陶しい梅雨の日々でした。

お元気でお過ごしでしょうか。お伺い申し上げます。

梅雨もあけ、八月になりました。そして長い政治的・経済的な不安に閉じ込められて来ました。日本社会には新しい内閣が発足しました。ここでも「あけましておめでとうございます。」
と言いかう道が開かれて来ますように祈らないではいられません。

老人ホーム経営者の私は亦、日々近づいている顔の見えない「介護保険法制度」という言葉の重圧を心底鬱陶しく感じています。そういう中で、みぎわ園では施設長をはじめ指導員・寮母長など新しい陣容で出発しました。この年度も早 3 分の 1 を過しました。みぎわ園をはじめ、いずみ寮・ナオミ館では全く何の動揺もなくいつも明るい平和な日々が続いております。

老化を防ぐ「歩け歩け運動」も現状に応じた姿で復活し、根を下ろして来ました。デイルームでは正に毎日いろいろなプログラムで皆さんの日常生活の活性化が進められています。

新しいリハビリ係と御本人との辛抱強い努力が実って「おしめ外し」とか「起立」等がゆっくり確実に進んでいます。歩け歩け運動と体操の後のお茶の時間のユーティリティティーでは明るく生き生きした皆さんのさわやかな声や笑顔を見る事が出来ます。

廊下には軽やかな足取りで行き来する職員たちの交わす「お早ようございます。」「こんにちは。」等の明るい声が小さな光のように散っていて、私を力づけてくれます。

誰もがしっかりと持ち場を守り、 टीमワークも滑らかに流れています。今年度の新人達もどうやら夫々の仕事の第一段階をクリアしたようで、みんな落ち着いてゆったりと仕事に取り組んでいる様子が見えます。この姿が私達の積み上げてきた力なのだと語っているようです。新しい制度が定着するまでの数年間は事務的には鬱陶しい混乱があると覚悟していますが、一番大事な現場の安定したサービスはちつとも揺るぐものではないはずです。皆様に安心と期待とをもって利用していただけるホーム作りは日一日と「力」を蓄積しつつ、進んでいます。

又しても私のことですが、細くて軽い美しい杖を買いました。成果は出ませんが減量に心がけています。そのうち優雅な紫色の杖を手にもう少し格好よく廊下を歩けるようになりたいと願っています。では皆様もどうぞお元気で暑さを乗り越えて下さいますようにお祈りいたします。

かしこ



みぎわ会 だより

第90号 1998. 9. 9 発行

九 月

ふと見上げる空にはもう秋の雲が流れているのを昨日の帰りの道で気付きました。
夜にはすだく虫の音がまわりの草むらから泉のように沸きあがるこの山の村では心
なしか朝夕ひそかな涼気を覚えるようになりました。

皆様 お変わりございませんか。

先日は北関東の大水害・いつまでも先の見えない金融界の混乱・相次ぐ汚職の便り
や奇怪な毒物事件など、加えて北朝鮮のミサイル発射という暴挙と、内憂外患のもと
にうめく重苦しい夏でありました。が、暦は狂いなく進み九月に入りました。

九月は私達にとりましては格別に意味深い敬老月です。

今日（九月二日）、市長・市議会議長・市社協理事長・婦人団体会長等の皆様が長寿者への慶祝訪
問にお越し下さいました。大きなお祝品の箱・祝金・花束などの数々のお祝品を携えてこられた皆様
をお迎えしたのは西脇市長寿番付で東西の横綱のお二人です。

東は百一歳の小原トユさん

西は百歳の神月貞一さん です。

盛装して訓練室に並んだお二人に次々とお祝いが渡されますと、取り囲む園生や職員からは大きな
拍手が湧き上がりました。

元気な小原さんは椅子から立ち、市長様をはじめ皆様に感謝の握手をしながらいつもの可愛い声でお礼の言葉を述べました。とてもいい情景です。

ここには明るく暖かい健康な日本の社会が見えました。市社協による長寿番付を見ますと平成十年八月二十七日現在で、西脇市在住の九十歳以上の長寿者は男79名・女201名の計280名です。

その中で百歳以上の両横綱をはじめ大関（99ゝ96）3名、関脇（95ゝ94）7名、小結（93ゝ92）5名、前頭（91ゝ90）12名の計29名がみぎわ園といずみ寮の住民でした。

ちなみに昨年に比べますと、昨年の東大関であった神月さんが西横綱に昇進し、小原さんは西から東横綱に座りました。そして一年間に大関3人・関脇2人・小結2人・前頭3人が他界されています。九十歳から百歳までのコースがどんなに峻しいかがこの数字で良くわかります。けれど、お送りした方々の安らかな終末を思いますと正に「天寿を完う」されたと言えますし、生物としての人間の必然的運命を教えられます。

全市としましては九十歳以上の長寿者は昨年同期には男78名・女189名の計267名と記され、一年間で13名増であります。

過日 新聞誌上で発表されましたが、日本人の平均寿命は昨年比数パーセントの伸びで、世界一の座は揺らぐ事のない事実が報道されていたとおりです。

今日まで三十年近い時間に、私たちの施設を通過してゆかれた一千人余の方々を改めて思い返し、

想い深いものがあります。先ずは長命が豊かな喜ばしい長寿であつて欲しいと願いつつ、この難しいテーマにひたむきに取り組み続けて来たきびしくも且つ楽しい学びの体験の道でありました。それはとりもなおさず、今日の長寿国日本を築き上げて来られた方々の長い命に安らぎと喜び深かかれとの祈りの道でもありました。

——**——**——**——**——**——**——

この便りがお手許に届きます頃にはさわやかな秋晴れであり、豊かな稔りの秋であり、更に祖国を覆う暗雲の流れ行くひまから、希望と力の光を見る日々でありますようにと祈りを重ねつつ。

ご健勝で、又。

かしこ



みぎわ会
だより

第91号 1998.10.9 発行

十月の便り 「祈りとさんび」

「秋高し空より青き南部富士」 山口 青邨

歳時記で出逢ったこの一句です。大きく晴れ渡り高々と澄んだ美しい秋の風景が何と見事にうたわれていることでしょう。

残念乍ら今年はまだ「秋高し」とうたい上げたい青空を見る日がなかったように思えます。「明日午後は明石大橋へゆきます。」とナオミ館の小林さんが報告してくれましたが、今晚も明日も雨との予報です。

先月も書きましたが、社会的には情けない高官たちの汚職のニュースが後から後へと続きます。私たちが希望を持てるような良い声は聞こえてきません。そういう中でも某国のような動乱もなく、きちんと時を過ごしている日本人はどこか勝れているのかしら と考えたりなどいたします。

この便りをお読み下さる皆様はいかがお過ごしでしょうか。お元気のように祈っています。

さて、毎年の体験ですが ああ暑い八月、そしてなおきびしい残暑の九月が終わり近くなりますと高齢の皆様の健康状態がいろいろ急変し易い季節になります。必死に暑さを乗り切り切られた疲れが出るのでしょうか。その対応の中で正に無力な老医の私には荷が過ぎると知るのですが、どうすればいいのか決断出来ない自分が侘しくも重い気分落ち込む日々です。

わがたま（霊）のひかり　すくいぬしイエスよ

近くましまさば　夜もよにあらじ

私の好きな讃美歌三十八番ですが、いつか唇に上つて来ます。小さく声に出して歌いますと慰められ、又、力づけられて来ます。

しずけき夜なよな　ふしいぬ（寝）ることに

みそばのいこいを　おもわしめたまえ

机に向い本を開いてうたい続けたくありません。

今日も診察室で、夜、くり返しコールされる○さんに「夜は静かなので淋しくて不安になれるのネ。——その時はお祈りしましょう。こういうようにお手を合わせてネ、あなたの神様？ 仏様？ にどうぞお助け下さい」とお祈りして下さいネ。きつと気持ちがいずりますよ。寮母さんたちもあなたをしつかり大事にお守りしているんですけれどね　夜は人手が少ないのですつとあなたのそばには居れないんですよ。でも、何にも心配なさることはないのよ、お呼びになればきつと来ますからね、安心して眠って下さいね。」

つい私は余り役に立たないお説教をしてしまいました。

夜になり更けて来ますと　又、私も不安になります。『○さん、△さん、大丈夫かしら、どうぞ無事　朝になりますように、夜勤者たちをお守り下さい』と祈らずには居れません。

夜も日はなれず　ともにいますさば

生くるにみちなく 死ぬるもおそろし

さんびして祈ります。

あした目さめなば さきわいまもりて

みくにのたびじに すすましめたまえ

ほんとにすばらしい さんび歌です。歌うことは祈りです。

今夜もきつと守られることでしょう。そして「明日」が新しい生命を持って訪れることを信じて休むのです。

——**——**——**——**——**——**——

では、どうぞお元氣にお過ごし下さいませ。

台風一過ではない多過ですが、秋には運動会・小旅行など沢山のアウトドアのプログラムがあります。きれいな秋晴れの日が与えられますように、そして私たちの仕事も変わりなく祝福されますようにお祈りくださいませ。

かしこ

(平成十年九月三十日)



みぎわ会 だより

第92号 1998.11.10発行

十一月の便り 「みぎわ会の姿」

年間一番爽やかであるはずの秋十月がひどく迷走して過ぎて行きました。雨が多く不意に初冬を思わせる朝が来たかと思えば、翌日は残暑とでも言いたいむし暑さが訪れるなどいたしました。

こんな日々、いかがお過ごしですか。御健勝を祈りつつ、いつもの便りを送ります。私達は、そういう中でも幸い運動会は大当りの晴天下、みぎわ園からも90%以上の方が出られ、いずみ寮合同で、さわやかに盛り上がりました。順延続きの明石大橋渡りも、今日は！と空模様に合わせては決行し、皆さんを喜ばせることが出来ました。

中庭のプランターには五・六個のミニトマトが赤く熟したり、植木鉢には小さなエンピツの先のような唐辛子がそれなりの葉かげにゆれているのが良く見ればわかるという園芸グループの実りの秋があり、皆様の活性化も多面的に進んでいます。

職員にも学びの秋です。様々な研修に次々参加いたしました。

二十三日には、去る六月、四日間泊まり込みで「ケアの評価」をして頂いた西脇創一先生のレポートを中心に第199回目のセミナーを開きました。久々の個人発表のセミナーです。一人二分のスピーチは71人が71回の思考を鮮やかに繰り広げてくれました。そこに「みぎわ会の姿」が浮き上がって来るのを覚え「皆さん、熱心に考えて下さってありがとうございます」との言葉が吐切れる私の感動でした。いつ

ものの甘さかもわかりませんけれど。俄かにお願いして列席して頂きました理事・監事の先生方からも、夫々お心のこもった言葉を伺うことが出来ました。

今日、十一月二日の産経新聞紙の一面に「月に一度」という「江藤淳」氏の論文が載りました。いつも楽しんで待つ記事です。今日のタイトルは「わが国の姿」という名論且つ正論でした。

三十五年前に氏が熟読された英国の歴史学者「サー・ジョージ・サムソン」の「日本史」から始まり「司馬遼太郎」の「この国のかたち」を経て「わが国の姿」へと論述されています。ほんの一部を引用いたします。『今問われようとしているのは「この国」の「かたち」ではなくて「わが国」の「姿」である。「かたち」は静的な分析の対象だが「姿」はそれ自体が動きである。立居振舞・立ち姿・居姿・舞姿、そのようにいつも動いているのが「わが国」の現実のあり方ではないであろうか…中略…「この国」のかたちを「かの国」に合わせるのではない…中略…すべてを国民経済という原点に引き戻し、現実には生きている「わが国」の国民が安心して暮し、生産と消費を営めるようにすることこそ「わが国」の政府のなすべきことではないか……後略。』

わかりやすい文章の持つ深い説得力に私はいつも感銘するのですが、今日はこの論説に潜む江藤先生の憂国の思いの熱さに心を打たれました。

夜、遅れているこの便りを書く中でつい自然に「みぎわ会の姿」という言葉が生まれてしまいました。

私達の三十年の歩みは独自の「みぎわ会のかたち」を創り出しています。けれど、その姿は動いています。ちゃんと立つ姿、迷いや小さな悔いの中で静に座す姿、時には花のように舞い、時には人知

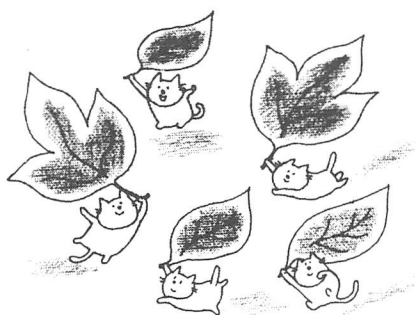
れず汗と泪を拭う「私たちの姿」が、打ち返す波のように私に見えてまいます。そういう中で、私たちの「思いやる心」と「思い知る知恵」が健やかに育ち続けますようにと祈るほかない自分である事も知らせて頂きました。

十一月二日

——**——**——**——**——**——**——**——

豊かな秋をお楽しみ下さいませ。

かしこ





みぎわ会 だより

第93号 1998.12.10発行

十二月の便り お知らせ三題

まわりの山々が日一日と美しいオレンジ色に染まってゆくこのごろです。今年も亦このすばらしい自然のプレゼントを頂ける幸せに感動しています。皆様お変わりなくお過ごしですか。

晩秋の冷気が老人ホームに小さな「風邪」の流行を送って来ましたが、幸い大事に至らずパス出来そうな様子です。

いづれ訪れる「インフルエンザ」に備え、ワクチン注射も行っています。

さて、第一のお知らせは、来春（六月頃？）「ケアハウス ハンナ館」が誕生することです。夢に終わるのではと思いつつ、長い間抱いて来た「希望」でした。新ゴールドプランに示されている「特養セット」がこれで完備することになりました。

時節柄 相当けわしい開設への道でしたが、言わば「生まれ出づる苦しみ」でありましょう。間もなく着工です。

ハンナ館は定員十五名、三階建約900㎡の建物です。設計もその名も気に入っています。利用して下さる方たちにもきつと満足して頂けるでしょう。

当然 楽しい苦労が続きます。

次は、いずみ寮に「エレベーター」が設置されるニュースです。どうしても欲しかった設備でした

が、なにぶん高価で手に合いませんでした。この度石野県会議員のお力添えもあり「阪神馬主協会」から八百二十五万円の補助金を頂くことになりました。長い間 シコシコと用意して来たお金と合わせ二千万円余の工事になります。遠い道でした。皆様と共に感謝いたしましたでしょう。

第三は、本年発行した20号で「M・C・R」を廃刊するニュースです。

昭和五十三年来二十年間入所されたお一人々々について入所時より六ヶ月後までの観察とケアの記録集でした。「よく見、よく聞き、よく理解して、よいケアをしよう」というヴィジョンに向かって担当者の努力が積み重ねられました。「捨てコン」のように目には見えませんが、現在のみぎわ園の「ケア記録」の技術と力を生み育てて来た基礎的な訓練となりました。私たちの足跡です。大事な歴史です。あと一年で「介護保険制度」へ変わる「ケア現場」では「ケアプラン」「ケアマネージメント」等の名の下に個々の利用者の詳細な「アセスメント」に基づく介護方針やその実践記録が求められる時代へ変わってゆきます。営々と積み重ねて来た継続の力は新しい局面でも役立つことと思います。極めて流動的な過渡期ですが、「私たちの負う使命」をしっかりと把握して、ゆるがぬ歩みを続けたいと願っています。

———*———*———*———*———*———*———*———

あとわづかで今世紀最後の新年を迎えます。

暗い感じの世の中ですが、明るい夜明けを待ち希んで元気に歩んでまいりたいと願っています。

皆様のよき御迎年を祈りつつ。

かしこ



みぎわ会 だより

第95号 1999. 2. 8 発行

ウイルスと初夢

二月に入りました。いかがお過ごしですか。

この一月は久々に冬らしい一月だったように思います。朝、戸を開けて庭一面に霜が下り、霜柱らしい土のふくらみやあづまやの屋根が霜でまっ白に輝いているのを見ますと「お、さむ」と言いながらどこかで安心する想いがありました。

が、この寒波が「ウイルス」を運んでまいりました。

一月五日頃から下痢・嘔吐の方が続発して九日の週末には二十名を超えました。みぎわ園のことです。

「ウイルス性胃腸型感冒」と診断して対応しましたが、万一食中毒ではとの心配がありました。全員の検便を行い保健所にも報告し医師会にご相談するなどの一夜がありました。よく考えてみますと同一献立・同時調理の食事を摂っている「いずみ寮」にも別棟の「新館」からも一人も発祥がないことで、食中毒の線は消えたのです。幸い検便はすべて(-)、最終的には四十名に及んだ患者さんが全部二・三日で快復されました、二十日以降は新発症も殆どなくなり、平常の日課にかえりました。うれしい事でした。ご厄介をかけました医師会の先生方や保健所へも感謝して報告しました。

近頃はインフルエンザによる老人ホームの被害がマスコミのニュースソースになっています。唯、今ではまだ襲来を受けていません。ワクチン注射も前年に行っていますが、十分用心してまいりたい

と皆で話し合っています。

皆様もどうぞお大事になさって下さい。

——**——**——**——**——**——**——**——

次は私の初夢です。粗筋を申し述べます。

お正月のある日、この広い庭の一部に「にわとり」を飼い度いと思いました。私の幼い頃に暮らした村ではどこの家にもにわとりが飼われていました。文字どおり柿や山椒、又ぐみの木などが沢山生えている裏庭とか、秋には粃の干場になる表の庭には数羽のにわとりが遊んでいるのが常でした。

雄鶏の勇ましい東天紅の鳴き声、雌鶏が餌を見つけてコッコッコッコとやさしく雛を呼ぶ声が想い出の中から聞こえてきます。夕暮れにトウトトトトと呼ぶと彼等はどこからともなくかけて来ます。不器用な走り方でした。そしてきちんと土間のとまり木や小さな木のトヤに入り眠ったものでした。

「ネ、私 にわとりが飼いたいので、十羽位どお？うちの裏の紅葉の庭に網を張れば良いと思うのよ、満子は『蛇やイタチが狙いますよ』って言うけど網の目を細かくすればいいと思うワ。そのうち毎日五〜六個の卵を生むでしょ、したらウチの皆さんに順番に一ヶ月に一回うちの『うみたて卵』を食べさせられるのよ、どう？」

私が熱を入れて話すのを聞いてくれた白井君は「臭いですよ」と顔をしかめました。もう一人の藤

原昌史君は黙ってニコニコしています。「でもね、広い外の土の上よ、太陽の光が一パイ当るのよ、草も生えているし土の中には虫もいるのよ、残菜も沢山あるわ、一羽当り五㎡もの広さよ、遊びまわれるでしょう。あんな日も当たらないゲージの中で産卵機のように人工飼料をつついてゐる鶏の卵とは違ふのよね。本当のにわとりの卵、それも生みたて卵よ、皆さん毎日見に来たり、自分の番を楽しみにされると思うなあ。土の上にコロんと生み落とされてネ、まだ少し暖かい卵よ、アー 私 みなさんにうちの生みたて卵を食べさせたいナー」

二人は呆氣にとられて聞いていました。臼井君は「でも臭いですよ」ともう一度一寸小さい声で言いました。藤原昌史君はやっぱりニコニコして、それでも私に小さくうなづいてくれました。こんな初夢 実現できるでしょうか。

ではくれぐれもお元気で 又来月。



みぎわ会 だより

第96号 1999. 3. 10発行

春よ来い

春が来た 春が来た どこに来た・・・。

こんなうた声が聞こえてきそうな、うららかな今日です。西側の林はまだ、みんな裸木ですけれど高く細かい梢の網目に春の日射しが たわむれています。

皆様もお健やかに春をお迎えのことと存じます。

二月は早く足早に過ぎて行きましたけれど、その日々はあれこれ心重く、時には頭の痛い事の多い一と月でしたので、一そう声を出して「はるよこい はやくこい」と唄い度くなってまいります。

二月二日には例年の事乍ら県の「監査」がありました。時に、何故今年もとか思うのですが、そうなれば事前の数日は緊張して諸資料を整えるなど忙しく過ごします。当日は理事・監事の役員様もご列席下さいました。ありがとうございます。特にどういふこともなく終わりました。

丁度、その二月二日頃から、みぎわ園には「インフルエンザ」が浸入し、五日間に二十名近い発症がありました。秋にはワクチン注射を施行していましたが、出入りの激しいみぎわ園です。「ショートステイ」の方、注射施行後に入所された方、又、その体調からワクチン注射を見合させた方たちが選択的に発症されました。ワクチン施行にも拘らず二名の方の罹患（九十四歳・九十歳）もありました。幸い、いずみ寮には一人の発症もありませんでした。マスコミの相当感情的な報道もあり、私たちはほんとうに一つ心になってウイルスと戦いました。

ほんの短い期間でしたけれど、きびしい日、夜でした。月末になり、やっとおだやかな園になってまいりました。

いずみ寮のエレベーター工事はもう60%進み、ハンナ館も40%進んだといわれます。私にとりましてはうれしいはずの工事を思う暇もないきびしい二月でしたが、寒さの中、熱心に工事を進めて下さる方々には本当に「ありがとうございます。」と心の中では毎日感謝いたしています。

こういう中でバレンタインデーに若い寮母さんたちから、「先生の夢が実現しますように」と、にわたりの足下にポトンポトンと卵が産まれている上手なイラストと共に、発表するのは恥ずかしいのですが、「大好きな先生へ愛をこめて」とのカードを付けて可愛いチョコレートが届きました。いろいろの問題で私の気持ちがまっ暗になっている時でした。朝、出勤して机上にこれを発見しました時は、うっと涙が溢れました。どんなに力づけられたことでしょう。——こんなヒミツは黙っているべきですけど今度だけはそっとお聞き下さい。

そして、月末二十七日は芹生哲也君と寮母の坂口昶代さんの結婚式が行われました。職場結婚第四号です。昨年の藤原武明君と旧市位優子さんの時と同じように、祝宴の会場はみぎわ園そのもので、誰もが本当にうれしく楽しくよろこびが盛り上がりました。芹生君の前任施設から来てくださった元同僚の方が、「僕もこんな施設へ勤め度い——履歴書持つてゆきます。」という言葉で祝福して下さり、私たちは又一入感激してしまいました。横山學さんの職場結婚第一号としてのお仲入振りも仲々重味が有りました。

こうふり返つてみますとみぎわ園にはもう春が来ていましたのね。すっかり元氣を出したいと思えます。どうぞご声援をお願いします。そしてくれぐれもご健康にお過ごし下さいませ。

三月一日

かしこ



みぎわ会 だより

第97号 1999. 4. 5 発行

四月 流れ

四月一日です。昨夜の気象情報では日本列島の端から端までお日様マークが赤く灯りましたので、やっとこの底冷えも終わるとのことに安心してやすみました。

朝は予報より寒く、どうかと思いましたが、日が昇れば暖かくなるでしょうと軽装で出て来た私です。私の乗った新幹線は今、近江平野を走っています。空はうす曇りですが、車内は快適です。この列車は四時前に東京に着くはずですが、

今年度第一日目の朝礼では三人の新入職員へ辞令を渡して歓迎し、ちようど今日開かれた聖書日課の「主イエスの洗足」の物語りを引用させて頂き、「あなた方も互いに足を洗いあいなさい」のお言葉を短く話して新年度の出発のころにしましようということにいたしました。思えば一年は驚くように早くサラサラと流れてしまいました。みぎわ園創設三十年目ということで、職員の皆さんには昨春は早くから楽しい海外旅行がはじまりました。

私は長かった施設長の職を丸山に渡しほっとしたのでしたが、待っていましたというように右足の痛みがはじまり、車椅子↓杖↓お灸とこの痛みとの難しいお付き合いに明け暮れる一年でした。幸い、今日も一人で東京行きが出来ます。杖も南先生のお薬も同行です。

東京では第二十五回医学会総会が開かれています。東京国際フォーラムという建物を見たり、どんどん進んでいく医学の流れの匂いに触れるだけの参加ですが、東京は私にとって懐かしい青春の故郷

です。五日に帰りますと、十六日に予定している「満三十年感謝式」の準備に大忙しのことと思います。

「みぎわ園創立から満三十年が過ぎた」とは正に文字通り感無量という他ありません。その「無量の感」は芯まで全部感謝色です。辛い事や苦しい事が無かったとはいえません。それどころか何度もの事業から逃げ出し度いと思いました。逃げられないことをよくよく知つてい乍らのことです。ふり返ると今はすべてありがたいばかりの思いです。感謝式を行わずには進めない切なる想いがあります。

時々、思いがけぬ方からこの「みぎわ便り」への深いお心を知らされます。うれしく力づけられます。ありがとうございます。どうぞこれからも私たちを励まして下さいませ。

さて、この四月から中西町子寮母が退職しました。創立時から満三十年 みぎわ園の天使でした。私にとっては戦友でした。残された老兵は本当に淋しいですが、彼女へは大きな感謝をもつて送り出しました。今朝 出勤してみますと三人の「介護福祉士」と一人の「社会福祉士」が生まれていました。それぞれ挑戦者が全部パスしたということです。又一段と力が加わりました。時と一緒にいろいろの事が流れて行きます。この流れに汗も涙も流し、新しい喜びや力、又希望を汲み取ってゆくようになっていくのだなあと考えました。うれしいような悲しいような想いですが、これは私だけのものです。力強く動いている大きな流れがみぎわ会にはいつもあります。やさしくきれいな色の流れです。

この年度もよろしく願ひ申し上げます。大きく変わる制度を前に緊張の一年になると思います。

新 緑

みぎわ会 だより

第98号 1999. 5. 10発行



今日は連休も終わりの五月五日です。

一日の雨に洗われた庭の木々は濃、淡、オレンジ、又くれないなど夫々の新緑を風に光らせています。美しく、やさしく、さわやかな初夏です。

皆様もきっとこの連休をお楽しみになったことでしょう。休日のある日、みぎわ園へ行ってみますと面会の方々の靴が二十人分並んでいました。一寸胸にこたえる気持ちでした。慰められました。

四月十六日の「三十周年記念感謝式」は文字どおり感謝の中に終わりました。司式もプログラム作りもお願いした神戸聖愛教会の新里先生から「恩寵三十年」という五文字を書いて送れとのご指示がありました。お手本もないまま、一生懸命練習しましたが、その字がプログラムの表紙にピカピカ刷られていてびっくりしたり、恥ずかしくも感じました。

けれど、正に「恩寵三十年」でありました。原野という地目の荒れ地にポツンと五十床の「みぎわ園」が建てられた時、今日の姿を、私はもとより誰一人夢にも思わなかったはずです。すべては「恩寵」の二字が語っています。公も人も物も動かした「力」でありました。

その中でわたしは時に悲鳴を上げたり、うめきの涙にゆきくれる谷を歩まされましたが、そこが即ち泉の湧くところなのだと新里先生は語られました。

疲れを流したくて二十七日から私はきれいな六甲アイランドのSホテルへ逃れました、が、四日後帰ってきましたとこの地の木々は夫々新しい緑で一杯でした。「ここが一番いいでしょう。私たちが休ませてあげるよ」とほほ笑んでささやきかけてくれました。南庭の大樺の緑を私は一際美しいと思います。この木は、私がここへ来た時（昭和46年秋）に患者さんだったF氏が見事な盆栽に仕立てたのを下さったものです。その前にも頂いたバベガシ（ウバメガシ）を枯らしてしまった私は思いきってこの樺を浅い鉢から出して地面に降ろしたのです。

今は10mもあるのでしょうか、美しい自然の樹形に育ちました。その新緑は透明なうす緑です。大きな枝がしなやかに風にゆれ、緑の光を散らせる様子は貴婦人のように少しあでやかで気品があります。わたしはふとこの樹の姿にみぎわ会のこれからを重ねて見る時があるのですけれど。――では

どうぞお元気でお過ごし下さいませ。

かしこ



みぎわ会 だより

第99号 1999. 6. 7 発行

六月 木下閣

六月一日です。雲一つない青空が広がりました。真夏のような強い日射しの午後です、あのやわらかく美しかった緑はすっかり濃くなり重なり、季語にいう「木下閣」を作っています。

一途なる蝶の身かわす木下閣　ーまもるー

こんなきれいな一句を歳時記で見つけました。ヒラヒラと軽やかな蝶の白がふと木下閣に消えるさまを目で追うかの一時となりました。

皆様お元気でいらっしやいますか。一日の間に気温が10℃以上も動く難しい季節です。ご健勝をお祈りいたします。私達も緑に覆われるこの地でおだやかな明け暮れを過ごしています。五月末に「決算理事会」を終え、県への報告書も作り、ようやく新年度に歩み始めた気分です。園生の皆様はバラ園・買い物外出・ドライブとアウトドアの活動を楽しんでいます。力強いボランティアの皆様あればこそと、深く感謝しています。今月よりいずみ寮長に村上なをみ（みぎわ教会牧師）が就任いたしました。なお、来るべき老人福祉の改正や介護保険制度に備え、みぎわ園・いずに寮、夫々に副施設長を任命いたしました。

みぎわ園　芹生哲也ーソーシャルワーカー、いずみ寮　的場佐智子ーナースの二人です。

介護サービスと施設経営がきちっと表裏一体をなしている事で、私たちのヴィジョンが歩一歩の前

進、充実路線を進んでゆける一つのパワーアップともなればとの考えからです。

さて、私はこのお正月からサンケイ新聞紙上に「今よみかえす」という前言で毎日一頁に三枚の挿絵入りで掲載されはじめた司馬遼太郎著「坂の上の雲」を、どちらかと言えば陶醉気分で読まされています。（今まで、あまりにも有名なこの作家ものは私の手に合わないと決め込んで敬遠していました。）現在、紙上では明治二十年代の日本が画き出されています。

日清の戦いを勝利した東海の弱小国日本を列強が注視し、露・英・独等の陰湿な謀略の中でやがて起こるべき日露の戦いを予想して、国費の55%を軍備―主として戦艦製造―に備える海軍を中心に政治家達の活動が記述されています。相互の日常会話を交え乍らの展開は文楽人形芝居を見ているような面白さです。明治維新―を形成した当時の政治家・軍人たちの若々しく清々しい姿、彼等がひたすら祖国を想う不思議なほど透明な熱意に心洗われる想いです。私の年代にはなつかしい伊藤博文、山本権兵衛という名も登場しています。

何とも重苦しい今日この頃の政官財界の不透明な無責任主義の流れを佗しく思わずにはおれません。この旧き時代の潔き人たち、と、木下闇に消える白蝶が何となくつながって見えます。そのさわやかさ、あまりの純粹故のはかなさと繁栄のうす暗がりの対照がそんな連想に流すのでしょうか。

おしゃべりをしてしまい失礼いたしました。くれぐれもご健勝をいのりつつ。

かしこ



みぎわ会 だより

第100号 1999. 7. 7 発行

七月 「治山治水」

七月一日、晴天です。久々の青空は美しく心も明るく晴れて来ます。六月はひどく暑い日や長雨など過ごしにくい日々でしたが、皆様にはお変わりなくいらつしやいますか。私たちは各施設夫々、先づ先づ平穩に過ごす事が出来ました。ありがとうございました。

この数日の大雨は又しても西日本各地に深刻な爪跡を残して東へ流れてゆきました。水害のニュースを見ながら、昔私たちがよく聞かされた「治山治水」という言葉はもう消えたのかしらと、そして二十数年前の体験が又思い浮かんでまいりました。私は「イスラエル」で開かれた「国際老年学会」参加のツアーに加わってまいりました。彼の地では地中海候とかで二月から九月までは一滴も雨が降らず、「エルサレム」のホテルでは地中海の海水を真水にする濾過装置を用いた高価な水が使われていると聞きました。その国の乾いた荒々しい灰色の砂漠も見ました。

どこにでも緑の草が生えている祖国が正に「豊葦原瑞穂の国」と呼ばれることが納得出来る思いでした。ところが帰国しました八月末でしたか、日本は台風による大水害の下にありました。日本の運命的な地形や地球上の位置から逃れることの出来ない自然現象かもわかりませんが、年中平均的に天然の真水が溢れるほどに降り注ぐという自然の恩恵を国民の幸せに結びつける国造りがどうして出来

ないのかしらと考えずに居られないことでした。

さて、ケアハウス「ハンナ館」も竣工間近です。

心に描いていましたように内装・外観共に快く美しい建物です。これで、みぎわ会は高齢者の多様なニーズのもう一つ面にも応え得る総合性を持つことになりました。現在八名の利用申し込みを頂いています。あと七室の利用者をお待ちしているところです。

今、老人福祉施設は大変難しい時代に向かっています。新しい制度はこれから長い老年期を生きる方たちに本当に安心と幸せをもたらせてくれるのでしょうか。

制度政策はあたかも自然環境のようにその下に在る人たちの生活を支配するものです。制度の媒体、代行専門職である。私たちは先ず「治山治水」を重視する為政者のように、みぎわ会の施設を利用される皆様の安心と満足を大切に守ることを第一にしてゆこうと誰もかれも一生懸命勉強していますし、準備を整えています。

皆様の一層の御指導と御支援をお願いいたします。これからの長い夏をどうぞご健康で乗り切って下さいませ。

かしこ



みぎわ会
だより

第101号 1999. 8. 5 発行

八月の便り 「暑中お見舞い」

暑中お見舞い申し上げます。

大変きびしい暑さがつづいていますが、お変わりはありませんか。くれぐれもお元気で過ごして下さいませようお祈り致します。

私たちも大きな変化もなく一日一日に心を尽くし乍らやっています。先月はじめ頃、百一歳のお誕生日を前に弱っていた小原さんが、少しずつ回復し、食も進み、以前のようにしっかりと話し合えるようになって来ました。一世紀を生き抜いた小さな体にひそむたくましさに力づけられている私たちです。生物の必然ではありますが、加齢と共に現れる老化衰退のかたちは百人百色です。そのかすかな生命の灯のまたたきの光と影を看守り乍ら一生懸命にお世話する日々が私たちの仕事です。それは又、学びであり、心の養いでもあるのだと思われれます。同時に、苦しみつつ受ける深い喜びでもあります。

近頃の高齢社会問題は渦巻く流れのように私たちに迫って来ています。私たちの本当の使命は何かを忘れさせるウイルスが侵入の機を狙っているようにさえ感じます。皆でしっかりと入所者をお守りしようとして話を合っています。

さて、今日八月一日、「ハンナ館」が歩みだしました。きれいな住み心地の良い館に出来上がりしました。当初八名の申し込みは残念乍ら五名になり、定員の1/3での出航になりました。が、新しい

入所の方たちは実に楽し気で、いそいそとわが家作りに汗を流していらつしやいます。ぜひ一度ご来館下さい。又、ご紹介もお願いいたします。

私松尾周子は七月十二日より二週間のお休みをいただき「バルト海クルーズ」の旅をしてまいりました。私のヒザの故障から一年持ち越したプログラムの実現です。「しらぬい荘の水民先生」という最良のルームメイトと共に涼しくゆつたりとした楽しい北の海の旅でした。もったいないことと感謝で一パイでした。

七月二十五日下船の前夜、その乗船「ソング オブ フラワー号」のキャプテンから、船客に配られたアンケート用紙に記された心打たれる挨拶の一部をお伝えします。

「クルーズのモットー『YES I CAN』は偶然に出たものではありません。これは徹底した教育とサービス精神のもたらせたものです。……中略……私たちはお客様の期待に応えることだけでなく、それ以上のものを提供することを目指しているのです。」

初体験の私たちを加えて、日本人船客は十名でした。が、その内四名はこの船のファンでした。これで十一回目というご夫婦もあり、八千トンの小さな客船の日々の魅力を物語っていました。

下船はロンドンでした。あのタワーブリッジが私たちの船のためにサッと中央から別れてはね上がる様子は正に圧巻でした。素敵な体験をありがとうございました。では又、



会 ぎ わ み だ よ り

第102号 1999. 9. 5 発行

九月の便り 「ゆるすべりとハンナ館」

早九月の便りを書く日がまいりました。異常な迄のきびしい残暑の日々でしたが、いかがお過ごしですか。ご健勝をお祈り申し上げます。

今年はこの辺りに沢山ある百日紅（さるすべり）が、どの木も一パイ花をつけました。豪華に咲き盛る花はその名の通り七月半ばから私たちが本当の「秋」を肌に感ずるまで長く咲きつづけます。白、ピンク、赤、紫を帯びた赤など、花は可憐な小花からなる大きな花房ですが、いかにも樹の花らしい強さと誇りを見せているようです。暑い一日の働きを終えて帰る道で、又、まだ日の残る夕食の窓から見るこの花のダ

イナミツクな美しさに、励ましの力と慰めのやさしさを受ける毎日です。

ここでは一寸ハンナ館のことを申し上げねばなりません。

昨年末になり、ハンナ館の基礎工事がはじまりました。「捨てコン」打ち込みのため、掘り上げられた大きな土の山が隣の空き地に出来ました。とてもきれいな山土です。私は監督さんに「あの土頂けませんか、私の向こうの庭の空き地へ運んで下さいね」と二、三度頼みました。小型ダンプが数回土を運んで下さり庭の片隅に小さな山が出来る頃、あの土の山は現場から消えてしまいました。でも、ありがたい土です。私の住居を中心としたこの一帯の緑地の土はだんだんやせて来ていました。朱木蓮林も何本か枯れました。中庭の梅も枯れ、水仙も咲かなくなって来ました。

百日紅も僅かな貧弱な花しかつけなくなつて来ていました。大きな樺や、松、杉など、固く赤い粘土にも強い木々が広く長く根を伸ばして土の栄養を吸収してしまうのだと思いました。落葉も剪定の枝葉もきれいに集めて焼いてしまわないで、堆肥にして元の土に返してはと、係員に頼みました。それから二年後、タタミ一枚ほどの囲いの中では少しずつ腐葉土が溜まつて来ました。

新しい山土が来ました。更にそこへすごい栄養剤が来ました。これは昨年から導入した調理室の「生ゴミ処理装置」がバイオで半年がかりで作り出した「黒い灰」です。すごい費用から生まれた貴重品です。

この両者を敷いた地面に新しい山土が数センチの厚さに盛られました。美しい百日紅の花はこのプレゼントへの喜びの第一便です。栄養剤にも土にもありつかなかった裏の紫陽花畑では、今年は殆ど花を見ませんでした。

今は草茫々の木蓮林に、この秋は沢山の球根を入れようか、とも思っています。水仙、チューリップ、ゆり、など、どういうデザインになるかしらと楽しく考えています。

ハンナ館は強固な基礎の上に七月半ば美しく出来上がりました。八月二十七日には内部だけで竣工式を行いました。三十名そこそこの小さな式でしけれど、神に感謝し、祝福を受け、とてもきれいな式になりました。職員の「讚美歌コーラス」も美しいハーモニーの流れで祝福と喜びを深めてくれました。

三十一年前の「みぎわ園」、十八年前の「いずみ寮」では、私はまだ図面を見る力がなく、すべて設

計者、施工者にお任せでしたが、新館、ナオミ館、ルデヤ館、D棟など、工事を繰り返す中で、青写真から立体像が少しずつ見えるようになりました。それと共に建物も次第にみぎわ色になってまいりました。

どの工事も、場所、時間、お金、そして公的規制等の縛りの中でどうしようもないことがあります、苦しさや楽しさの交響曲でした。出来上がると、あちこちに少しずつ不便、不備が残ってしまっています。ハンナ館とて問題はパイありましたが、「新型軽費老人ホーム」の名が示すように厚生省と国が「老人ホーム」への考え方を少し新しくしたことで、ゆったりした空間、プライバシーの確保、ということばが具体化した住居に出来上がりました。

この七千坪余りの「みぎわ村」にはいつの間にか新旧、高低、様々の建物が建ちました。ハンナ館も何の違和感もなく、この一群の中に美しくつつましく溶け込み、村は又一段と活気付きました。

最初の小さな「みぎわ園」から、こんな沢山の枝が茂り、夫々の色と香りで老人福祉の花を育てています。何という神様のお恵みでしょう。今。こう考えてまいりますと、開設以来百何十人、みぎわ会の働らき人達が積み重ねた愛と汗、時に流した苦悩の涙がみぎわ村の「土」を豊かに作り上げたのだと沁々思わずには居れません。この地力が一層深く厚くなりますよう皆様のお変わりないご指導とご支援をこそお願い申し上げます。

では、さわやかな実りの秋をお迎え下さいませ。

かしこ



みぎわ会 だより

第103号 1999.10.5 発行

十月の便り 「新秋、運動会」

今月の便りは十月五日の執筆となりました。今日は本当の秋の天空がひろがり、ひんやりした朝の空気に沁々と新秋を感じる日でございました。

いかがお過ごしですか、今年は長い長い残暑が続きましたが、お元気にこの秋をお迎えのことと存じます。

毎月、一日か又は前月末には書いておりましたみぎわ便りのご挨拶が今月は随分遅れてしまいました。心せかれつつも一日一日と延びてゆく日に自らの年齢を思いしました。もう一つは先月末から私の公私の雑事がひしめいていた事もございます。が、と

もあれ何事もなく無事の日々となりました。

去る二日は恒例の大運動会を行いました。幸い予報された雨もそれ、暑くはありませんでしたが、薄日の下で予定通りの運びとなりました。その様子を少し記すことにいたします。

開会十分前には、みぎわ・いずみ・ハンナ三施設の皆さんが出揃い、きれいに「コ」の字型に並ばれていました。殊にみぎわ園では百十四名(89%)の方たちが帽子をかぶり夫々、紅白のタスキを肩にかけ車椅子を連ねて大空の下へ出てこられました。これはいつものように「KMT」の皆様が大勢来て下さり「うち」の職員のように、しっかりと手に一人々々をベッドから車椅子へ、その車椅子を会場へと運んで下さったおかげでした。本当にありがたいございました。三張りの大テント、風にハタメク万国旗、きれいに刈り込まれた芝生の緑。本当にきれいな光景です。

毎年、職員たちの心をつくした新しい趣向を見るのもこの日です。今年は会場正面にしつらえられた聖火台が圧巻でした。聖火ランナーは87歳の酒井幸吉さんです。精一杯腰を伸ばし、一步一步堂々と紙製のトーチを掲げて進みました。点火と共に色紙で作った見事な炎がゆらゆら上りました。近くにいた私にはゴトゴトと一生懸命テコを押し上げている聖火台裏の黒子職員の姿が見え、思わず笑い泣きしてしまいました。又、今年は開会に一同で声高く「国歌」を唄ったことも新しい幕開けと申せます。

いつものプログラムですが、風船送りに、職員の応援合戦にも奇抜な演出が取り入れられています。ご家族の方々共々二百人余の老若男女は九十分の運動会で笑い転げ、必死に玉を投げ、手を打ち合って楽しみました。一寸座を外した私が十二時前に出てみますとつい三十分前には運動会で沸き上がっていた庭が、もうテントも片付けられ、ちり一つ残らず、緑の芝生が広々と静まっているのです。この秩序、このパワーがみぎわ園の「宝」なんだと私は又しても一人感動してしまいました。

午後の家族会には45名の方々が参加して下さいました。一番知りたい筈の「介護保険制度」と施設について。園長・副園長が説明し、質問にもお答えいただきました。私は「どう制度が変わっても私たちは今の『サービスレベル』を落とさず、ご利用の皆様を守ります。」と、私たちのスピリットをお伝えしました。

もう今年度も後半に入りました。何とも早い時の流れに驚きます。一生懸命に励んでいます。どうぞご安心下さい。そして、お変わりないご指導とご支援をお願い申し上げます。

たくさんさんのボランティアの皆様にはありがとうございます。御礼を申し上げます。

どうぞさわやかな秋をお過ごしくださいませ。

かしこ



みぎわ会
だより

第104号 1999.11.1 発行

十一月の便り Migiwa as Only 1.

「暑い暑いと思っていましたけれど、もうすっかり秋ですね。早いものですねエ」
ラジオから聞こえるこの挨拶に思わず「本当に」と答えてしまいました。

この便りは私もそう書き出したいと考えていましたので、アナウンサーの語りかけの巧みを改めて思い知らされました。十月中は気温の上下が大きく、健康管理のむづかしい一ヶ月でしたが、お変わりなくお過ごしでしょうか。すっかり黄色くなった百日紅の葉を眺め乍ら、この便りをお読み下さる皆様のご健勝をお祈りいたしています。高齢者には「4℃」という温度差が健康を害ねると教えられています。その故

かどうかこの一ヶ月で四名の方々をお送りいたしました。入所の皆様が「その長寿を喜びとして満足度の高い生活を創造し、感謝の中に天寿を全うされることを目標とし……」と、みぎわ会倫理綱領の一条を思い出します。天寿とは申せ、現実のお別れには夫々思い深いものがございます。

「H」さんのことを少し記してみます。昭和五十六年以来十七年に及ぶ在園でした。九十歳を過ぎ殊に老化が進んだこの一年は殆ど車椅子の生活で、うとうとしたり、黙って何かを見ていらつしやる日々でした。私が側へゆき、「Hさん」と呼びかけますと「ああセンセか、センセの顔見たら安心する。」といつも同じ言葉を下さいました。

一ヶ月余り前、教会礼拝中に一寸声を出されたHさんの車椅子を列から離して側に寄りますと「セ

この度は、十年勤続職員の表彰式もプログラムされました。看護婦越川容子、寮母丸山小巻、寮父横山茂樹の三名に表彰状と記念品を贈りました。謝辞の中で、この秋結婚する丸山寮母が何度も絶句し乍ら「これは嫁入道具の大切な一品です。」との言葉に私たちは泣いたり笑ったりしてしまうのでした。「丸山さん、お幸せにー」と、皆でエールを送りました。こういう姿の中に私は先日感銘深く聞いたNHK「視点論点」の中のことば「『Japan as No.1』ではなく『Japan as Only1』になるべきだ。」の一言を引用させて頂き、この便りのタイトルを「Migiwa as Only1」とすることにしました。「オンリーワン」を大切にしたいと願います。

歩一步の育成は皆様のおかげです。ありがとうございます。
今後共どうぞ力強いご指導をお願いいたします。

ご健勝を祈りつつ　美しい秋晴れの十月三十一日　記。



みぎわ会
だより

第105号 1999.12.8 発行

十二月の便り 師走の便り

師走に入り寒さも本格的になってまいりました。

私の住居の裏庭の「あずまや」の屋根が霜でまっ白に光った数日前の朝、又、玄関前の石路の鮮やかな黄の花を見る夕ぐれなどに「冬」の到来をはっきり知らせられます。

皆様、いかがお過ごしですか。施設では先月末頃より一・二日高熱の出る風邪症候が散発しています。上気道炎というところでしょうか。

皆様くれぐれもご健康にご留意下さいませ。

一九〇〇年代もいよいよラストコースに入りました。「ミレニアム」という新しい言葉も生まれています。武力戦争から経済戦争、民族戦争へと流れてきた二十世紀でした。その間僅か三十年余の私たちの歴史も思えば頭の中、心の中を駆けめぐるのがございます。殊に一九九九年、今年は、五月の「三十年記念感謝式」に続き「ケアハウスハンナ館」の竣工と喜びが重なりました。ハンナ館は既に十四室がつまりました。あと一室のみです。利用者皆様はのびのびと楽しく生活してして下さいます。

みぎわ園では八月に一〇〇〇人目の利用者をむかえ、ついに四桁に入りました。職員間では年内に二組のナイス・カップルが誕生し、全員の熱い祝福を受け出航しました。「ケアマネージャー」も新

たに五名生まれました。私は満八五歳を無事通過しました。すべてうれしく、又、素晴らしい祝福によることばかりです。神様に感謝いたします。

施設では、今なお本態のあいまいな「介護保険制度」に備え、コンピュータも各部に配置し、関係市町の指示どおりに認定評価作業をすすめています。

全国的に特養をはじめ、種々の対高齢者施設が競って整備される現況です。三十年余、その折々には先端を切ったはずのみぎわ園も、この速い流れの中で老旧化していますので、二十一世紀に適応出来る形態と機能を持つ建物への改築を目指しました。まず、全職員の声と夢を聞き集めるところから始めています。平成十三・四年度の事業になるはずです。

——*——*——*——*——*——*——*——

さて、私は二つの「シンポジウム」に参加するため上京して来ました。今朝ホテルの窓を開けると、はるか遠い山脈の彼方に、まっ白な富士山が美しい姿をくっきりと見せて居ます。青い空です。うれしく力づけられました。眼下には青い屋根の迎賓館を中心に大きな森が所々に、黄、紅を交えて深々と静まっています。この森をとり囲む首都東京の高層建築群が朝日に白く輝いてみえます。

朝のレストランも半数は外国人と見えました。「わが日本国」が二十一世紀の新世界にしかと存在を保ち乍ら賢く、力強く、堂々と歩み出してゆけるまうにと、心ひそかに祈る私です。

では皆様のよき御迎年を祈りつつ。

東京にて 三日朝

——*——*——*——*——*——*——*——

後記 あれこれの手ちがいでの稿を七日夜私が持ち帰ることになりました。四日と七日の二つのシンポジウムに出席し、大きく変わりゆく福祉制度の一端が見えてまいりました。講師の話聞き乍らわがみぎわ園のゆく手に虹のようにいろいろの夢が浮び上り、思わず心の躍るのを覚えました。転びもせず、迷子にもならず、胸ときめかせている85歳のペアサンは少しおかしいですね。

もう一度、では来年又。





みぎわ会 だより

第107号 2000.2.5発行

二月の便り 夕冴え

紀元二〇〇〇年の一月が終わりました。

ゼロ（〇）が三つも並ぶ新しい年へ、ときめきに似た期待を抱いた昨秋でしたが、その後のマスメディアの煽動にも似た「コンピューター誤作動」への不安と緊張が霧のように重くすべてをつつんだ越年になりました。

幸い、元日は美しい「初御空」が晴れ渡り、心配された事故もなく明けました。年末頃からインフルエンザを疑うタイプの風邪がひそかに流行しているようですが、皆様にはお健やかにお過ごしでしょうか。そのようにお祈りいたします。

昨年の今頃は「インフルエンザと特養」が毎日ニュースの特ダネに扱われた苦い日々であったことが思い出されます。が、今年は穏やかな一と月でありました。

この数日來は大変寒く、「風花」、「うすらい」、「夕冴え」など、美しい季語を持つ厳冬の日が続いています。二、三日前も、朝出勤の途上で、庭の赤土を持ち上げている銀色の霜柱の一隅に思わず立ち止まり、この大地の健康な生命に、一人でうれしく感動いたしました。

さて、施設は年末も年始も変わりなく忙しい時が流れています。「介護保険」という言葉を見、聞きしない事のない毎日です。

これはどういふことになるのでしょうか。高齢社会に生きる国民を「安心」で大きくつつむ力強い

制度の成立を期待するものですけれど、目に入り、耳に聞こえるのは、唯、細々とした「規則に規則」「規則に規則」の積み重ねです。必要なケアを満たされるべき国民の姿が見えて来ません。

こうした制度が網になる中で、施設は長寿という喜ぶべき時期を、老いの衰退を負うて生きる皆様へ、今迄と変らない、安心出来る、時には甘えも容れられる自由な生活を続けて頂けるように、高齢者を守り支えて行き度い。お一人お一人がその年代でなければ享受出来ない新しい毎日、人生の仕上げ、……味わい深い卒業論文を綴り上げて下さるのを支えてゆく「サービス」を実践することが、なお、その質的向上を目指すのが私たちの仕事の「姿」であり、内容なのねと言い交わして励んでいる毎日です。

この二、三年は指導力を持つ年長者層の相次ぐ定年、更に中堅層の結婚・出産退職など、職員の世代交替の流れが続いています。同時に、夢一パイの新人たちはどんどん入って来ています。彼等の成長、成熟を期待し、促し、導き乍ら、力強いティームワークで新時代の激流に棹さして行こうよと心を結び合っています。お変わらない御指導をお願い申し上げます。

——*——*——*——*——*——*——*——

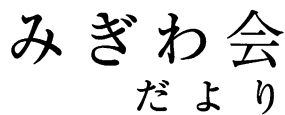
私周子はおかげさまで一日3時間勤務乍ら何とか最小限の責任を果たそうと、なみでないと感じる老いの道を自分色で歩くかせて頂こうなど、キザなばあさんです。

皆様の励まし、職員の皆様の暖かいいたわりに甘えているのです。

ありがとうございます。では 又。

二月一日

「牙ゆる夜の こころのそこにあるものの」 万太郎



号外 2000. 2 .10発行

号外

昨年でしたか、私のにわたりの初夢のことを二月号に書きましたところ、あちこちから「松尾さんの初夢を実現しよう」という声があつてびっくりしました。

先生 先生の初夢是非とも
一緒に叶えることが出来れば

嬉
れ
し
い
な
あ
と
願
い
つ
つ

私達から

大好手

松尾先生に

愛をこめろ



田中 丸山 藤井
坂口 吉家 臼井

その1

市社協の東さんとトライアルウィークで考えて下さるという事。

その2

バレンタインデーに若い寮母さんからこんな素敵なおメッセージをいただき、涙の卵がポトリポトリの私。

その3

婦人共励会から頂いた五万円を鶏舎代にと東さんに渡したと話すと同じ仲間の大島ひさゑさんも5万円下さったこと。

◎二〇〇〇年になって二月のある日、裏庭に出てみると立派な鶏舎が出来上がり、飼箱・止り木・飲み水、みんな揃っていて夢ではないかと大びっくり！。

◎2月8日「鶏が来ましたよ」の声で出てみると、真っ白な美しい五羽の「ウコッケイ」が王子と王女のように、新しい鶏舎の中を歩いていました。Kさんのプレゼントです。まだOさんの予約もあります。

◎いずみ寮の前田さんが鶏舎長を引き受けてくださいました。ごくろうさま。

みなさん、可愛い「にわとり」見に来て下さい。

水曜日は休日の前田さんに変わって下さるのダァーレ！



みぎわ会
だより

第108号 2000. 3. 1 発行

三月の便り ニュース色々

昨、二月二十九日は四百年に一度の「うるう年」だとTVが教えてくれました。

スペースシャトルから撮った日本列島の写真も見せて頂きました。五十年前の「人」が使っていた工具が見つかったということも。次々、本当にびっくりするようなニュースが続きますが、感覚として全くインパクトを受けません。多分、感性が鈍っているのでしょうか。

それにしても今年は久しぶりに寒い冬でした。本当の冬はまだ続いています。皆様、お変わりなくお元気ですか。ご健勝をお祈りしています。この便りがお手許に届く頃はお彼岸も近づき、やわらかい春の匂いが流れていることでしょう。

今年はインフルエンザのニュースは殆ど聞きませんでしたが、いずみ寮では二月中旬に小流行がありました。昨今漸く皆さんが回復され、ほっとしているところです。

ところで、来月からいよいよ「介護保険制度」の支配下に入ることになりました。今だに本態は不明瞭ですが、細々とした規則にどう向き合っていくかは難しいことです。施設経営もさぞ厳しいものになるであろうと思います。何が最優先かを忘れずに皆でしかと取り組んで行こうと話合っています。皆、落ち着いています。

——*——*——*——*——*——*——*——

「ネエみつ子、毎晩あなたにこうしてお灸をもらおうでしょう、これは身体介護サービスやわね。」
「そうですか。」

「家事サービスではないもんネ、毎晩三十分として二千元」

「一年に三百回とすると六十万円！ワァー大変！、つけといてね。死んでから払うことにしてといてね！」

「そうですね、フ……」

ホームヘルパーのサービス区分と報酬が6時・7時・9時のニュース毎に放送される今晚、お風呂上りの一時、私の痛い足に満子にせんねん灸を置いてもらい乍らTVを見るといつもの日課の中の会話です。

老いを生きたのは並々ならぬことです。その家族も大変です。

皆様、先づは元気で明るく楽しく生きさせて頂きましょう。

——*——*——*——*——*——*——*——

号外でお知らせしました「にわとり」のニュースです。

殆ど毎日可愛らしい品の良い卵を落としてくれています。去る二六日、日曜のお昼に第一回の配給十二個をいずみ寮から始めました。力をくれる宝石のような卵をテーブルに一つづつ置いてゆくのは仲々いい気分です。二十一世紀までにはハンナ・みぎわ、そして職員の皆様にも一個づつ渡りそうです。ご期待ください。

毎日、大変な鶏の世話を心をこめてして下さるMさんに誌上からも厚くお礼申し上げます。又、いろいろお心配りくださるKさん、Oさん他、皆様にもありがとうございます。これからもよろしく。せっせと卵を落としてくれる「ウコちゃん」たちにもほんとうにありがとうございます。声が届きますように。では、よい春をお迎えくださいませ。

三月一日



みぎわ会
だより

第109号 2000.4.1 発行

四月の便り 新年度到来

皆様4月がまいりました。お元気でいらつしやいますか。仕事の世界では新年度に入る四月一日です。

例年になく寒い日の多い三月ではございましたが、庭では梅の白、さんしゅうの黄、椿の紅と花々は絶えず夫々の美しさをたのしませてくれました。

お正月以来次々と重苦しいニュースがつづき、誰もがこの国の行く手にもやもやとした不安を抱いている中、昨日は有珠山の火噴の恐ろしい映像に震えました。防災面の上述、進歩と言えば少し哀しいのですが、情報・伝達・対応・行動すべて公民の滑らかな連携の元に進められ、人的被害のないことが何よりの救いと感じました。天高く湧き上る噴煙は地球のうめきが吹き上げられているようで、どうぞもう許してくださいと心ひそかに祈る想いです。

さて、私たちの状況を申しますと、今日から介護保険制度下に入りました。高齢者はじめ国民の大部分から余り歓迎されない矛盾に満ちたわかり難い制度ですが、唯々時間を喰う複雑な手続きに向い、古い言葉ですが「涙ぐましい」努力で取り組んできた職員の姿を一年余も見てまいりました。

「施設を利用している方たち、又、ケアを求めている方たちに今迄と変わらないより良質で暖かいサービスを続けていこう。」

誰もがこのひとつの命題の故に時を惜しまず知恵をしほり心を注いでまいりました。

ワープロもコンピューターも出来ない私は、ひたすら燃えている職員の姿に胸を熱くしているだけです。「何てステキな!」と感謝と誇りを一人占めしてまいりました。ご安心下さい。きつと皆様の期待を裏切らない準備が出来ている筈です。

いずみ寮では「お茶の間」が新しい第二食堂に変わりつつあります。皆さんがお食事をゆつたりと楽しみ乍らエレガントに交わりの時を作り出して下さる「そのお手並み拝見」と期待しています。

二十年感謝式は来春にと祈っています。日本社会の高齢化模様をコンパクトに画き出したいずみの二十年を改めて想い深く見せられています。

今日より荒木忠雄氏を常務理事・総合施設長として迎えました。力強い限りです。

いずみ寮の池のまわりの小さい、大事な原生林が間もなく美しい芽立ちを見せてくれるでしょうし、木蓮林の球根畑も花々が競い咲くことでしょう。

皆様の御来訪をお待ちしています。どうぞ御健勝で、かしこ。

四月一日記



みぎわ会
だより

第110号 2000.5.1発行

五月の便り 祈り

美しい芽立ちの季節になりました。

山々は柔らかに盛り上がってまいりました。長い冬に耐えて迎えた春の目覚めをよろこぶ「わらい」声がひやかに聞えてまいります。

お変わりなくいらつしやいますか。「淡路花博」ニュースと共に、日本中あちこちの花便りが相次ぐ毎日です。桜から藤・牡丹・新緑へと、長い日本列島が南から北へ彩られてゆく流れの報道に「わが祖国日本」への想いがじいーんと湧き上がってまいります。

みぎわ園ではいよいよ新法「介護保険法」導入下の一カ月を過ぎました。新法の示す「あり方にひたすら忠実に従いつつ、現実の「長寿社会」のうめきはどう処してゆくか？長い間に創り上げた暖かい民間福祉施設の「こころ」と新法の考え方、「ケアプラン・ケアマネジメント」のはざまで職員たちの表情が何となく明るさを失っているのは、唯忙しさの故のみではないと私は感じています。この実践の苦悩から少しづつより自然で、明るい「新法」への移行を祈るばかりです。国民の声が大事な時だと思えます。

さて、今月は日常生活活性化を目指す側面から長く続けています現場のサービスを紹介いたします。

その一 レク・リハ活動

朝礼が終わると「皆さんおはようございます。今日も歩け歩け運動がはじまります。どうぞお出かけください。」と相談員のアナウンスが明るく全館に流れます。待ってましたとはかりに、あちこちのコーナーから自力で杖・各種歩行車で歩く人たちで、みぎわ園のメインストリートが賑わって来ます。一ヶ月毎日のローテーションに応じて準備できた方々が離床して車椅子もどんどん加わり、ルデヤ館エレベーター前には間もなく数十名の一群が出来てしまいます。やがて、三階のデイルームに皆さんは揃い、先づ朝の体操です。（もう三十年近くも昔に吹き込んだ、私のテープが用いられているのには一寸びっくりですが、私の声がリードする体操をすっかり覚えこんで下さって、皆一生懸命がんばって下さっていると聞きます。）気合いを込めた数分です。次は唱歌①青い山脈②高原列車③ハワイ航路は定番です。次いでリクエストあり、独唱ありと、一時歌声が溢れます。第三はゲーム、輪投げ、風船バレー、玉送りなど皆さんの目も手も心も活き活きしてきましたところで、第四、今日のニュース・新聞に移ります。ニュースを解説し乍ら皆さんに伝えます。今や皆さんは活社会の一員として表情も引きしまり、国際関係・国内問題、又身近な地方の出来事や社会の動きを知り、驚いたり心配したり……。ローテーションでは平均週二回の参加が殆んど全員にゆき渡っているとのことです。

その二 ラウンジ

毎日、午後一時半から三時まで、三階で開きます。皆様の社交場とも言えます。固定メニューⅡコーヒ―・紅茶・甘酒・生姜湯・ビール・カルピス。cafeⅡ日替わりメニューは一階廊下に広告としてありますが、Ⅱたこ焼き・ぜんざい・ふかし芋・フレンチトースト・和菓子・フルーツポンチ等があり

ます。ここへはみぎわ園仲良し組、又ビールの常連だけでなく、面会のご家族とグループで、ナオミ館・いずみ寮・ハンナ館からも沢山のお客様があります。待つ時間の長いたこ炊きを待ち乍ら、いつかテーブルに会話が生れ、身の上話から共通の体験談の花が咲き、新しい近親感から友情も湧き上がります。いつも無口なAさんが「ぜんざいおいしかったよ」と言ってニコツトして下さいましたとか、余り忙しくて上手に焼き上がらなかった「たこ焼き」を「寮母さん、心配せんでもええよ」と慰められたとか、BさんCさんのお土産に「ふかし芋二本づつナ」との注文、時には申し訳ない売り切れ、ルームサービスetc。毎朝、朝礼で聞くラウンジ報告は私も楽しくほのぼの心安まる一日の一コマです。用いる食器は美しく軽く上等品ばかりです。

その三 売店

平成六・七年の大規模修繕時に、昔から狭い隅にあった売店を広い訓練室前の一部へ移設しました。数人が一時に並べる長く広いカウンター（車椅子の人も肘がつかます）、廊下には気の利いたデザインハンガーに「売店」と赤字で書いた横札をかけ、「次は〇月〇日〇曜日」と記したPRもあります。毎週一回の開店時には正にバーゲンマーケットが現れます。ハンナ館から吉村さん・井原さん、いずみ寮の上内さん達は常連のボランティアです。パートの井上さん、係りの満子の5人は汗だくの応対です。

皆さんには、よく見て、自分で選んでお金を払い、お釣りももらう楽しい時です。買い物部屋へ届けて下さる吉村さん・上内さん、記帳「ツケ」もあります。お互いの小さなやりとりの交際もある

ようです。果物・お菓子・日用品……サロンパス・オロナミンなど山のような品々が皆さんの目を輝かせ、足の痛さも手の痛さも忘れさせる一時です。

その他、食堂での「おかわりOK」。上内さんのお習字教室、かえでグループの手芸教室、又、ナオミの皆さんとの合同カラオケ也大賑いとか、静かに見えるみぎわ園内での皆さんの生き生き活動の一端をスケッチいたしました。ご想像下さい。

ご面会の皆様、見学やボランティアの皆様もどうぞご参加下さい。

— * — * — *

朝夕の暖房が止まると間もなく冷房です。

うちの全施設の

皆様の健康状態が少しでも良好に長く守られますように。

職員達も健康で楽しく意欲的に働きを進められますように。

今、日本の憂いであります子供たちが健やかに育ちますように。

青年達は逞しく活動して社会を支えて下さるように。

有珠山の噴火が一日も早く鎮静しますように。

沢山の祈りを共にいたい毎日です。

どうぞお健やかに。

五月一日



みぎわ会
だより

第111号 2000. 6. 1 発行

六月の便り 緑陰で

「花づかれ むつかしいこといわれても」

五月半ばのサンケイの俳壇で出会った一句です。以来、疲れた時の一口の熱いお茶のように、又は、思い余る目に入る、誰かが置いて下さった鉢花のピンクのように、そっと私に添うて来る一句になっています。

四月、五月の二ヶ月は、新しい介護保険制度を、いくつかの新しい条件下で歩みだした日々でした。その間に通例の三倍近い十五名もの方々を送り出すということも重なりました。偶々そういう時期が来ていたとは言え、辛い事でありました。

風光る初夏の緑陰で、何となくうなだれる私に「むつかしいこといわれても」の一句が自分の「つぶやき」になってくるのでした。

二十名近い新入職員たちの動静とその順調な育ちを見る喜び、又、旧措置制度とは大きく異なる施設経営への緊張感「花つかれ……」と言ってもいいでしょうか。

ともあれ六月になりました。日頃より、この便りを通して「みぎわ会」にお心を寄せて下さいます皆様にはお変わりはございませんか。お伺い申し上げます。「今日まで三十年かけて創り上げた施設サービスのレベルを維持する。更に豊かに充実してゆこう。」という年初の私たちの目標は、誰もが「しか」と心に留めて、夫々の立場で精一杯励んでいます。この活力溢れる様子を想像ください。

各施設ご利用の皆様も落ち着いて日々過ごして下さっています。アト五ヶ月で八十六歳という私も朝毎に皆さんと声を掛け合い、手を取りあい、時には頬を寄せ合う交わりの中から、よろこびと力を頂いて出来る程の役割を果たさせて頂いています。

一昨夜三十日夜九時、NHKテレビで「全島一万人史上最大の脱出作戦」三原山噴火・迫る溶岩流・十三時間のドラマ）をみました。恐ろしい光景でした。その中で島民の皆様が「世話になった年寄りたちを先づ全員安全無事に避難させなければ」と言い交わされる声と、不安に洩る老人をも抱きかかえるようにして乗船させて下さる姿には、体がふるえるような感動に、何度も涙を拭き乍ら画面を見つづけました。いいようもなく美しいドキュメントがそのほかにもちりばめられていて、とても大きな「もの」を預きました。

これからの二十一世紀の超高齢時代にも、事ある時「世話になったお年寄たちを先づ安全に。」という声が聞けるでしょうか。

恐ろしい少年犯罪が相次いでいます。警察・学校・専門学者たちだけに処理や分析を託しては居れません。乗り物の中でも、道端でも出会う子供や少年たちに、私たちの心の暖かさや、高齢者たちがきちんと生きている姿を見せる責任が求められているように思います。そして次の世代の人たちのためにその健全な成長を祈ってゆくしかないのだと思う日々です。

皆様のご健勝をお祈りいたしつつ では又。

かしこ。

六月一日。



みぎわ会
だより

第112号 2000. 7. 2 発行

七月の便り 「少子高齢化」

暑い日が続きます。緑も重くなってきました。皆様 お元気にお過ごしでしょうか。

二一世紀という新しい時代へ、もう手の届きそうなきになりました。どういう世の中になってゆくのでしょうか。現在の「高齢社会」の概念は現実として誰にも認知されています。次は「少子化」という生き方が急激に日本中に広がり、新たに「少子高齢化」と呼ばれる社会が形成されて来ました。それは、十五歳以下の人口より六十歳以上の人口の方が多くなる状態をいうもので世界各国の統計を見ると、現在、日本とイタリアの二国だけだそうです。

先週末、六月二十四・二十五両日、昔、昭和四十年から六十年代を全国老協で親しくして頂いた方たち十名余の集まりが香川県の「レオマワールド」というところで開かれ、呼んで頂いてまいりました。そのホテルは子供連れの若いお母さんお父さんばかりのお客様で、こんなに沢山子供さんが生まれているのか、と一寸うれしく安心いたしました。けれど、この遊園地は八月末で閉鎖と聞き、狭い日本のあちこちに相次いで作られた「和製ディズニランド」を思い何かうら哀しい気持ちになりました。あすこで会った大勢の若い人たちの健やかな成長を心ひそかに祈りました。

昨、七月一日には、いずみ寮の「お茶の間から第二食堂へ」の改築がほぼ完成しましたので、その

備品を求めに六甲アイランドの家具店へまいりました。皆様の食事が二室に分けられることで、ゆったりゆつくり楽しい時になりますようにという私たちの願望です。食卓セットと小さなソファークッションが目標でしたが、しゃれた機能的な北欧製のテーブルが沢山あり、どれもこれも美しく、洗練された形や色に、いずみ寮の職員たちはややコウフン気味です。食事だけではなく、あれにもこれにも使えるのでは等、いろいろな場面や情景も浮かんで来るようで次から次、見る程に気持ちの揺れ動いているのが見えました。

選ぶという難しい作業を互いに遠慮なく意見を交わし、迷い乍ら楽しく二・三点の目指した品を買付けました。数名でトランプ・かるた又、おしゃべりも楽しめそうな丸テーブルに心惹かれ、セーブル値もうれしく、木下さんに何度も掌で電卓を打たせ、とうとう買いました。二階の広間に置く予定です。楽しくお使いくださいますように。

まもなく食堂が二ヶ所になり、広い窓をから縁を眺め乍ら食事の出来る第二食堂、広く天井も高く調理室に近くて便利な第一食堂を五十人の皆さんが仲良く上手に使い分けて下さるよい知恵、よいローテーションを期待しています。

この二十年目の大改装が皆様の健康維持と増進につながりますように。

買いい物を終えると私は皆さんと別れ、神戸のホテルで開かれる医薬品についての研修会に出席し、会後、久々に夕暮れのトアロード辺りを少し歩きました。ここは沢山の若い人たちが溢れていました。近頃の私は若い人たちを見ると何かなしの不安と期待が交錯してしまい、「ナンセンス」と知り

つつ折り心になってしまいます。

その夜、「早くお風呂にしましょう」と言えばもう十時になっていました。私はいつものように先にトイレで手を洗い扉を押して出ますと十cm余りの「ムカデ」が真つ黒な体を忙しくうねらせて私の目の前へ這い出して来るではありませんか。私は手近にあったティッシュペーパーの箱……四・五個を一つにパックしたものを両手にとりハッシと彼を押さえたのですが、体半分箱の外に残してしまいました。ピクピクと跳ねたりうねったりして、とうとう脱出されてしまいました。私もすかさず再び同じ武器でしかと押さえ込みましたが二・三cmの尻尾がピクピクしています。紙の武器では心許なく「満子さーん、満子さーん」と呼びつづけました。ほんの五m離れた浴室ですが三つの扉があります。トイレの流水の音もやつと止みました。私は一段と声を張り上げて満子を呼びました。全身から滴をポタポタ落とし乍ら満子が走って来、「お母さんどうした、どうしたの大丈夫？」と前かがみで虫を押し付けている私を後ろからしつかりと抱きかかえてくれました。私の体に急変が起きたと思ったのです。私はこの二・三分の小さな戦いのなかで何故か、大声で助けを呼ぶ人もなく不安と危険と共に一人暮らしをされている方々のことが心を刺すように思い浮かびました。

高齢の皆様、どこにでも助けはあります。心をしっかり持ち、用心深く、元氣を出して生きてまいりましょうね。

長く暑い夏です。くれぐれもお体ご大切に。かしこ。

七月二日



みぎわ会 だより

第113号 2000. 8. 1 発行

八月 みぎわ色

記録的とも言われる暑さの中に七月がすぎてゆきました。お変わりなくいらっしやいますか。この便りをお待ち下さる皆様のご健勝を祈り乍ら八月号のペンをとつています。

今年に入りましてから耳目を覆いたくなるような出来事がつづき気が重くなって来るのを覚えます。時には明るいきれいな心の洗われるようなニュースを流してほしいナーと心の中で思わずに居れません。

私たちからのニュースはそれ程さわやかなものではありませんけれど、ほんの一寸「よかったネ」と感じていただけるのではとの希いをこめてお報せいたします。

誰もが不審、不明不安にとまどいつつふみ込んだ「介護保険制度」下のこの年も早四ヶ月経ちました。丁度3分の1を乗り越えてまいりました。緊張と苦しさ、又不安の四ヶ月でありましたが「サービスを大切に守る、よくしてゆく」ことを第一義として誰もが一生懸命でした。これが「みぎわブランド」です。

去る六月末日になってやっと四月分の「介護報酬」が振り込まれました。どうしようかと考え合っていました「夏季期末手当」をぎりぎり乍ら全員に支給することにいたしました。何人かの職員から「沢山ボーナスを頂きありがとうございました」と、とてもうれしい顔でお礼を言って頂き、私も本

当にうれしくなりました。

実に繁雑複雑な新制度下の管理部の業務、縁の下の力持的な「介護支援…ケアマネジャー」の仕事に黙々とひたむきに取り組む係りたち、流動的になった勤務時間のローテーションの流れを平常心で守る現場。すべていつもと変わらないように流れてはいましたけれど、見ている私には皆さんの健康、 टीमワークのあり方、又毎月取りくずしてゆく「引当金」の運命、などなど。更に地域配食の安全も、日々祈る外ない明け暮れでございましたが、ここまで来てゆく手のうす明りが見えはじめたようで、ほっと小さな一息を吐いています。この「保険制度」の健全な成熟のために、社会の皆様から、又現場から引きつづき「声」出しつづけてゆかねばと思います。福祉の世界だけは汚さずにあるべき姿に守り通したいという気負いを実践に表し度いのです。

七月廿八日には第二二回目の「職員セミナー」を開きました。いつもの解剖生理シリーズ、数名の研修報告について、新人―入職一年以内―十数名から「私とみぎわ園」をテーマに夫々三分間スピーチを聞くプログラムでした。新人たちの一生懸命なパフォーマンスの中に早くもうつすらと「みぎわ色」に染まりはじめている姿を見るように力づけられました。この新しく迎えた一人々々を暖かくきびしく見守り、よき育ちを期待する大きな希望を共有出来る時となりました。先づはみぎわ会の現状の一部をご報告いたしました。

「沖縄サミット」も無事終わりました。私たち迄緊張し無事を祈っていた大事業でした。あの頃は少し疲れ、自宅入院の毎日を過ごしていました。クリントン米大統領が「平和の礎」を巡行される

実況放映を一人で静かに見ることが出来ました。表現する言葉もない「重いもの」を負う大統領の表情も姿も一つの感動でした。あの無数の碑石の一つに、私の夫の名が刻まれています。何度も訪れた彼の地を囲む海はいつものように美しく、空も晴れ渡っていました。勝者、敗者、夫々の血と涙で歴史が編み上げられてゆくことをこのニュースが語っているようでした。

日本人、殊に私たちの年代にとっては重い八月です。現在の日本は又別のむつかしい時代の八月です。著さがつづきそうです。くれぐれもご健康で楽しい日々をお過ごし下さいませ。かしこ

八月一日





みぎわ会 だより

第114号 2000. 9. 1 発行

九月 旅のあと

九月一日の前夜のことです。

「さて何を　さけて食おうか　迷う日々」

という川柳の一句をTV番組の中で見ました。季節感も産地名も忘れるばかりに豊かな食生活の現在、その豊かさは何なのか、次々に報道される「食品の不安」が、十七文字でチクリと嘆く声をうら哀しくもおかしく笑わせられて八月は終わりました。

記録的な高温少雨の八月でしたがお健やかに過ごしのことに存じます。ここみぎわ園も辛い平穩に過ぎました。八月四日はいずみ寮主催の「七夕祭り」でした。芝庭で中央にやぐらを組み笹飾りも涼やかに、丸い提灯は八方に連なりました。日が落ちるとお招きした町内の皆様も大ぜい参加して下さい、みぎわ園から出席の車椅子も並びました。年一回ですが、町内の皆様ともすっかり溶け合った親しいお交わりの中で踊りや福引きなど、又、八千代太鼓の熱演もあって楽しく盛り上がりました。十八日の「みぎわ園夏祭り」は開会直前の大夕立のため急遽、屋内へと変更、夕立ち三日の諺もあり皆　天気を祈りましたのに…………。

しかし臨機応変はお手のもの、誰もがすばやく立ち回り、いつものご馳走屋台もあちこちに配置され、きびしい時間を作り出しては練習した「郡上節」の歌と踊りが利用者・職員・お客様ひとつになつて廊下を流れました。彩とりどりの浴衣姿に団扇、哀愁を帯びたメロディーが又、今年も心に沁みる喜びとなったことでしょう。私は遠くスコットランド辺りの海上でいろいろ想像しお天気を祈っていました。九日から二十二日

迄の「英国一周」の船旅の途上でした。昨夏「バルト海クルーズ」を共にした熊本しらぬい荘の水民先生と早くから楽しんで決めていた旅でした。

ロンドン、ドーバー港から又その港へとアイルランド、スコットランド更に北辺の島や港町を訪ねる旅はロイヤル・プリンセス号とその名も美しい四万屯余りの客船です。

千二百人余の乗客中、日本人は私たち三人だけですが、皆同年輩のりタイヤ組のようです。主としてアメリカ人で明るく、ゆつくりムードの中で、美しい海、広い空、おいしいお食事、洗練されたサービスに唯々勿体なく感謝々々の世界でした。

「ミステリアススコットランド」と題した写真集を買いました。正にミステリアスと言える広々と静かな景色です。古代の人たちの自然を尊びきびしい気候の中を敬虔に生きた息づかいが、緑一面の荒野から ふと流れ出るように感じられました。

小さな町々の窓、庭、街路の花々は言いようのない美しく優しい優しさです。又、少しづつ旅のスナツプをお届けいたします。身も心も伸び伸びと洗われた旅でしたのに、帰る前日位から咳が出はじめ、空気が乾いているせいかと思っていましたところ廿五日頃から本格的な気管支炎症状でダウン。面目なき次第です。この舶来の風邪も何とか峠を越えました。

どうか秋が涼しさとみのりを持って来てくれますように。

災害の中にある三宅島の皆様にも一日も早く静かなやさしい秋が訪れますように。切なる祈りと溢れる感謝の中で。かしこ

九月一日



みぎわ会 だより

第115号 2000.10.1 発行

十月

十月です

高い空とさわやかな涼気を伴って秋十月が訪れてまいりました。

お彼岸すぎまでぼつてりと残暑に覆われていましたが、その重いカーテンはばさつと切り落とされたように、呼吸のしやすい気持ちよい十月一日の朝でした。

日は短くなりました。こういう情感は四季を持つこの国に生きる者だけに与えられた特権なのであらうと思います。

こんな日々、皆さまはいかがお過ごしですか、猛暑のお疲れを癒しくれぐれもご健勝でとお祈りいたします。

オリンピックも終わりました。ともすればテレビに見入ってしまう二週間でした。やり直しが出来ない唯一回の競技の持つ「非情」を沁々味わうことの多い日でした。

僅か数分又は数十分の「たたかい」のために少なくとも四年以上の日々をきびしい練習に打ち込んだ選手たちの、得意、失意を見乍ら、心に疲れを覚えるのも当然と思います。

それにしてもオリンピックの原点・花とも言える「女子マラソン」の優勝には驚きと共に大きなよろこびを受けましたね。

戦いすんだ今日、選手はじめ関係者の皆さまに「ごくろうさま」を一パイ送り度いと思います。私

達の馳場も年度半ばをすぎ、折り返しコースに入りました。介護保険制度にも少し馴れてまいりました。

ゴールのないマラソンのような私たちの仕事です。でも、うちの選手たちは毎日が真剣勝負です。自分の「バー」を1cmづつ、1cmづつ上げ、実力の成長に挑戦しようとする意気を感じられます。

各施設に中にいつも凜としたさわやかさが流れるのはこの姿勢によるのだと思っています。

みぎわ園では来年度から「直接ケア」の職場を3:1にしたいと十余名の求人を行いました。早速十一名の応募があり、去る廿九日、十一名の求職者の入社試験を「筆記と面接」で行いました。大・専門学校・短大・高卒と若々しく、新鮮な十一人がみぎわ園で働き度い「オンリーです」と応募して来たのです。テストの一部「何故みぎわ園を選んだか」の問いに殆ど全員が「お年よりが好きだから、人の役に立つ仕事がしたいから」と書いています。答案ことばとしてもうれしいものでした。

二十一世紀の新年度は新しいメンバーも加えて共に励まし合いながら技と力の充実を目指してはるかなゴールに向かって走り出し度いとひそかな緊張と夢を持たせて頂きました。皆様に力強い応援をお願いいたします。

かしこ

十月一日



みぎわ会 だより

第116号 2000.11.1 発行

十一月 ひょうげん

朝、出勤の道に少し色づいた木の葉が、軽い音を立てて風にたわむれるのを見ますと季節の変化に驚かされます。

秋の日々、皆様お変わりございませんか。十月の運動会・家族会にはご参加下さいましてありがとうございました。

ここ「みぎわ村」の住民二百余名、無事平穩に一日一日を過ごさせて頂いています。庭の大樫の高く広がった枝葉が上の方から少しづつ赤みをおびたオレンジに変わってゆくのをみんなが、夫々の想ひを持ち乍ら眺めるこのごろです。

静かに、壮大でたしかな変化が時と共に流れています。

古いお話ですけど、私が全国老施協で「研修委員」として全国の老人ホームから集って来る寮母さん達の学習にかかわっていた時のことです。昭和五十年から六十年に渡る頃で「特養」という施設が年々100づつ殖えてゆく時代だったと思います。

既に「施設ケア」の重要性に着目し、様々な場所で様々なテーマを取り上げて研修会を持ちました。老施協で「福祉寮母」という独自のコースを定め、年2回一週間、研修生と寝食を共にし乍ら学んだ数年もありました。そういう時、彼女たちから必ず出される問題の一つに「処遇困難老人」という言

葉があつた事を思い出し、この数日、私は遠い日の何のマニュアルもなく、深い経験から出る指導力も乏しかった時代をなつかしく想い返してしまいました。

現代でも現場では百人百色のケアが求められています。それぞれの個性・生活歴・病状やADLの問題、ご家族の考え方、入所者相互の人間関係などが絡み合つて、ケアは難しい仕事となります。みぎわ園のお別れ会の場で、ナースや寮母父たちの送る言葉の中に、「○○さん、いろいろ教えてくださつてありがとうございます。」という一節を聞き、私は胸を打たれたことが忘れられません。○○さんはもう二十年前であれば「処遇困難老人」と決め付けられるタイプの方でした。けれど、今は○○さんの難しさが私達のケアを育てる教科書として大切に受け容れられています。「ありがとうございます」という素直な暖かい言葉に、今、私達の持つケアの質と量が見えるように思いました。現在の老人ホーム現場には最早「処遇困難老人」という言葉は消え去りました。

たしかに、どうすればいいのか、どう言えばいいのかとうめく思いに陥ちこむことの多い日々です。難しく、とても難しい問題が毎日毎夜私達の道に出現して来ます。誰もが頭と心との力をしぼり出し合つて対応しなくてはならない問題です。やつと考え出した方法も失敗に終わるのは日常茶飯事です。けれど、こうした中で、いつか変化が現れています。

私達にも相手側にも変化が生まれ、いつの間にか、もうその問題はクリアされているのです。そして又、次の問題に立ち向かわされていると言う、音もないけれどきびしい時の流れの中で少しづつ育てられてゆく私たちに気付きます。

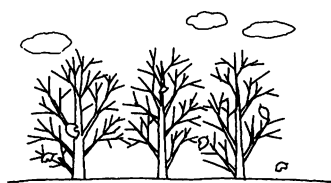
この道では、私達の働きが小さくとも誰かの満足感、安心、信頼、そして明らかに一時のよろこびに変わっていることを知る魅力に捕らえられてしまうのでしょね。風に舞う落ち葉のような私のひとりごとです。

朝夕は冷え込みはじめました。

どうぞお元気にお過ごし下さい。又、折りがあればどんなことにつきましても、私たちをご指導下さいませ。では、又。

かしこ

十一月一日



十二月 ゆく年

みぎわ会
だより

第117号 2000.12.1 発行



早くも十二月の便りを書く日がまいりました。

お変わりなくお元気で師走をお迎えのことと存じます。

暖かいベッドから離れがたい朝六時五十五分、枕もとのラジオからNHKの「今日は何の日」の放送が流れて来ました。いろいろある中で「1958年(昭和三十三年)」

十二月一日、一万円札が発行されました。」という一節だけが耳に残りました。「万円札さんあなたがまだ四十二歳ですって、はじめの元気はどうしたの、だんだん小さくなっているみたい、誰も頼りにしているから大きく元気になってネ。」とひとりごち

乍ら、この一日がはじまりました。雨戸を開けますと、美しく楽しませてくれた庭のもみじは早くも散り果てたり、少し枝に残った葉は力なく色あせて淋しい冬の姿になって来ています。

一日一日の変化は僅かなものと見えますが、一と月、一年のうつろいで見ますと驚くばかりの急流であることに気付きます。

いよいよ二十世紀も終わります。

近頃の情報の中では新しい世紀へわくわくするような期待を持つのは一寸難しい気分です。けれどもやはり地球上のすべての人々に明るい希望と新しい力を持って来る平和な成熟した世紀であるようにと願わずには居れません。戦争ばかりの二十世紀でした。

当方、みぎわ・いずみ・ナオミ・ハンナ各施設は夫々元気におだやかな日を送っています。廊下で逢う皆さん——利用者——に何とも言えない安らかな表情を見せられます。これが私たちの力の源泉になるのです。

みぎわ園では来年から全館改築を計画しています。三十三年近く経て建物もまだきれいです。大事にきれいに使つて来ましたから。けれど、だんだん不便になり、現状のまま事業を続けるのは困難になつてまいりました。もう一年余り前からのこの夢の実現を祈り、準備を進めてまいりました。

職員にも時と共に変化があり、新旧交代が続く時代です。永年の積み重ねの中で形成してきた「みぎわ色」のケアがこれからも一層色鮮やかに活力あるものへと受けつがれ育て続けて行つてほしいと心深く祈っています。

介護保険制度も当初考えました程にはグクシヤクせず定着して来ています。制度の持つ矛盾や不条理は私たちの「利用者第一」主義の熱い心で分解消化されているのだと思います。

いつも裏方に徹し乍ら、しっかり気を吐いているのは給食部です。ティームワークは抜群、毎日意欲的に取り組んでいます。職員がみんなで一緒に頂くお昼ごはんは一日の中の大切な楽しみの一と時です。

市内給食は土・日も休まず続けています。そんなことが出来るの?と思う問題もすんなりレールに乗せてしまう彼女等のパワーをひそかに誇っている私です。

昨日、久しぶりに利用者からメッセージがあったと朝礼で発表されました。「毎日毎日おいしいお

食事をほんとうにありがとうございます。待ちかねる気持ちです……」という、短いけれど正直なお便りでした。とても励まされました。ありがとうございます。

年間、変わらず「ボラ」を続けて下さいました皆様へ改めて厚く御礼を申し上げます。まるでウチの人のように信頼し切ってお世話になってまいりました。

どうぞ良い新年をお迎えくださいませ。皆様のご健康と希望に満ちた御迎年を祈ります。

私 松尾周子、いよいよオールドオールドの途上に至りました。おかげさまでこの一年もよく遊びよく休息し少しだけ働く日々が続けることが出来ました。皆様のご支援に深く感謝いたします。

かしこ

十二月一日



みぎわ会
だより

第119号 2001.2.5 発行

二〇〇一年二月 新世紀の幕開け点描

その一

期待と不安の相半ばする中で新世紀を迎えました。

お正月以来きびしい寒さが続いています。皆様方にはお変わりなくお過ごしですか。二月の便りをお送りします。

久々に冬らしい冬の訪れです。不気味な「地球温暖化」現象は少し改善しているのかしらとひそかな期待を抱かせられます。

この極寒にインフルエンザウイルスは活動をひそめているようですが、寒気のゆるみに乗じて猛るのではないかと思います。くれぐれもご用心くださいませ。

わが国では、国家の重責を負う筈の人たちの多くが「黄金ウイルス」に深く犯され、将来を負う青少年層には戯れのように他者の命を奪う「狂気」が流行しています。かなり危険な病状に哀しさと前途の憂いに沈みがちな日々です。唯、新聞紙上にきびしい戒めと同時に次世代へのいとおしみ溢れる声を寄せる方たちがあり、ほっと力づけられるのですが、その多くが高年齢層であることに気がきます。

全人口の20%近い高齢者たちは今日こそ社会の良識としての意気と責任を覚えねばと考えます。

その二

横綱 曙関が引退しました。異様なまでの巨体と突き押し一本の怪力に余り好感の持てない力士と考えていましたが、彼の引退の言葉と涙ぐんだやさしい瞳には感動させられました。

言葉も、生活習慣も、文化も全く異なる日本、その中でも国技という古めかしい伝統様式に固められた角界に入り、膝がボロボロになるまで、耐え忍んで努力した彼の苦労をやつと思ひやることが出来ました。「相撲をやつてよかった、若・貴両関がいつも前を進んでくれ、それについていこうと努力した。両関に感謝している。外国人として初めて横綱になるという経験をしたことはよかった。ファンの皆様、日本の皆様に深く感謝しています。」

正しい日本語でこの謙虚な言葉を彼はゆつくりと涙ぐみ乍ら語ってくれました。恥かし乍ら、この時から私は彼を尊敬するファンになり、吾が未開人にも劣る無礼を深く心に詫びています。

その三

一月二六日、第二一五回「みぎわ園セミナー」を行いました。

久々に全員が口を開くスタイルにしようと企画し、テーマは新年度に向かい、過ぎ越し方を顧みての「自己評価」としました。

古めかしく、時代遅れの設定かとは思いましたが敢えて設題いたしました。半数づつとして、約四五名から二分づつ、実に誠実に正直な声を聞かされました。激しい制度の移り変わり、人の流れも移

り行く中で、「中堅としての責任を果たせるように努力したい。」又二・三年生達からも「春には新人が沢山入って来る。先輩として過ちなくしつかり指導出来るようになりたい。」との声は、いつも乍ら、正にみぎわ色の純粹さです。うれしく力づけられました。誰も本気なのがスゴイと感謝しています。やっとな新世紀の小さな希望の星がピカピカまたたくのを見せられたようです。

おわりに

私、松尾周子 精魂を尽くせる道を歩ませて頂き、二つの世紀に及びました。神と人、殊に三十二年間身近にあつて労し支えて下さった方々への感謝に溢れています。許されます時迄「わが老い」と仲よく「存在」に過ぎない役割を少しでもカッコよく果たさせて頂き度いと祈っています。

皆様のご支援、ご指導を重ねてお願い申し上げます。

新世紀が皆様に豊かな日々を積み重ねさせてくれますようお願い申し上げます。

二月一日 かしこ



みぎわ会 だより

第120号 2001. 3. 1 発行

三月 樹々の声

短かい二月は、きびしい寒気や時ならぬボカボカ日和などを交え乍らあわただしく過ぎてゆきました。

ハワイ沖での哀しく不幸な出来事や、政財界の相次ぐ情けない情報に心奪われ、「きさらぎ」といううつくしい名の季節と大自然の精緻な営みをからめて一句、といううた心も、「春隣り」へのほのかなときめきも掻き消され、心重く、乾いた侘しい一月であつたと思います。

けれど今日、春三月が訪れました。

皆様はお元気でやよいの春をお迎えですか。卒業、入学、就職など人々に希望と沢山の夢を届けてくれる春でありますよう祈り乍ら例月のたよりをお送りいたします。

「わたしはこの施設の生き証人やからな」とは昨日、訪園して下さった、顧問、藤原一郎氏の言葉です。開設以来三十有余年にして聞くこの言葉にはずしりとした重みがありました。睨が熱くなる思いでした。

先日、庭仕事を手伝って下さるMさんとの立ち話を思い出しました。「朱木蓮、今年は沢山蕾をついけているからきつときれいに花が咲くでしょうね」と私、植木屋で眺めた美しい木蓮林の姿にひかれ、衝動的に買った三十本余りの木蓮林でしたが、ここ数年は弱って枯れる木もあり、花も少なく

なっていました。「強い酸性の赤い粘土で閉じたこの辺りの地質では沢山の花木が育ち続けることが難しいのだ」とMさんも言いました。そのとおりだと思います。

みぎわ村には沢山の木々があります。これ等は物言わぬ生き証人ではないかと、私は考えています。第一に、狭くなった中庭の片隅に生きている一本の「ココナッツ椰子」があります。みぎわ園開園の時に、岡澤薫郎先生がお祝いにと贈って下さった四本の中の一本です。根本径10 cm位の若木でした。亜熱帯気候を好む樹木ではと思いますが、肌に合わないこの山里で逞しく生き残った一本です。今は根本が径30 cm以上もあります。

その時一緒に頂いた数本の「ヒマラヤ杉」は増築時に表玄関の両脇へ移しました。見事な大木になり美しいピラミッド型に造られた並木は建物と共に施設の重厚な歴史を物語る生き証人（木）であります。「今度の改築時にはこの樹木たちを絶対傷めないで下さいね」という私に願いからか、どうしても少し動かさねばならぬものは下枝を刈り込んで今から養生がはじまっています。

南庭園の「楠」は創立五周年記念旅行で訪れた熊本から買って来たものです。小指程の太さ・1 m丈の苗木5本の中で、この二本が生き残りました。大木に成長した現在、春には透明な赤い若葉を輝かせ、夏には香しい緑陰を作り、三十年近い時の流れを物語ってくれています。

私の住居の南の芝庭の端にある「姥女榿」^{うばめかし}の大本は三十年程前に植木屋さんで、そのまっ直ぐな太い幹の構えと、小さな光を照り返す枝葉の造りに魅せられ「金二十万円」で買ったものです。今3 m位離れた所に実生の若木が育っています。径5 cm位の幹になり、3〜4 m近く伸びました。母木に甘

えるかの様に風に揺らぐ姿にはつい微笑みが浮かんできます。

やはり三十年前、大阪駅の地下道で鉢植20cm位の若木を買い、両手に抱えて帰った櫟は裏庭に下ろしました。今は二本共々大空高く枝を張り、櫟独特の気品のある樹形を成し、芽立ちの緑、秋の黄葉を楽しませています。その落葉掻き、落葉焚きに腰が痛くなる秋のよろこびも与えてくれます。集めた落葉は黒々とした堆肥に変わり裏庭の地力にかえってゆきます。

Nさん、Mさん、Sさん、Kさん、大勢の方々から贈られた樹木や花木一本づつが物語を持ち、又、このみぎわ村の歴史の物言わぬ生き証人なのだと思いつら改めて多くの方々を偲ぶ今日の一日となりました。

この広い庭や林を年中手入れして下さる神戸さんの働き、ごくろうさまです。

私たちは今、年度末の大忙の中で一人一人一生懸命に働いています。新しい成長、生き残りをかけた自らの戦いとも申せます。来春の開花にご期待下さい。

皆様の御多幸をお祈りいたします。

かしこ

三月一日



みぎわ会 だより

第121号 2001. 4. 1 発行

四月 春の光

四月一日の朝です。

少し寒いと感じられる気温ですが、きれいに澄んだ陽の光がパイ溢れている庭に降りてみました。柔らく湿った土に佇んでいますと、静かな感謝の思いが流れるように湧き上がってまいります。日曜日の朝という気持ちのゆとりからでしょうか。

様々な不安と緊張に張りつめた十二年度が過ぎてゆきました。

正に新世紀、十三年度の第一日の今日です。月一回の大して変わり映えもないこの便りをお読み下さる皆様を思いました。小さな文面にも御心配頂いたり、安心してくださったり、又、折りを共にしてくださる方々に！ありがとうございました。大きな力強い援軍に囲まれていくという実感です。

皆様にもこの年度がご健康で、おだやかな中に沢山のよい実を結ばれる時となりますようお祈りいたします。

さて、十二年度はじめに現れた「介護保険」という新しい制度の下で、ややこしく矛盾にみちた規定や考え方に正面から取り組む体勢の中で、私は本当に「みぎわ号」の姿を再確認し自覚することが出来ました。皆一つ心のようになって乗り切ってきたことは大きな実力の証明でもありました。

この大切なおりになりましたが、丸山智枝子みぎわ園施設長、小林久代ナオミ館主任寮母、大久保

千秋・小島美佐、二人のみぎわ園主任寮母、大西正子調理主任の五名に加え、村上ナオミいずみ寮長をお送りする時期となりました。二年で去られる村上先生のほかは丸山園長の三十二年をはじめ二十年、十八年と夫々一個人の人生としては大きな部分をみぎわ会と共に生き、夫々の場でリーダーの重任を果たして下さった方々です。楽しく苦楽を共にしてまいりました。残して下さった大きな功績は長くこの事業に生き続けてゆきます。本当にありがとうございます。

OBとしてこれからいろいろお力を貸していただくことになるでしょう。よろしくお願いいたします。代わって十八歳・二十歳という新人十一名を迎えました。彼等もみぎわ会の歴史と伝統の中に加えられ、荒木新施設長の明快な指揮と多くの先輩の暖かいティームワークに導かれ一年経てば新らしい力に成長するはずです。私は昔話に聞いて来た「早く芽を出せ柿の種。早く木になれば柿の種」が思わず唇に上がって来ます。正にみぎわバアサンだと、クスクス笑ってしまい乍ら――。

今朝、まだ早いかしらと見に行きました庭の「かたくり」が囲いの中で、あの斑入りの大葉を出し、その真中から伸びた花芽の尖端に早くも小さな百合形の萼が出来ていました。生命の再生を見せられ、とてもうれしくなり、独り微笑んでしまいました。

幸せ一パイの四月一日の朝です。エイプリルフルではありません。では又。

五月迄、お健やかに。

かしこ

四月一日



みぎわ会
だより

第122号 2001. 5. 1 発行

新緑五月

もろもろの天は神の栄光をあらわし

大空はその御手のわざを示す

これは聖書に記されたダビデの歌です。

正に神の御手を見る美しく、明るく、かぐわしい大空が輝く五月です。

人の世はいろいろの移り変わりに波打っていますが、新しい力ある新時代を期待する思いです。皆様もお元気で新緑の五月をお迎えでしょうか。

私たちも新世紀二ヶ月目に入り、新しい希望と計画に向かっての歩みが整ってまいりました。

今月は具体的に新しい指導者となりました荒木新施設長がご挨拶を申し述べます。

.....

この度、みぎわ園の施設長を拝命致しました荒木でございます。昨年四月に社会福祉法人みぎわ会に就職以来一年が経過しました。まだまだ勉強不足ですが、みぎわ園の施設長として任を果たすとともにみぎわ会の発展のために微力ではありますがお役にたちたいと考えております。

さて、三年度から介護保険法が施行され措置制度から契約制度に変わり、施設の運営も変わりましたが、利用者に対するサービスの内容には何の変化もございません。

当施設では、ご利用頂いております皆様が安心して生活して頂き、利用者の家族の方々からも、みぎわ園に入所させて良かったと思つていただける施設を目指しております。

人間はただ単に生き続けるのではなく、社会の中で自分の存在価値を実感し、相互に助け合いながら共存共栄を願っているものであることを踏まえながら、利用者の意志を尊重し、励まし、必要としている援助を過不足なく適切に提供し、みぎわ園という社会の中で、その人らしい生活ができるよう援助を行うことを最も重要な課題として取り組んでおります。

又、施設の整備につきましては既にご案内いたしておりますとおり、利用者の方々に安心して快適に生活して頂くために実施するものであり、いよいよ本年六月に着工する運びと成りました。工期は二年を予定いたしております。この間の騒音、居室変え等によりご不便やご迷惑をおかけ致しますがよろしくご理解とご協力をお願い申し上げます。

以上、ハード・ソフト両面にわたって良質なサービスが提供できる体制を整え、地域における在宅福祉の拠点施設としての役割をはたすため職員一同さらなる努力をしてまいりますので、ご支援とご協力を頂きますようお願い申し上げます。



みぎわ会 だより

第123号 2001. 6. 1 発行

新世紀のスタート

今日は六月三日です。美しい初夏の陽光が朝の緑に注いでいます。

ご無沙汰いたしました。皆様もお変わりなく、さわやかに、この朝をお迎えでいらっ
しゃいましょう。祈りつつ、ペンをとっています。

五月は過ぎました。天候が例年になく不順でありましたり、相変わらず毎日空おそ
ろしい様な陰湿なニュースを聞かされまじたり、私が一寸体調を崩した事もありと、
ややもどかしい日々が続きましたが、皇太子妃のおめでたの報せ、少し霽圄気の変わっ
た元氣そうな内閣の誕生に、折るような希望を持たせられもしています。

わがみぎわ園では、ジューンプライドに先立ち、二組の職場結婚が成立しました。

五年近くみぎわ園できびしくいつくしみ育てた娘たちの美しい花嫁姿を見ることは、本当に嬉しく、
又、切なくもある感動です。彼らが互いに愛とパートナーシップを深めつつ、これからの長い人生行
路に美しく逞しく歩みをつづけ、幸福でありますよう、私たちみんなでエールを送っています。

四月より加わりました新人職員たちは皆元氣で明るく、早くも結構仕事をマスターしています。三
月に一カ月かけてキメ細かく行つた準備研修は学ぶ側にも教える側にも相当きびしいスケジュールで
はありましたけれど、やはり、これが良かったと思わされています。

もう一つ一番大きな問題の全面改築工事は、いよいよ着工に近づいてまいりました。

市、県、国という三つの関門を順次往復する手続きが必要です。殊に県という関門では細かくむつかしい法規や数字のルールを通過しなければなりません。沢山の時間が必要でした。

予定よりはおくれましたが、七月には工事が始まります。生活しつつの改築工事であり、工期も当然二年近くなります。ご利用の皆様にも職員にもいろいろ協力して頂かねばならない事が、今私たちが考えている以上に沢山できて来ることでしょう。

どうぞ、よくご理解下さってみぎわ園の新世纪への衣更えにお祈りと祝福をお願いいたします。

工事の進行を喜びと共にお便り出来ますことをご期待くださいませ。
間もなく梅雨の訪れです。くれぐれも御体ご大切に・・・



かしこ



みぎわ会
だより

第125号 2001. 7. 10発行

七月の流れゆく時

きびしい暑さがつづいていますが、お変わりございませんか。地球温暖化の故か、高温多湿の度合いが年々少しずつ上昇してゆくようで、何となく不安になる思いですが、どうぞ御健勝でいらっしゃいますように。

梅雨晴れのカラッとした青空に真つ白な雲の峰の立つのが待たれます。

さて、七月の便りが大変おくれましたことをおわびいたします。先にもお知らせ致しました、改築工事はようやく道が開けてまして、先月二十一日、多数の御来賓、役員方御列席の下、神戸聖愛教会牧師 新里昌平先生に式辞、お祈りと祝福を頂き、厳肅な神の御臨在の中で、感謝に満ちた起工式を行わせて頂きました。美しく盛り上げられた新砂の山へ、ザックザックと鍬を入れます時の感動は、心に染みる一と時でございます。どうぞ無事工事が進められますようにとの祈りそのものです。

そのあと、二十六日、私は又しても病み付きの海外への旅情に惹かれ、正午、成田を飛び立ち、なつかしい東欧に向かいました。チューリッヒを起点としてチェコの古都「プラハ」オーストリア「ウィーン」は音楽の都、そしてハンガリー首都「ブタペスト」の三都市を巡って歩いてまいりました。いづれも過去三十年間に二、三度も訪れたところではありますが、その都度の街の姿、その盛衰の移り変りを見せられ、感慨深い旅になりました。杖を頼りに、グループ十名の方々の暖かい支えを頂き、付

添ってくれました満子には、前にまわって手を取り、後ろからはお尻を押し上げてバスに乗せるなどと、よく助けてくれました。あと四ヶ月で八十八歳になる高齢者としては、相当無謀な行動と知りつつ、それ故に又一層喜びも深く大きく楽しませて頂きました。七月六日夜、無事帰りつきました。みぎわ園は、予定通り第一期工事が進んでいました。わが家へ入る前に、まだ灯が明るいホームへ入りますと、事務所移転も済み、活き活きと活動していました。

この大世帯の引越しがどんなに大変だったかを思い、独り、旅を楽しませて頂いた私は本当に勿体ないと思いました。創立以来、三十二年余り、私たちの営みの息づかいと匂いが染み込んでいる事務室、応接室から講堂へとまわりますと、ガランとした廃墟さながらの姿です。暫く立ちつくして眺めました。切ない哀惜の思いがじんと胸に広がってきます。さようなら、ありがとう、は唇の中で止めました。

何でも少しずつ小さく大きく変わってゆきます。それは、変わるものが生きている証なのであります。しょう。

利用者の皆様も慣れたお部屋、隣人との別れは、さぞお辛いことだったでしょう。けれど、全部、私の予想以上にしっかりと治まっていました。そこには、職員たちの知恵と心の練りに練った結果が見え、私としましては、一人の感慨を味わせて頂きました。

皆々様ごくろう様でした。どうぞ、暫くご辛抱ください。みんなで新しいみぎわ園を見て、そこを住居とするまで、一生懸命楽しく希望を抱いて生きてまいりましょう。

私も漸く五年前に整えて頂いた、きれいな気に入っていた理事長室から診療所の職員休憩室へ机を移して頂き、ここが当分の仕事場となっています。

二年余に亘る工事の無事順調な進展のために皆様どうぞお祈り下さいませ。

まもなく訪れる二ヶ月間の猛暑も、逞しく乗り切ってまいりましょう。誰も何もないように、平静にいつもの姿勢で進んでいるみぎわ園です。ありがとうございました。

皆様の御健康と御前進を祈りつつ。では、八月まで

かしこ

時差ボケに苦しんでいる 松尾周子です

七月十日 夜





みぎわ会 だより

第126号 2001. 8. 1 発行

八月 暑中お見舞い

暑中お見舞い申し上げます。

この毎日の猛暑は何年目かの記録的高温とのことです。そう聞けば一層耐え難いように感じてしまいます。

皆様はいかがお過ごしですか。くれぐれも十分な休息・栄養にご配慮の上、ご健康でこの夏を克服なさいますようお願いいたします。

私共のことを申しますと、先ず工事になります。工事は第一期の部、つまり元玄関から事務室・応接室・南側の講堂・1～3号室などの部分はきれいに消えてしまいました。高い囲いが除かれますと、唯土一色の広がりが見えます。こんなに広い場所だったのかと感じさせられる私達です。直ちに、工程表に従い堀方がはじまり、どんどん進められています。僅か七八ヶ月後の来年二月には三階建の新しい「みぎわ園」の第一部と、新しい「調理室」がこの土地一杯に建て上げられるのです。

今は待つ喜びが誰の心にも拡がり、様々な期待や夢を育ててくれる時になりました。と同時に、この災害下で働いて下さる方々の健康と安全と共に順調な工事の進行を祈らせています。

みぎわ園内部の営みは、狭く仕切られた不自由の中でも、いつもと変わらない「みぎわ型ケア」に全力が尽くされています。誰もが知恵を出し合い、施設の任務を毎日きちんと完了しようとする姿が

見えます。一声の号令もないのに何一つの乱れもなく緊張10%プラスの流れがみえます。これはあの広い土地のように、みぎわ園を建て上げる下に埋もれている大きな資産だと私は感謝して確信しています。

「いずみ寮」「ハンナ館」の皆様も日曜毎の「礼拝」の場でも沢山の「祈り」を積んで下さっています。すべてこの事業を支える大きな力です。ありがとうございました。

先日の「Sさん」との会話を一寸ご紹介いたします。

「こんにちは、暑いですね。Sさん、あなたここ——ルデヤ3F——に移っていらしたのね……。どお？お元気？」

「へえ、先生ナ、ほんまにみんなようしてくれてでっせ。ありがたい、けどナ、欲いうたらウチもう一ぺん歩きたい！」

「……。ほんと、……。でもそれは無理ね。Sさん歩けないのは口惜しいけど、あなたはこうして楽しくお話できるのがいいわね。何でも話してお口でたのしんでネ。」

「へえ、おおきに。そやけど皆親切やで。殊にあの人はほんまにようしてくれてやで。うちはあの人ほんまに好きや。そやけど、もうしゃあないなア……。もうなア、ほんまに早よ死にたい、死にたいねんで、先生。」

「……。ほんと、私もそう思うわ。でもね、私たちはおかげできっと死ねるのよ。私は神様が一番い

い時に死なせて下さると信じているの……。Sさんね、でも急がないでね。もう来年の春には新しい建物が出来るのよ。三階建てよ。そしたらあなたの好きな部屋へ移すからね。もう一年がんばって元気で生きていきましようよ。」

「まあ、そう！うれし。先生綺麗な部屋へ入れてくださいナ！」

老いを生きる道のけわしさを私も体験させて頂く今日この頃です。むずかしい病気で四肢の自由を失ったSさんはそれでも逞しく生きておられます。Sさんのようにコトバを使えない沢山の方たちの「声なき声」を体いっぱい聞くのですけど……。私には大したことは出来ません。言い訳ばかりです。でも、今日一日は大事にしましょうね。神様から頂いた生命ですから。

日本は世界一の長寿国である、と今晚もTVは報じています。長生きの世界一より「老人が世界一幸せ」な日本になりたいですネ。

3週間経ち、やっと時差から開放され少し元気な 松尾周子です

八月二日 記



会 社 み ぎ だ よ り

第127号 2001. 9. 1 発行

敬老の九月

小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた・・・声には出ないのですが、このきれ

いなメロディーが思わず唇に上る昨日の帰り道でした。見上げる大空には本当の秋の雲が絹のスカーフのように流れていました。

格別にきびしい炎暑のこの夏でしたが、皆様にはお健やかに秋をお迎えでしょうか。まだお彼岸までは残暑の日も何度か出てくることでございましょう。こうした気温の乱高下は体調を守りにくい季節でもあります。

くれぐれもご自愛下さいませ。

九月は「ご存じのとおり」「敬老の月」でございます。

施設をはじめまして初期の頃、或新聞社の記者氏が訪ねて来られ、「ここでは敬老の日はどうされていますか」と問いかけられました。「そうですね——。うちは毎日が敬老の日なんですけど——」ポロリと出てしまった私の答えに「ア——。ナルホドネ——」と、彼の何かわかったような、わからないような表情を夕食のあとふと思いついた灰かななつかしさに浸りました。

九月十五日が「敬老の日」として祝祭日に制定されてからもう半世紀も経つでしょうか、時は休みなく流れています。

わが日本は現在、全国民の20%に近い人達が「老い」の年代に在ります。

世界一の長寿国になりました。

人生80年時代から人生90年時代に近づいて来ています。

今感じますことは、「敬老の日」を定めずとも正に毎日が「係老」^{けいろ}の世の中に変わって来ているという事です。

超高齢でも逞ましく、又美しく活躍する方々の姿が「クローズアップ現代」で報道される一方、高齢者介護にかかわる難しい問題が問われつづけるなど、長寿社会の「光と影」を見せられます。

40歳を超えると誰もが「わが老いの時代」を考えさせられるのではないのでしょうか。

成長期20年、成熟期40年、老年期30年が今や日本人の「ライフサイクル」になっているからです。長くなった老年期を自由で豊かな稔りの時代ととらえ、多彩な夢への具体的な準備のこと、又、深い思索に立つ固有の人生観などが様々なところで語りはじめられる近頃です。

ここ「みぎわ村」では、開村以来。三十二年余になりました。

迎えては送る村の責任者（村長）の私も90歳へあと3年余という超高齢域を歩んでいます。住民の皆様と同じ世代として近親感も深まり、去ってゆかれた方々の百人百色のライフスタイルが私たちに多くの事を教えて下さることを夫々の感性で受け止めさせられています。

心に残る感動も沢山頂きました。

言わず語らずの思いやりが静かに育っています。励まし合い慰め合って仲良く誰も彼も、無論私も一生懸命生きているわが「みぎわ村」です。

皆様からの暖かい御声援にいつも力づけて頂きます。

ありがとうございます。

「H2A」が無事打ち上げに成功してよかったですネ。

老いた者たちは誰もそれぞれの家族、故郷、友達、そしてこの日本を深く愛しています。その平安と、繁栄を毎日祈っています。これが私たちに許されている唯一の大きな役割なのでしょう。

では、さわやかなよい秋をお楽しみ下さいませ。

いつもこの小さな便りをお読み下さる皆様の御健勝を祈りつつ。

かしこ 二〇〇一年九月二日



みぎわ会 だより

第128号 2001.10.1 発行

十月に

耐え難く感じました残暑が意外なほど長く引き上げ、きちんとさわやかな秋が訪れてまいりました。十月です。

朝夕の気温低下に体調異変を見せる方がボツボツ出ています。在園の皆さまには膝から下の保温に気をつけるよう注意しています。

この便りをお受け下さいます皆さま、お変わりございませんか。心地よい中秋をエンジョイなさっていますように。

私の九月は、或賞を受けた友人を仲間でお祝いしようと、涼しい六甲オリエンタルホテルを用い、震災復興なった神戸の美しい夜景を楽しむことからはじまりました。ところが、その夜半にあの忌まわしいアメリカでの「同時多発テロ事件」のニュースを見たのです。以来、全人類・地球レベルの不安と恐怖のニュースに心を奪われる日々が続いています。

人間が知恵を持つ程に「悪」の行為もまた、考えもしない恐ろしく残虐な方法をとるものだと知ります。創世の人アダムがエデンの園で神にそむき、禁断の「知恵の木の実」を採って食べた事、即ち神のようになしこくならない希求こそが人間の「原罪」であると説く聖書の記述を思わずには居れません。

さて、みぎわ会では、毎日が敬老の日ではありますが、九月は殊に敬老の色濃く忙しく過ぎてゆきました。そのさ中、十三日は県民局の監査日となりました。二年ぶりのことでしたが、小さな注意事項のみ

で無事終わりました。

四日には西脇市長寿番付では「東の横綱」となった「一〇三歳の小原トユさん」市長・市議会議長・市社協理事長・女性団体代表の皆様がお揃いで慶祝訪問してくださり、私たちも喜びを共にしました。小原さんは頭もしっかりしていて、可愛い姿でがんばっていて下さっています。

十五日の祝膳は、例年どおり調理部の心と技がいっぱい詰まった見事な松花堂風に仕上がり、皆様に満足と喜びで味わって頂きました。その午前には、これまた恒例の感謝式を行いました。各施設利用者の中で、「おしほりたたみ」「ゴミ袋作り」「食卓の片付け」「売店お手伝い」「習字指導」「鶏の世話」等々楽しくボラ活動に励んで下さる方々に、小さな感謝カードとほんのささやかなお品、そして介護部よりの感謝のことば等を差し上げる集いです。二十一名の方達でした。ありがとうございます。お元気でつづけて頂きますように。

午後はこれも恒例となっている「米寿・卒寿」のお祝いを、工事中でもあり一階食堂で清楚にテーブルセティングされた六卓でアットホームなパーティーの形で行いました。ご家族の参加も多く、共々長い人生行路を生き抜かれた方々それぞれの固有の御長寿を沁々と心をこめ静かにお祝いいました。卒寿十名・米寿八名でした。

この日、ご子息御夫妻には生まれ、暖かいお喜びファミリーの姿を見せてくださったSさんが、その六日後二十一日に永眠されました。あの日の薄化粧され、和服をきちんと装われたやさしいお顔そのままの、苦しみもなく、静かな天寿の完結は、お見事とでも言いたく、私たちにも慰めや励ましを

沢山残しての旅立ちでした。

十五・六日の両日は神戸で開かれた「第二十五回キリスト教高齢者福祉研修会」に園長・婦長・いずみ寮相談員と私の四名で参加いたしました。私にとっては大変なつかしく大事に考えてきた集まりなのですが、数年前まで毎年お逢いし、お交わり頂いてきました先輩の先生方が、今年はすべてお姿が見えず、ご召天と伺いました。先生方が人知れず祈りつつ刻まれた御足跡、あの時、この時のことを想い出し、つい瞼が熱くなっていました。夫々の御事業が若々しい方々に力強く引き継がれているご様子は大きな励みでもあり学びでもございました。

次ぐ二十七日は月例の「みぎわ会職員セミナー」第二三三回を行いました。テーマは「身だしなみ」です。先月の私の発題講義に対し約四十名が一分に要約した感想を述べるというスタイルで進みました。一人一人が本気でテーマを捕らえ、一生懸命に「自分の身だしなみ」を表現するのを聞き乍ら、その姿に「みぎわブランド」がキラキラするのが見え、私は幸せに感じていただきました。もう二十五年近くもつづけている大事な「時」です。

工事は順調に進んでいます。私はまたもや左ヒザを傷めて車椅子のお世話になっています。皆様と共に老いの衰えや淋しさを味わせていただいています。イタミの辛さは身に沁みますね。

長い便りになりましたこと、お許しくださいませ。

どうぞ、天高き秋、ご健康増進と共にお楽しみくださいませ。

かしこ 十月一日



会 ぎ だ よ り

第129号 2001.11.1 発行

コスモスの秋

十一月、晩秋です。なんと時の流れの早いことでしょうか。

皆様いかがお過ごしでしょうか、お伺い申し上げます。

今年は九月後半より季節は少し急ぎ足で秋に向かってきたように思われます。中秋より晩秋へはサラサラと流れてまいりました。空は美しく月も綺麗でした。地上では、コスモスが殊に美しかったように私は感じています。庭のあちこちにこぼれ咲く花も畑いっぱい群れ咲く花も、皆、冴え冴えと彩とりどりにやさしく風にゆれる姿を、ほんとに可愛く親しく、ほほえみ合う思いで眺めました。

地球人誰もが深い憂いと不安に陥ちこんでいますこの秋に、自然が送ってくれる慰めにみちたプレゼントではと思わせられました。

「コスモスとしか言ひよのなき色も」・・・後藤比奈夫「花くらべ」より

この辺りの木々の紅葉も日一日と美しくなり、まわりの山々はいつものようにオレンジに染まりはじめています。みぎわ園の工事は天候に恵まれ、予定どおり進んでいます。現在漸く10%余りの工程です。竣工まで全て無事、順調に運びますよう祈ります。毎月二回、工事についての協議を行っていただきます幸い十一月五日を待たずに暖房は入りました。相当むずかしく高価になるとのことですが、配電装置「キューピクル」も一時的にはダブル設置となり、「施設はひと時の停電もない状態」を希望ど

おり実現してもらったことも決まりました。

こうした工事に由る転室問題などいろいろ御不自由をかけていますが、どうぞよろしく御理解下さいませ。

次いでさらにむずかしい問題が起っています。それはみぎわ園内での「かいせん」症の流行です。従来も時々どこからともなく持ち込まれる厄介なものなのですが、この度は一挙に六名の方に発生してしまいました。現場では毎日手の込んだ対応を続けてまいりましたし、全館の滅菌消毒も業者に行わせるなどいたしました。この度、次の様な方針を立て、根絶対策を実施いたします。つきましては、何かとご迷惑もでてきますが、どうぞ主旨をご理解の上、皆様の御協力をお願い申し上げます。

みぎわ園かいせん対策

一、隔離 特定の部屋 ― B1・C1― を利用します。そのために転室していただく方も

あります。

二、入浴 マリア館内にかいせん専用浴室を新たに設置し、薬浴として二日に一回ずつ入浴・

ナース協力

三、滅菌（殺虫） 着衣・寝具、特に肌着類の嚴重殺菌・・・高温滅菌

四、薬品 従来用いていました「ムトウハップ浴・オイラックス軟膏」に加え専門医より受け

る軟膏塗布その他

五、介護者による媒介及び介護者への感染防止

エプロン・手袋・帽子・靴カバー使用及び介護時の着衣の高温滅菌

その他、掃除関係の用具の滅菌等

病源は僅か〇・二―〇・四ミリのヒゼンダニの寄生なのですが、三に関しては、諸文献による学習と、専門医のご指導及び直接治療も頂いています。できれば今年内に完全駆除をと願っています。この小動物が好んで高齢者、特に衰弱・痴呆の方に寄生するという性質が私たちの対応に多少の困難を加えています。が、全員協力―いずみ寮職員もパートタイム応援、新たなパート雇用など―全力を尽くしています。

ご面会の折なども、右事情ご賢察の上、どうぞよろしく御協力下さいませ。

では、残り少なくなりました新世紀の第一年を豊かに過ごして下さいますように。

かしこ

十一月五日
記



みぎわ会
だより

第130号 2001.12.1 発行

十二月 感謝と希望

十二月は一日から喜びと共にはじまりました。

皇太子御夫妻に待望のお子様（内親王）がご誕生されたのです。テレビの画面には国民老若男女の喜びの顔・顔、うれしい声・声の放映がつづいています。私も本当に「よかった!」とうれしく存じています。

そして、こうしたテレビ・ラジオ・新聞などマスメディアのくり返し、くり返す放送の中に、「日本というわが国」の姿を見せられ、久々に何かホッとする気持ちの安らぎを感じています。

気の重い、希望のないニュースばかりつづいた今年の後半でした。

皇室に一人のベビーが誕生されたことをこんなに喜び合える国民の素直な心の暖かさに力づけられます。

お健やかなご成長をお祈りいたします。

今年は走るように早くすぎてゆきました。新世紀の第一年もあと一ヶ月で終わります。地球社会はいろいろな暗く重い雲に覆われています。わが日本も言うまでもなく、その一員なのですが、そうした中で、ともあれ無事この師走の月まで守られてまいりましたことを皆様とご一緒に感謝し、夫々の希望を確かめながら新しい年に備えたいと思っています。

皆様にはいつもお心にかけて頂きましたことを改めて感謝申し上げます。

私共みぎわ会もいろいろな問題をかかえながらこの一年を一生懸命に励んでまいりました。

まず、工事は無事進行しています。青いテントにスッポリ包まれていました工事現場へ、今日はじめて案内して頂きました。ヘルメットをかぶることも工事用エレベーターに乗せていただくことも私には新しい体験です。監督のMさんが私の手をしっかりとつてくださいました。建物はコンクリートばかりですが、予定どおり骨格は出来上がっていました。あと四ヶ月で完成する第一期、西側棟です。ここが利用される方々にとって、心身共に快く楽しく生活して頂く安住の我が家になるのです。そうすることが私たちに与えられている責任であり、楽しくきびしい仕事なのです。

二階、三階からの眺望はとて素晴らしいものでした。間もなく眠りに入るまわりの山々には、まだオレンジに燃える紅葉が盛り上がり、静かな村のたたずまい、見えかくれつつ流れる野間川の光、視界の真ん中にしっかりと建っているいずみ・ハンナの姉妹施設、眺めていますと、感謝・希望が感動となつて体中に湧き上がりみちてまいりました。しつとりと暖かく気品ある建物になるでしょう。その中では安らぎと慰め、静かな喜びや明るい笑い声が生まれるケアが活き活きとゆたかに皆様にサビスされるみぎわ園が毎日創り出されてゆくのだと心の熱くなる想いでした。

先月号で御心配おかけしました「疥癬」は、マリヤ館に新設しました浴室、介・看の見事なチームプレイで早くも消滅いたしました。一昨日ご来診くださいました皮膚科専門の田中ロコからも完治の診断を頂きました。

バンザイ！

皆様ごくろう様でした。今後も新しい侵入をきびしくチェックし水際撃退を期してゆかねばと心得ています。

暗い時こそ希望を！と言われています。どうぞあと一ヶ月ご健勝にてこの一年をよき年となさってくださいますようお願いいたします。

私のヒザも大変良くして頂きました。痛みももうほんの僅かです。時々杖を忘れるありさまです。ありがとうございます。
ではまた新しい年に。

かしこ

十二月一日



みぎわ会
だより

第131号 2002.1.1 発行

寿正

本年もよろしくお祈り
申し上げます

二〇〇二年元旦

理事長
松尾周子
外一同



●社会福祉法人 みぎわ会

理事長兼医師 松尾周子

●特別養護老人ホーム

みぎわ園

施設長 荒木忠雄
副施設長 芹生哲也
事務長 白井好和
事務員 岸上幸代
生活相談部長 宇治川愛子
生活相談員 橋本京子
介護部長 神原かよ子
介護副部長 横山 學
介護部主任 村上陽子
介護部副主任 嶋本敏美
介護部副主任 石橋由美
介護部副主任 藤原世子
介護部副主任 藤井ゆう子
介護部副主任 谷口喜人
介護職員 飛田富生
介護職員 古家美喜
介護職員 村上由人利
介護職員 伊藤京子
介護職員 村上則子
介護職員 武部規子
介護職員 河合真弓
介護職員 鷹尾美穂
介護職員 吉村知美
介護職員 井上香里
介護職員 片岡八千香
介護職員 藤本美智子
介護職員 渋谷明日香
介護職員 原田初美
介護職員 直江英樹

介護職員 黒崎裕子
介護職員 伊奈邦子
介護職員 河合直彦
介護職員 鷹尾哲男
介護職員 西村由美子
介護職員 釜谷麻也子
介護職員 濱本美穂
介護職員 若井絵美
介護職員 岡本昌代
介護職員 須吾綾子
介護職員 國田亜由美
介護職員 吉田由紀子
介護職員 今中里奈
介護職員 近藤美和
介護職員 小谷恭子
介護職員 杉本あゆみ
介護職員 山本泰子
介護職員 平井進一
介護職員 山本道子
介護職員 石田圭二
介護職員 岩前重信
介護職員 日浦恵子
介護職員 芦田静代
介護職員 神戸二郎
介護職員 谷垣克彦
介護職員 佐野光子
介護職員 音田千代乃
介護職員 高瀬幸乃
介護職員 神崎さち子
介護職員 村上さよ子
介護職員 白井いさみ
介護職員 内橋一子
介護職員 藤原まさ子
介護職員 小林六美

●軽費老人ホームいずみ寮

施設長 的場佐智子
生活相談員 津瀬美智子
事務主任 木下勝広
事務員 小林由香
看護職員 阿江純子
介護主任 小林照美
介護職員 白井弥生
介護職員 多井富美子
介護職員 鐵 豊明
介護職員 加藤幸代
給食職員 荻野小夜子
給食職員 小谷由美子
給食職員 村井弘子
給食職員 岡本久乃

看護職員 絹川美智子
看護職員 諏訪美香
給食部長 内田純子
給食部主任 小林八須美
給食部副主任 藤原昌史
給食部副主任 小越孝子
給食職員 花田とし江
給食職員 森幸代子
給食職員 高橋妙子
給食職員 田中雪美
給食職員 石塚ひとみ

●みぎわ園診療所

看護助手 松尾満子
看護助手 鎌田裕美
居室支援部長 村上則男
居室支援主任 後藤早苗

●みぎわ園在宅介護支援センター！

居室介護支援事業所

●ケアハウス ハンナ館

生活相談員 川崎智子
介護職員 高瀬彰子

介護職員 西川友子
介護職員 岩本典雄
非常勤補助 竹谷正義

●デイサービスセンター

ナオミ館

生活相談主任 椎木雅信
看護職員 松原弓子
介護職員 岸本宏美
介護職員 高橋里子

社会福祉士 3名
介護支援専門員 7名
社会福祉士 12名
介護福祉士 24名

計102名



1年の が 来事



ボランティアグループ「エトワール」
しばざくら賞受賞(6月)

みぎわ園改築工事始まる



一期工事立ち上げ(10月)



兵庫県県民生活部長来訪(11月)



いずみ寮・ハンナ館 地域交流会「夕涼み会」(8月)



平成13年度 新任職員研修(3月)

200
おも
と



みぎわ園・お花見会(4月)



玄関 管理棟解体(7月)



ナオミ館 セ七夕祭り(7月)

「わたしの小さなたより」から

平成7年3月3日 発刊より抜粋

新しいおたより

(平成三年四月)

全く静かで動かないと感じるこの大地が、一時も休まず東から西へぐるぐるまわっている地球なの
だとは、みんな知っていることです。

神様が、おつくり下さった、ふしぎなありがたい自然です。そのいのちの中で、冬は静かに去りま
した。そしてまちがいなく、暖かい春がニコニコして訪れてきました。

何もかも、日に、日に変わり、新しくしていただいているのですね。

四月は私たちの世界では、新年度と定められています。「みぎわだより」も、新しい姿に変わるこ
とになりました。十何年もつづいてきた、暖かい、素朴な手書きのたよりでしたが、新年度から、「い
ずみだより」、「ナオミ館だより」と一つになって『みぎわ会だより』になります。

みぎわ会という、大きな一つの屋根の下にある三施設のニュースがみんないっしょにまとめられて、
みなさまに届けられます。二〇〇人以上の施設利用者、七〇人の職員、そしてみなさまの家族やふる
里の方々にも送ります。いづどこでどんなことがあったか。どういうプログラムがあるのか。こうい
う花が咲きましたよ、〇〇さんには、赤ちゃんが生まれましたよ。△△さんが新しく来られましたよ、
など、など、沢山のニュースが山盛りです。

毎日、三〇人の人に出逢い、話をすると思えないと言われます。おたがいに声を出して「こんにち
は」とか、もし名前を忘れていても「あなたどなた(誰)でしたかしら、お元気ですか?」とえんりよ

なく話し合いました。いつか、順々にみなさんのお顔や、名前も、誌面に登場するはずです。また、どんだんお声を寄せて下さい。すみから、すみまで、くり返し読んで下さい。そのうちこの「たより」が、みんなの心と生活をつなぐやさしいそよ風になり、いろいろの声をサラサラ流してゆく小川の水になるでしょう。

『みぎわ会だより』の成長を心から祈っています。

もいろいろの羽を帽子にイースター 青 邨

信じられますか

(平成三年八月)

みなさまが——施設利用、ナオミ館利用の方々も、職員も——幸いこの猛暑を、しっかりと乗り切って
いて下さいます。

うれしく、ありがたいことだと感謝いたします。でもお盆が過ぎますと、ぼつぼつ夏の疲れが出て
まいります。今から、しっかり栄養を摂り、休息と運動をバランスよく生活にとり入れて、くれぐれ
も健康にお過ごし下さいませ。

さて、先頃、次のような文章に出会いました。

「アメリカのギャラップによれば、一九七九年の調査ではアメリカ人が信頼している機関は、一位・教会、二位・銀行、三位・軍、四位・学校、五位・新聞だった。一九八八年の調査になると、変わらないのは、一位・教会で、二位・軍、三位・最高裁、四位・学校、五位・銀行となっている。アメリカ人には『信頼できるもの』がある。

信じられる、頼れる、すぐれる、だからそのために献身してもいい、そういうものがアメリカにはたしかに存在する」(千葉大学K教授)

これは、現代国際社会の中の日本を語る文の一部です。

日本の社会には「信頼できる」ところや人がだんだん少なくなってきました。淋しく不安です。

小さなみぎわ会という社会にも、信じられる、頼れる、すぐれるものがほしいです。必要なのです。幸いにも、まず私たちは、神を信じています。それ故に、互いに隣人として信じ合い、すがり合い、またつくし合わなければ、安心して生きてはゆけないのだと、少しずつわかってまいりました。

信じ合おうという気持ち、静かに積み重なってきているのがわかります。

「信じ合える、頼り合える世界がここにはある。それが私たちの生きてゆける力になるのだ」と、私はこの文を読んでから、考えさせていただいています。

*ギャラップ：アメリカで最も権威のある世論研究所

朝毎に新たなり

(平成三年十一月)

一〇月はフリーパス出来るのではと、ひそかに期待して月末の日々を教えていましたところ、二八日朝、Nさんが亡くなりました。全く予想もしなかったことです。音もなく散り落ちる一枚の木の葉のような「死」でした。

一〇日前に診たNさんは、胸のあたりに少し肉付きさされ、いつにもなく元気そうでした。『ずいぶん元氣になられたわネ。これからは少しずつ起座おきざている時間を長くしましょうよ、ネ!! あなた一番若いよ、ネ』と私は語りかけました。いつもは、やや暗い表情で、低く、か細い声しか出さないNさんは、この時はハハハ……と声を立てて笑い、うなずかれました。その目に光が見えたとは私は感じました。とてもうれしい気持ちにさせていただきました。

一人暮らしだったNさんが、二年前、脳梗塞で倒れているのを、やっと二日経って発見されたという記録があります。どんなに辛く淋しかったことでしょうと切ない思いが、片マヒ、寝たきりの彼女に接する時、いつも心をよぎるのでした。まだ昭和生まれのNさんに、少しでも活力ある日々を願わずにおれませんでした。入所後一年半が経ち、施設のケアや抗うつ剤が、やっと白い歯を見せてハハ……と笑う日に至らせた……と思ったのですが……。

先日、「生きる」とか「いのち」ということには問題意識がからんで、なんとなく使いたくない気持ちだと仰った方があります。それは、近頃の少年たちが一寸したことにも「生命かける!!」と口

走ることへの怖れにも似たことからだと聞かされました。幼い、若い人たちの世界のことです。

毎日、老いた人たちばかりと暮らしていて、「生きる」ことの重さ、「いのち」の奇しさをずしりと強く感じている私は、改めて自分の歩んでいる世界を見、考えてしまいました。

長く、遠く、きびしい道を力一パイ歩み抜いてきた老人たちの、すっかり弱々しくなってしまう、小さく心細くなった今日の生命を、大事に大事に思う私たちの毎日です。

二〇分前、いつものように朝食を摂ったNさんのいのちが、誰にも気付かれず、フツと消え去ったことを知り、その安らかな美しい顔を見る時、私たちは皆、「今日のいのち」が人の力を超えたところで定められ、また支えられていることを思わずにはおれません。勿体ないと言えбайいのか。

生命の尊さは、畏れにも似た、深い、しんとした想いの中へ私たちを導いてゆきます。

『われ、この事を心に思い起こせり。この故に望みをいだくなり。われらのなおほろびざるは、エホバ（神）の慈愛により、その憐憫の尽きざるによる。これは朝ごとに新たなり』

エレミア哀歌 三章二一―二三節

『手』のはなし

(平成四年五月)

手があがる、手を打つ、やり手、手の内、奥の手などなど「手」はずいぶんよく使われることばです。手は力を表します。心を語ります。そしてその「人」をも語るコトバになるものです。

みぎわ教会の私の席の向こうに「聖ダミエンの手」というブロンズ像が置かれています。

船越保武先生(芸大教授)の名作「聖ダミエン」の全身像——等身大——から、そのたれ下がった両手を手首のところから切って上向きに向かい合わせた「部分像」です。

一〇〇年余り昔、アメリカ大陸から沢山のハンセン病患者がハワイ群島の中の一つ、モロカイ島にすてられました。

ベルギー出身の若い神父ダミエンは、神の救いの福音と愛と慰めを携えて、この地獄化した孤島に渡りました。病者と寝食を共にして、神の愛を伝える間に、業病に感染し、遂に島の土に病者といっしょに葬られました。

ベルギー国王は、数年後ダミエン神父のことを聞き、軍艦をこの島にさし向け、神父の墓を展き、遺体は祖国へ迎えられました。その柩は国旗で覆われ、儀仗兵に守られ、英雄の凱旋とされたということです。

ブロンズの両手はハンセン病特有の神経マヒの形です。指は激しい労働で節くれ立っています。僅か三八歳で世を去った神父にかかわる、重く、深い物語を日曜日毎にその手は私に語りかけてまいります。

ころ

河野 進（癲病院医師 詩人）

心は あるか ないか わからない

ことばや 行いに あらわさなくては

祈りや 信仰もまた

*聖ダミエンの等身像は神戸兵庫県立近代美術館に展示されている。

『五五年の友情』

（平成四年八月）

今月は私の全く個人的なことを書きます。おゆるし下さい。

九一年十一月、東邦大学卒業五五周年記念クラス会の案内を受けました。翌年五月とのことで「元気でいればきつとまいます」と返信したものでしたが、幸い元気で参加出来ました。

海に近い、横浜のホテルへ日本中から四二名のクラスメートが集まりました。全級友の三分の一です。皆元気でした。七六歳―七八歳の老女医たちの集まりは、どういう景色かしらと何となく楽しい期待を込めて、久々に伊丹↓羽田のコースをとりました。その往復にも楽しさが一パイでした。五年

前、五〇周年の集いを持ってから一三名のメンバーが亡くなったことも知りました。しんとする気持ちでした。卒業早々に都落ちした私には、共通の教室や、医局や、教授等の話題もなく、いつも一人だナと思うのですが、

「筑紫ゆ 陸奥ゆ 集い来し 乙女子若く 眉清し」

という古風な校歌そのものだった級友が、それぞれ五五年を生き抜いてきた道程の重さを黙って考えることが出来ました。けれど誰も彼もがあっけらかんと、学生時代とおんなじなのには驚いてしまいました。ただ一人仲よくしていたSさんと、いつものようにいろいろ話しました。彼女は、昔のことをいろいろ話してくれました。以下のことは、全部私が忘れてしまったり、知らなかったことでしたが、彼女の友情が私に注ぎ込まれる思いでした。

一、「ネ、松尾さん。あなたネ、グリーンピースのごはん作って私を招いてくれたでしょ。私はごはんも炊けない人間だったものネ」私は自炊生活でした。

二、「二・二六事件の時よ、覚えてる。あなた、お母さんに長い手紙を書いたのよね。それを私に読ませてくれたのよ……」全く記憶にありません。

三、「戦争の終わり頃よ。彼は出征していたし、私一人ぼっちよ。モト子（当時四歳）にね、空襲で、もしひとりぼっちになったら、ここへゆくのよって着物の胸に松尾さんの住所と名前を書いて縫いつけていたのよ……」すごい告白でした。涙が出るような。モト子さんは立派なドクターになっています。

四、「私ってずいぶんのん気に生きてきたのね。昔あなたにもらった讚美歌にね『父がわれを愛し

給いし如く、我も汝を愛したり。我が愛に居れ』ってあなたが書いてくれたでしょ。私はクリスチャンじゃないけれど『わが愛に居れ』ってことばにとっても安心出来たのよ……」等々。

埼玉県の名家に生まれ育った彼女のいろいろなことを、私はよく知っていますし、私が貧乏な学生生活をしていることや、私の家族のこともよく知っていました。毎晩毎晩、疲れることもなく話し合った二〇代前半の学生の頃が蘇ってきた一時でした。

鶴 渡 る

(平成四年十一月)

「大空に はるか道あり 鶴渡る」

数年前、先生にもほめていただき、自分も好きだと思う一句です。が、本号は、道なき闇路を右往左往するに似た一ヶ月のご報告をいたします。

九月二二日から北陸に向かいました。二三日、新潟県長岡市の壮大な施設を見学し、二四日から三日間、富士山で開かれた「全国老人福祉施設大会」に出席。二七日には、村井、内橋両理事と大西設計士の三方を伴った横山副寮長を富岡市で迎え、二八日、富山県の「ケアポート庄川」と福井県の「ガーデンハイツ春江」という新しい施設を五人で視察してまいりました。

一〇月一日、二日は、東京で全社協主催の「社会福祉トップセミナー」に出席。五日、兵庫県社協へ。九日は大阪泊、これはみぎわ教会の新しい進展について、川崎牧師と面談のため。一二日より四日は名古屋へ、「第一二回社会福祉施設経営協全国大会」に出席。一三、三日に亘り千葉・浦安へ、「第三回全国女性施設長フォーラム」世話人会のため。二四日は元寮母吉田明美さんの結婚式。二七日から二九日まで、兵庫県遺族会主催の沖縄慰霊巡拝団に参加。

この間には、週二回の外来診療。県立教育研修所より三七名の研修受け入れ講話、案内。二〇日、ある女性団体に招かれ講演。二一日、兵庫県福祉部長に陳情のため上県、懇談二時間。月例の施設内研修「みぎわ会セミナー」を二六日に組み込んで、漸く一〇月が終わりました。

いくつかの施設見学の中では、ここ数年内に果たすべきみぎわ園改築への様々なヴィジョンや厚い壁のことなどが頭と心の中をめぐりました。三つの大きな研修会では、老人福祉にかかわる中央の制度、政策の流れの激しさと速さを、また社会全般の福祉に向かう意識展開と湧出の姿、更に企業界が福祉サービスの進出しはじめた大きなうねりを知らされました。潮のようにうち寄せる情報の波にもまれながら、二〇数年「何か」にこだわりつづけてみぎわ園を営んだ自分が、固陋頑迷そのものと見えてきたり、大切に思いつづけてきた「何か」が、やはり最上至高なのだと、六七名の孜々^{しし}としかも嬉々と励む職員に支えられ、一日一日は無事に過ぎてゆきました。一〇月一三日は七八歳の誕生日でありました。この日、名古屋は雨になりました。暗い見知らぬ夜の町を傘も持たずに歩きました。ゆくてを見定めることが出来ない気持ちでした。

早十一月になりました。心を静めて見れば、翼を張り、その翼を連ねて大空にしかと道を見定めて渡り来る鶴に似た、迷いなく、美しく、気品あるみぎわ会が、今日も力強く飛翔をつづけていることが、夢ではない現実なのだと思われ、力づけられる想いです。

一　　声

（平成五年三月）

久々に東京へ出ました。私にとり少々責任のある、緊張の要る集まりを千葉の浦安で持ちました。二泊三日のあとの重い疲れに、一夜東京で休息したいというのが本音でした。長い風邪が抜け切れないう体調への不安から、満子を誘うことになりました。翌朝はすばらしい好天でした。暖かい冬日を浴びながら、二人で日比谷公園をゆっくり散歩しました。

学生時代に母校主催の「日比谷の夕べ」というチャリティーの集いで、はじめて日比谷公会堂へ来たことを思い出しました。六〇年も昔のことです。日比谷公会堂は赤レンガの気品ある建物で、堂々とした威容を仰ぎ見たものでした。が、今は林立する超高層ビルの谷間にひっそりとその古風な姿を見せていました。

午後は上野にゆき、「上野の森美術館」で「MOMA」の展覧会を見、つづいて「国立西洋美術館」でなつかしい「松方コレクション」をゆっくり鑑賞いたしました。

上野公園は広く、沢山の人たちが幸せそうに楽しんでいました。巨木群も今は冬木立です。櫟の梢が大空に細かくからんでいるのを美しいと思いました。

帰路の東京駅でのことです。地下のコインロッカーへ荷物を取りに満子は降りてゆきました。私は長い階段の上で、床に腰を下ろして待っていました。まだラッシュ前の四時頃です。ポンポンと階段を下りはじめた一人の紳士がふと足を止め、私に「大丈夫ですか」と声をかけて下さるのです。「ありがとうございます。大丈夫です」と私はすぐに申しました。

いつか、マザーテレサが訪日された折、東京の雑踏の片隅で、倒れ伏している浮浪者を見て「何故誰もあの方を助けないのですか」と問われたと聞いたことがあります。他人のことなど目にも心にも止めずに流れている大都会の雑踏があります。今まで、私も東京へ行けばその流れに呑み込まれていました。が、群衆の中から、階段にうずくまっている白髪の老婆に「大丈夫ですか」と問いかけて下さった一声には、言いようもない暖かい心配りが流れ出ていました。

この体験は、私のこの小さな旅を全く新しいものに変えました。あの一声は、まだ私の心の中でキラ輝いて、沢山のことを考えさせているのです。

いよいよ新年度に入ります。みぎわ会を心にかけて下さるみなさまに、深く感謝し、ご多幸を祈ります。私たちにもまた、新しい希望と勇気をいただいて、五年度へ歩み出したいと願っています。

春とこつとば

(平成五年四月)

一、春

今年は少し春がおそいと感じていましたが、二日程、暖かい日が訪れると、木蓮林の下の水仙が黄色に咲き出しました。毎年、地面を覆う黄色が広がってゆきます。

黄は「幸せ」の色だと言われています。いよいよ平成五年度に入りました。入所のみなさまの、職員のみなさまの幸せを祈らずにはおれません。そして、みぎわ会という私たちの営みにも「幸せ」をいただきたいと祈ります。

多事多難の波にもまれながらも、目標と使命を見失わず、忍耐強く一步一步たしかな歩みを積み重ねてゆける「幸せな一年」を。

二、ことば

Kさんが三月二〇日、病院で八七歳の天寿を全うされました。重い腎不全で、私たちでは対応出来ず入院していただきまして一ヶ月余りです。Kさんは、息子さんとの二人暮らしの中から痴呆がすみ、入所されました。二年の在園でした。入所間もない一日、痴呆と膝の障害のため、タタミの個室に居られるKさんに、面会に来られた息子さんが、老いたお母さんをかき抱いて、いっしょに寝ていらつしゃると聞きました。息子さんは生来の聴力障害で、補聴器をつけていらつしゃいますが、ことばは少し不自由です。在園中、仕事がお休みの日には、大抵お母さんをお家へ連れて帰られました。

一、二泊とは言え、中年単身の息子さんが、徘徊もあり、おしめも要る痴呆のお母さんをケアされることは、どうかと少し気にかかるところでもありました。外泊から帰園される時、Kさんはだんだん疲れが見られるようになり、昨秋来、症状が悪化してゆきました。が、気分のよい時はにこにこしている赤ちゃんでした。

お葬式を終えて翌日、息子さんはきちんと三つ揃いにネクタイを締めて来園されました。「お淋しいでしょう。でもよく親孝行なさいましたネ。お母さんはきつと満足してゆかれたでしょうね」と申しますと、彼は「いいえ、私がいくらがんばっても、みぎわ園にはかないません。病院も、どこも、みぎわ園にはかないません。母がここでお世話になっていた二年間は、母にも私にも一番幸せな時でした。病院で母の手を握って私は、もう一度みぎわ園に帰れるようにして下さい！ と神様に祈りました。……ほんとにありがとうございました」

少し泪ぐみながら、トットツと語られる彼の『ことば』は、私たちの胸にしみるものでした。野に咲く水仙の黄色のように、私たちに「幸せ」を与えることばでした。

育　つ

(平成五年五月)

風薫る、風光る、など季語も美しく活力に溢れる五月になりました。楽しくお過ごしでしょうか。

去る四月二日、「ルデヤ館」の竣工式を行いました。みなさまのご期待、お祈り、暖かい祝福ありがとうございました。しつとりと重みがあり、気品ある建物が出来上がりました。三階のデイルームが毎日みなさまの静かな語らいや、ほほえみや、明るい笑顔や、時にはうた声がみちる楽しい場となるには……。一階の食堂もまた、ゆつくり楽しく今日のいのちを味わいながらお食事を摂っていただく場とするには……。などなど、私たちは新しい課題を前にして緊張し、いろいろなプランや夢を積み上げています。入所のみなさま、ボランティアのみなさま、そして地域のみなさまのご協力をお願いいたします。

先日、あるお客様の求めで、お送りしようと「いずみ寮十年誌」を取り出しました。表紙から写真とついページを繰り、読みはじめ、とうとう二時間近く夢中で読んでしまいました。この一冊の本の語る一つの施設の一〇年の歴史は、私自身その過程の中心にあったのですが、また新しい感動に心を熱くさせられてしまいました。

「パウロは播き、アロンは水注げり、されど育て給うは神なり」と、聖書は福音宣教について語っています。

発想から実現までの道も、施設の体形が出来上がってから、そこが利用者たちの「わが家」「ふる里」

になる時も、遠く、長い、むつかしい行程です。夢と希望、挫折と失望、再び夢、の大波小波にほんろうされる日々の連続です。でも一〇年という道標に辿りつき、ふとふり返ってみると、力強い「育ち」を見せていただきます。涙を播き、汗を流し、人知れずうめく祈りを、神は「成育」に実らせて下さるのですね。

ルデヤ館も育てていただきました。育てられるうめきの中で、私たちもまた育てていただき、成長させていただくことを信じましょう。これだから苦しむことも楽しいのだと、またしても考えてしまいます。

過る日、他の用でみぎわ会の二五年の流れを大ざっぱながらにまとめてみました。ここには明らかに神様の大きな愛と力を知らせられます。感謝を込めて付記いたします。

◇みぎわ会二五年の流れ（平成五年四月）

一九六八年 社会福祉法人みぎわ会設立

一九六九年 特別養護老人ホームみぎわ園創立開園

定員五〇名、兵庫県下民間立第一号特養となる。

一九七二年 増床。定員九〇名となる。

一九七五年 みぎわ園診療所開設。（松尾医院閉鎖）

一九七八年 三号館増築。定員一〇〇名となる。

二階にラウンジ開設。だんらん交流、楽しみの場となる。

一九八一年 軽費老人ホームいずみ寮併設。定員五〇名。

一九八三年 定員一一〇名となる。老健法発令を機に。

一九八四年 兵庫県の指定により、重度痴呆性老人ショートステイ棟として四号館増築。定員四名、満床活用中。

一九八五年 地域交流等、多目的室として五号館増築。

一九八八年 西脇市の委託を受けデイサービス事業開始。

(B型) ナオミ館として市民多数に利用されている。

一九八九年 新館開設。一階二〇人増員。定員一三〇名となる。

二階 診療所。

一九九二年 ルデヤ館増築着手。国の寝たきりゼロ対策による拡張事業。

一階 食堂 一二〇名利用可能。

二階 ショートステイ室一六床。二〇床となる。

三階 デイルーム ベッドを離れて生活するために。

一九九三年四月 竣工

赤い羽根

(平成五年十月)

西脇市社協から、一〇月一日午前一〇時三〇分より一時間、「赤い羽根」の街頭募金に参加するようにとの案内をいただきました。

毎年、一〇月、あちこちで「お願いします。お願いします」の放列に出逢う時の微妙な心のゆれを思い出しました。が、募金側に立つことは、私にとってははじめての体験です。新しいことへ挑戦出来る小さなときめきに似た緊張感を持って指定の場所へまいりました。

一〇月一日の空は、高く、青く、正に爽やかな秋晴れです。首に募金箱、左腕に黄色い腕章、そして赤い羽根が生きているようにフワフワ並んでいるケースをいただき、出陣となりました。スーパーマルエーに向かう方もありましたが、私はさくら銀行を目ざされるUさんといっしょにゆき、通りに面したドアの側に立ちました。銀行へは沢山の方が出入りされます。

赤い羽根をつまんで差し出している私などには全く無関心な人、一寸見られるとツと目を外して忙しく去る人、何故かていねいに会釈をして下さって通り過ぎる人……。秋の暖かい日差しを浴びながら、私はこの時を楽しんでいました。

不意に、二年前オーストリアの古都ザルツブルグの大聖堂前の広場が心に浮かんできました。民族衣装の可愛い十数人の少年少女たちが、その広場に入って来ました。その中の二人の少女が広場の中央に立ちました。一人は新聞紙半面大のプラカードを胸の前に掲げています。もう一人はお盆のよう

な「ざる」を胸のあたりに持つて黙つて並んで立っています。私は近寄つてプラカードを読みました。「子どもたちから子どもたちへ。白血病を病む仲間のために」と記されていました。二人のうしろでは子どもたちが、素朴なフォークダンスを演じています。忽ち人垣が出来ました。誰もが少女のお盆へ紙幣やコインを無造作に置いています。道ゆく人たちは皆一寸足を止めると忘れものを思い出したように、さつさと人垣をかき分けて少女に近づき、当たり前のようにお金を入れてゆくのです。見る見る少女の「ざる」はペーパーが山盛りになつてゆきました。旅人の私はこの光景を眺めながら、自国での共同募金の「お願いします」風景を思い出していました。

ぱんやり想い出の中に立っている私を、銀行へ来ていたはずみ寮のSさんが見つけ「まあ先生！」と出て来て、真新しい千円札を差し出して下さいました。思わず「ありがとうございます」と言つてしまい、第一号の赤い羽根を渡しました。丁度、昔よく子どもさんを診ていた日婦人が来られ、また千円入れて下さいました。二、三分昔話はずみました。そして再び無為に立ちつづける十数分が過ぎました。皆忙しい人ばかりのようです。

橋を渡れば私の親しい美容院「M」さんがあります。橋を渡つてあのドアを開ければいいのだとは思いつきました。少し暑く感じはじめた秋日を浴びながら橋を渡つてゆきました。ドアを開けてニコツと笑うだけでよかったのです。数枚の千円札と大きい五百円、小さな百円貨が私の箱に押し込まれるのです。びっくりしている私に「お客様のチップなどを積み立てていたのですよ」とMさんは大きな封筒を空にして下さいました。

ザルツブルグの人たちと同じやり方なんだと感じました。私も気前よく沢山の羽根を引き抜いて渡しました。来店のお客様もスタッフのみなさんも、コットンコットンと大きいコインを入れて下さいました。

これから一ヶ月、日本列島に生まれる沢山の物語は赤い羽根だけが知っているのだと思いました。

みぎわ園診療所のこと

(平成五年十一月)

「先生、腰がいうまんねん、歩きにくくなりました。もつとよう歩けよったんでつけどねえ」「そう、腰いた困りますね。でも長生きしていると背骨が少しずつきてね、腰いたが出たり、歩きにくくなったりするんですよ。〇〇さん。それでもね、あなたはまだ杖なしで歩いて、よっぽどいい方よ。うーんと八五か、〇〇さん。八五年も使ったもんね。お歳から言うたらうんと上等よ」「え？私もう八五でつか、まあ！ 私なあ、私年づおやさかい、みんなより一つ若いんでっせ」

みぎわ園診療所では、こういう会話がくり返されます。みぎわ園入所の一三〇名の診察は、プロゲラムを立てていつもくり返しています。なかなかの大仕事です。部屋から診療所への往復、着脱衣、問いかけにも説明にも大声が必要です。一日一二、三名がリミットです。

私が居室回診しましても、私が誰か、何をされているのかわからない方が沢山いらっしゃいます。

が、診療所へ運ばれて、白衣を着けた私が聴診器を持ち、診察室風景の中に立っていますと、相当痴呆のすすんだ方でも、自分は今お医者さんのところへ来ているのだとわかれるのでしょうか、表情が変わります。車椅子からよいしょとベッドへ移したり、下肢を圧したりしても抵抗がありません。

「〇〇さん、私よ、私わかります？」と問いかけますと、思いもかけず「松尾せんせ」とポロツとことばが出るのはうれしいことの一つです。

別に毎週月、水の午前は外来診療をしています。長年おなじみの患者さんが友情を持ってきて下さいます。いずみ寮のみなさんの中には早々と診察券を入れに来たりして下さって、大はやりのお医者さんになったような気分を味わせて下さいます。外来は殆ど常連の患者さんなので、おしゃべりが先行して楽しいラウンジのように時が過ぎます。「医者も姥、患者さんも姥、さしずめ姥診療所というところね」と、近頃田辺聖子さんの「姥ものがたり」に魅かれている私が申しますと、「そやけど先生、元氣しとって下さいよ、私の死ぬまでお願いしまっせ」と励まして下さいます。

先日、兵庫県老年研究会の秋季研修会が神戸国際交流会館で開かれ、出席しました。富山医科大学の辻陽雄教授の講演を伺いました。「高齢者の足、腰の疾病から」と題し、脊椎骨と筋肉の老化について面白く話して下さいました。先生の診察室には、毎日山のような来患だそうです。が、先生は注射や薬は僅かで、患者と話し合うことを主としていると仰いました。「インフォームド・コンセント」「説明と理解」の中で、イタイ、イタイが、イタクナイ、イタクナイに変わってゆくという、正に心ゆたかな医療のあり方のお話でした。

話し合いの中で、という点ではみぎわ園診療所も少し似ています。人が人の疼みを和らげるというのはむづかしく、素晴らしい仕事です。それには最も大切なものとして人間関係がある、先生は、人間をジンカンと読まれました。そしてそのきずなは愛である、と結ばれたのです。立派な講義だと感じました。

道 二 題

(平成五年十二月)

一、かえり道

みぎわ園新館には小さな食堂があります。南北に走る玄関前の広い道と、東西に長く、いずみ寮まで届く道が交わる角に面しています。北面は広い庭園とはるかな山脈が、西側はすぐ道を経て雑木林が見渡せる大きな窓には、一寸しゃれたデザインフェンスをつけています。内側のカーテンもやさしくきれいな彩りです。この曲がり角は私の好きな場所の一つになっています。小さな（一〇畳位）食堂は四季を通じて二二―二四度に保たれており、さし入る日光もはげしさのないやわらかい明るさであるせいか、窓に添った出窓風の棚は洋蘭の生育のなかなかいい条件となっているようです。一度花の終わったコチヨウラン、デンドロビウム等の鉢がいつの間にか沢山並びました。この窓辺でこうしたむづかしい花々が二度目の花をつけてくれるからです。

さて、晩秋から冬への短日になると、私の退出時間には外は殆どまっ暗です。わが家へは五〇m余の通勤距離ですが、玄関を出て暗いＴ字路を曲がる時、右側のこの食堂はいつも明かるく灯っています。檜田の卓を囲んで数名の方々の楽しそうな夕食の団欒が見えます。テレビも映っています。これから一人自宅の玄関の扉にキイを差し込んで、人気のないわが家へ帰っている自分を、淋しいなあと感じてしまうのは、私がひどく疲れている時のことです。「いいなあ…」という一寸したうらやましさが、「いい景色だこと…」という大きな喜び。この両面の想いがいつも同時に私の心に拡がってきて、今日一日の感謝になるのです。

数日前新館の住人Sさん、Fさん、Yさんたちといっしょにわが家でお茶を飲みました。話し合っている中で、明るい室内からは暗い道を歩いている私の姿は見えないのだと考えていた私に、みなさんが「いつも先生の帰られる姿を見えていますのよ」と仰り、声の届かないのが残念です、とのこと。私は大変うれしい（内に一寸恥ずかしい思いを持ちながら）気持ちになりました。

それ以来、暗い、寒いかえり道から、明るく暖かそうな部屋へ手を振ります。みなさんもニコニコ手を振って下さいます。楽しいかえり道となりました。

二、朝の道

寒い日が続いています。出勤の道のほんの短い上り坂が凍てついてすべりそうになる朝もあります。空は冬の淡く深く透明な青です。木蓮林の中の椿は沢山蕾がつき、小さく口紅を見せています。まん前の新館の白い姿が、今日一日のために私の力を引き出してくれる感じです。朝はまっ直ぐ向かって

歩きますので、食堂は視野に止まらないのです。表玄関のきれいに造られたピラミッド型のヒマラヤの穂先は、高く高く並んで朝の光を受けています。新しい一日に向かう朝の道もステキです。

新年度を迎えて

(平成六年四月)

新年度を迎えました。みなさまいかがお過ごしですか。みなさまのご平安を祈りつつこの便りを書いています。

幸せの色と言われる黄色の水仙が、この辺りあちこちに沢山咲きはじめました。今日は大阪城公園の桜の開花が報らされました。

みぎわ会にも新しい春が訪れました。前月号でお知らせいたしましたように、三月末で私はみぎわ園施設長を辞任いたしました。開設以来二五年間に「みぎわ園」松尾周子」というイメージがそここに定着してしまっていましたので、退くこともなかなかむづかしいことだと知らされましたが、文字通り円満退職させていただきました。大変ありがたい、また安らかな気持ちに浸らせていただいています。

後継者として、みぎわ園施設長には横山猛（四四歳）、いずみ寮寮長に内田純子（五四歳）、全施設を総括する事務長には、長い熟練経験者である丸山智枝子（五七歳）を任命いたしました。以下全職

員七六名は、それぞれの持場にそれぞれ意欲を持ち、責任を負って着任いたしました。すべて坦々と運び、さらさら流れるように円滑に経過いたしました。既に数年来私にとりましては重い課題として考えに考え、理事会にもくり返しご相談してまいりました結果でありますので、誠にうれしく、改めてこの組織を形成する一人一人に感謝と期待を熱くしています。

近年は地球レベルで変革が相次いでいます。血生臭い手段や、陰湿な争いも繰り返し報ぜられています。小さなみぎわ会ではありますが、開設以来の最大の変わり目の時です。皆で培ってきた大切なものを失うことなく、また変える必要のあることには勇気と知恵を以ってとりくんでいってほしいと祈る私です。

近頃になって、今までいつも大切にしてきた「入所老人たちを大事にしよう」ということと、「入所のみなさんを大事に思おう」ということとの違いに気付いてきました。「思い」はなくても「すること」は出来ると知りました。「することの以前にはいつも「思う」ことが大切なのだと思いついて、何か深く息を吸い込む気分になりました。

「する」という「形」の中心には「心——思想」が生き生きと、きちつとつまれている施設サービスを生み出してゆけるみぎわ会になりますように。これが新年度を歩み出す今日の祈りでございます。

いずみ寮のこと

(平成六年五月)

「えにしだの黄にむせびたる五月かな 万太郎」

こういう幸せ一パイの五月であれと祈りつつお便りいたします。今月はいずみ寮のことをお知らせすることにいたしました。

いずみ寮は昭和五十六年四月、「軽費老人ホームA型」として定員五〇名で開設しました。A型というのは「自炊生活」を定められた「B型」に対して、「給食」のある施設「A型」という意味であります。

いずみ寮入寮の要件としては、

一、日常生活の自主、自立が可能な六〇歳以上の方（夫婦の場合は、いずれか一方が六〇歳以上）
二、毎月法的に定められた利用料の支弁が可能な方という二項目があります。

利用料は、生活費（食費、光熱水費等、約四九、〇〇〇円（一律））、と事務費（人権費、管理費一〇、〇〇〇円）約一〇三、〇〇〇円）からなり、最低月額約五九、〇〇〇円、最高約一五二、〇〇〇円です。（平成六年四月現在）。この事務費負担額は、各自の収入（主として年金）に応じ、一二の階層が法的に定められており、その差額が公費として補助されます。また年間四、五〇〇万もの高額収入のある方の利用は、福祉施設としては困難とされています。

施設は六畳の個室に三食と入浴等のサービスがついています。「小さなバルコニーに洗濯物などを

干してはいけません、花だけを置いて下さい」という一条の他は全く自由な自主、自立、自治の生活であります。入寮につきましては希望者と理事長の契約で成立します。二名の身元保証人が必要です。開設以来一三年経ち、入寮のみなさまも高齢化され、平均八二歳となりました。しかしみなさまは出来る限りいずみ寮で暮らしたい、いずみ寮大好き、ということとで「自立」については強い意識を持って生活していらつしゃいます。殊に自分の健康管理と、寮内での人間関係に一生懸命の努力をされている様子里に、いつも老いを生きる人たちのすばらしさを感じています。ある時期、こういう緊張感が寮の雰囲気を何か険しいもののように感じさせられたことがあります。みなさまに、のびのびと安らかな朝夕を過ごしていただきたいと願っていた私にとつても、辛く気にかかることでした。が、幸いみなさまは賢くこのたたかいをクリアして下さり、今はとても和やかな、明るい、自主と和合のバランスゆたかな寮風が成熟してまいりました。

毎月自治会「やよい会」の例会には、当月のお誕生祝いが兼ねて行なわれます。毎月一回そこでお逢いするみなさまの表情はそれぞれにきれいです。殊にお誕生月の方々のびたりと決まった装いと身だしなみにハツとさせられるのです。みなさんステキです。長寿のよろこびが溢れる美しさには、私自身も深い感銘を受け、心よりうれしくお祝い申し上げています。

俳句、手芸、ソロバン、コーラス、大正琴、カラオケ、お茶等沢山のグループ活動があります。アウトドアの行事も盛んです。またグループ毎の集まりや旅行、個人的な趣味活動等、時には羨ましいと感じてしまいます。みなさんの大好きな園芸によって、各部屋のバルコニーも南庭園も、雑木林東

側の空地もすべて花、花、花です。

地域交流も定着、みぎわ園ラウンジへのボランティア、みぎわ園園生との暖かい交わり等、お一人のQOLの充実を見せられます。私にはとてもうれしいずみ寮です。

この二万㎡そこそこのみぎわ会の地が特養、軽費、デイセンター、診療所、また教会と、一体的に流れている現在です。更にもっと異なるニーズにも応えられる福祉エリアへと形成してゆき、老いた方々にとって文字通り「憩いの汀」になれるように、それが私たちに与えられている夢でございます。

猛暑ゆく

(平成六年九月)

怖ろしいまでに暑い暑い八月でしたが、お元気にお過ごしになりましたでしょうか。私たちも幸い神様に守られ、この酷暑をほぼ乗り切れましたことを深く感謝しています。両施設では弱い方たちの発熱、食欲不振が頻発しました。誰も彼もが、力と知恵を尽くす日々となりました。そうした中でトピックスをお知らせいたします。

夏まつり

八月十八日は恒例の「夏まつり」です。早くから周到な準備がすすめられていました。当日も朝からガラガラと暑い空でしたけれど、三八度をものもしないつわものどもが沢山います。熱い意気と

流れる汗の中で、広い駐車場には提灯も吊られ、西脇太鼓の舞台も出来上がりました。

内ではみぎわ会オリジナルのバーベキューコンロに炭火が赤く燃え、やきとりの串、トウモロコシ、ビール、西瓜、おにぎり、おだんご、水まんじゅう等、あれもこれも山盛りのワゴン車が、何台も並びました。その頃、空が少し曇ってきました。みるみる黒雲が拡がり、雷鳴と共に四〇日ぶりの黄金の大夕立が沛然と降りはじめたのは、そろそろみなさんの車椅子大移動をはじめようとする五時前です。急遽屋内の夏まつりへ変更されました。

長い廊下の片側に、一〇〇台近い車椅子がずらりと並びました。色とりどりの浴衣姿の職員に、いつもながらみなさんの表情が変わってきています。私の開会の挨拶は「みなさん、こんばんはー」ではじまりました。どっと湧き上がる拍手に、私はうれしくてうれしくて「みなさん、雨喜（アマヨロコビ）だっせえー」と浮かれてしまいました。

盛んな楽しい夏まつりになりました。次々と流れる音頭に踊りの流れは止まりません。その間にも、園生のみなさんにはごちそうが次々と配られてゆきます。夕食が終わったばかりですが、旺盛な食欲です。いつも全介助のKさんの手が、ゆっくりおだんごを握っているじゃありませんか。誤嚥もなく、心配した夜も何事もなかったと……。

一粒万金の慈雨の下で、みぎわ園の夏まつりはキラキラ輝きました。
ハブニング

二四日、朝礼を終えた直後です。「『松尾医院』と書いたスリッパをはいたおばあさんが、うちの前

で倒れとられるよ」との電話。「ええっ！」みんなの顔色が変わりました。目の色が変わります。すぐ車が出ました。誰？ 誰？ と走りまわる中から、Kさんよ、Kさんよ、いやOさんもない！ Sさんは？ との声飛び交います。Sさんは大丈夫！ Oさん居られます！ ああよかった。間もなく帰ってきた車の中に、Kさんがぐったり横になっています。Kさん、Kさん、と呼びながら車椅子へ、幸い怪我もなく無事です。毎日毎日、包んだり解いたりされていた二つの重い荷物も、一緒に帰ってきました。こんな重い荷物を両手に、一キロ近くも暑い日の下、車の多い道を必死に歩いて行ったKさんの姿を思うと、泪が流れる想いでした。

「Kさん、暑くてしんどかったでしょ、けがしなくてよかったわね」C・D用の部屋で休んでいるKさんの横に座りました。仲よしのSさんが「私の責任やわあ」と、まじめに心配して下さいます。「みなさんにアイスクリーム、ネ」と私。すぐナースが走り、大きなアイスクリームのカップ四個が届きました。「さ、アイスクリームよ、いただいて元気出しましょうネ」それぞれにカップが渡されました。ナースはKさんの口に、励ましながらクリームの匙を運んでいます。「Sさん、あなたもどうぞ」「いえ、先生どうぞ」「いいのよ私は」「いえ、先生どうぞ」「……」「……」「そうお、ありがとう、じゃ半分ずつしましょう」

私はカップから大きく一匙すくいましたが、もうクリームは溶けはじめ、ベトベト手に腕に流れてきます。「あつ何か拭くもの！」私の声にSさんが、自分の引き出しから白い紙を出して下さいます。どンドン、どンドン長く白い紙！ トイレットペーパーです！ A・DのSさんもまた、いくつかのロー

ルをしまつていらしたのです。思わずナースと視線が合いました。ポロポロとこぼれてしまう白い紙で、ネバネバの手を拭きながら、私はまたしても泪のにじむ気持ちでした。と、「あつ、ダメダメ」とナースの声に見れば、小柄なCさん（A・D）が自分のカップを平らげ、まだぼんやりしているOさんのカップをせつせと食べはじめていました。

いつも忙しく、楽しく、時に哀しいみぎわ園ですが、そここに小さな秋が生まれています。

※C・DⅡ脳血管性痴呆

A・DⅡアルツハイマー性痴呆

稔りの秋

（平成六年十一月）

秋が深まってきました。この辺りにも、微かに日一日紅葉してゆく天然の業を見せられています。みなさまが快い朝夕をお過ごしのように祈りつつ、お便りをいたします。

昭和四四年五月、長い経緯の上でやっと五〇床の「みぎわ園」が誕生いたしました。その正門のテープカットの式で、当時みぎわ教会の牧師であられた長谷川寿一先生が、「ここが天国の門になるように」と祝福して下さいました。

以来二五年余、六〇〇名余の方々が、みぎわ園から天国へ旅立ってゆかれました。

私たちは、そのお一人お一人の長い人生のラストステージではじめてお出逢いし、施設ケアという形の中で何十年、何年、または僅か数ヶ月のお交わりを重ねた上、終末の看とりをし、新しい旅立ちをお送りしてまいりました。寮母として、ナースとして、医師として、またそれぞれの職務の上で、誰もが心を尽くしてとりくんでまいりました。去りゆかれるみなさまの越し方を知ることが殆どなく、またこちら側からたずねてゆくこともいたしません。ただ、みなさまが残されたライフ・スタイルの印象から、なんとなく「一人の人の運命」を想わせられるばかりです。

今年はこの三ヶ月余に、九三歳、九八歳、九三歳とそれぞれ長寿を生き抜かれた、そして共にキリスト信仰を守られた、三人の女性を相次いでお送りいたしました。

ご自分の過去を固く閉ざし、お元気な間は一生懸命園内の細々したことを黙々と手伝って下さったKさんは、二一年余の在園でした。ただ、亡きあとのご遺骨についてのみ、私にしかと託して下さいました。

殆ど声に出ることばの少ないFさんは、ただ静かなほえみでYes、Noを表す方でした。病気の苦痛の訴えも少なく、ただ静かに去ってゆかれました。九三歳です。昇天二週間前の礼拝にも出席されたのです。

Yさんも九三歳、いつも美しく装い、自分らしい気品を漂わせている方でした。母教会への熱い想いで、不自由な足でよく神戸にもいらつしやいました。発病後（脑梗塞）は、どんなことにも「ありがとう、ありがとう、感謝です」と落ち着いたほほえみを見せられ、「天国への特急券がほしい」とユー

モアを交えて私に仰ったのですが、本当に神様から特急券をいただきました。急変した病床で「主よ おわりまで 仕えまつらん……」と賛美を残して下さいました。

それぞれ波乱に満ちた長編の「女の一生」を残されているでしょう。みなさまが、今は真の平安とよろこびの中で、聖書に約束されたように、神様にその眼の涙を拭われていらつしゃると私たちは信じています。

静かな稔りの秋です。

天使たち

(平成六年十二月)

十二月です。寒くなりました。今年も過ぎてゆきます。十二月といえば、街々には例年のように大きなクリスマスツリーが立ち、イルミネーションが輝き、賑やかなクリスマスシーズンが演出されてまいります。

聖書によれば、本当のクリスマスは、まず荒野で夜も眠らず羊を守っていた羊飼いたちに、天使たちの歌と共に知らされたと、尊く美しい情景が記されています。今月は、天使と私のことをお聞き下さい。

前月号でご存じだと思いますが、今年の秋で私は八〇歳になりました。七〇歳から八〇歳までの一

○年間は公私ともに、大変むづかしい問題や、辛いこと、哀しいことが、後から後へ大波のように打ち寄せる時でありました。けれどもみぎわ会はその中で、少しずつ新しく、また大きくなり、施設としての力も加えられてまいりました。祈って待つよりほかなかったお金も、勝れた働き人も、必要なだけは与えられてまいりました。

多分人たちには、苦しみに打ち伏せられた私のうめき声も涙も洩れず、いつもちつとも苦しんでいない人のように見られてきたのでは、と思います。すごいことだと、自分の内深く思います。近頃、この一〇年をふり返りみて、「主の天使たち、主をおさるる者のまわりに営を連ねてこれを助く」という、古い聖書のことばをしきりに思い出させられていました。

天使といえば、泰西名画によく見る愛らしく清らかなエンゼルを思い浮かべます。私はこうした天使たちが、目に見えないけれど輝く翼を連ねて、私を敵の手から守って下さったことを思いました。詩篇三四篇に「主の使は、主をおそれる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられるという一節を探し出した時は、よろこびに溢れました。

一〇月半ば、私の傘寿を祝って数名の方が夕食会を催して下さいました。長い年月、私と共によろこび、共に苦しんで下さった代表的な人たちです。とてもうれしい一夜でした。が、このお招きを受けた時、やっと私の目が開かれたのです。

みぎわ会と私が今日まで生かされてくる間も、次から次へ私に攻めかかる苦難の中でも、私を守って下さった天使たちは、ここに居るこの人たちではないか！ そうしますと、みぎわ園、いずみ寮を、

そして私をとりかこんで守って下さる天使の大陣営が見えてきました。みんな神からつかわされた天使の大群です。

これが、八〇歳の長寿と共に神様からいただいた、今年最大のプレゼントでございます。みなさまをとりかこむ天使たちを見出し下さるよう祈ります。

幸せな年をお迎え下さいますように。



わたしの小さなたより 第二集

2002年5月31日

著者 —— 松尾 周子

印刷 —— ウニスガ印刷株式会社

